椿色飾る人食い

ねこじゃ　じぇねこ

！18禁要素を含みます。本作品は18歳未満の方が閲覧してはいけません！

注意事項

【小説タイトル】
椿色飾る人食い

【Ｎコード】
Ｎ３８６２ＢＣ

【作者名】
ねこじゃ　じぇねこ

【あらすじ】
「魔物」という抽象的な存在を怖がらない野良猫少女は、とある美しい女――椿木レオナに誘われるままに椿木家の娘ミユとなった。

0．人食いは美しいものに酔いしれて

その光景はいつも私に安らぎを与えてくれる光景。
窓から差し込む月の光が美しく照らしている夜。

私と彼女以外の誰もが見られない美をじっくりと味わう夜。その美に彩りを与えてくれるのは、彼女の悲鳴。悲痛に歪む表情。そして、その眼から段々と失われていく光。この上ない愛を込めた接吻を交わし、彼女の最期を味わって、味わって、味わい続けて、彼女から零れる赤い蜜を貪って、人間などという概念から解放される夜。

ああ、私はこの夜を愛している。この夜を造り出してくれる全てを愛している。これで、彼女は私のモノ。私だけのモノ。もう誰にも取られない。彼女は私だけのモノ。そこに完全なる美が生まれる。
この儀式は、神聖なこの儀式は、私を私として成り立たせるのに欠かせない儀式。愛するモノと同化する事で、私は私でいられる。
ああ、私に吸い取られていく彼女は、段々と冷たくなっていく。その美しいこと。そのいじらしいこと。狂っているという言葉だけでは足りない。それでは、表現しきれない。この素晴らしさ、この美しさは、どうせ、他人には理解出来ない。

最期が近づいて来ている。抵抗していた彼女の力も弱まってきている。それが完全に途絶える前に、終わらせなくてはならない。さあ、これで最期だ。この子は私のモノ。もう誰にも触れさせない。そうして、私はまた、完全な私に戻れるのだから。

美しい。全てが美しい。月明かりの照らすこの部屋に飛び散る濁

った血の色が、生きた肉の塊と化している彼女の身体が、そして、私を狂気としか理解していない彼女の目が。

美しい。美しい。美しい。

彼女の悲鳴が、飛び散る血が、崩れ落ちる肉が、汚れる床が、鉄の錆びたような匂いが、赤と黒の色合いが、涙と血でぐちゃぐちゃになった彼女の目が、剥きだしになった彼女の臓器が、血に塗れた乳房が、隠す術も持たない陰部が、噛み傷だらけの首筋が、腕が、足が、その全てを照らす月が……――。

血の味も、肉の味も、とても美味しかった。

1．野良猫を魅了する淑女の手招き

剣と魔法が支配する世界。

ここはそんなおとぎ話のような世界ではないけれど、魔物だけはわたし達の生活を脅かしていた。せめて、魔法というものがもっと身近なものだったら、魔物に怯えたりなんてしなくてすむのに、わたしの暮らすこの世界では、人間の群れから離れてしまえばたちまち魔物の御馳走と化してしまう。

そんな世の中だから、人として生まれたわたしは、人から離れて暮らす事なんて出来なかった。

人の群れの中に生まれてからずっと、わたしは周囲の人達との間に壁を作って生きていたのだそうだ。そんなこと、自分では気付かなかったのだけど、そう教えてくれたのは、わたしを育ててくれた人だった。わたしを育ててくれたのは、わたしの実母でも実父でもなくて、ただ運悪く生まれてすぐに母に死なれたわたしを引き取る羽目になっただけのことだったから、家庭にはわたしの居場所なんてないのも当たり前だと気付いたのは、十歳になるより少し前だったかと思う。

ある時は家に入れて貰えず、ある時は逆に外どころか暗い部屋から外へ出して貰えない。家の人達の気が済むまで縛られて、折檻されて、わたしはいつも泣いてばかりいた。理由なんていつも理解出来なくて、だから、理由なんて考えもしなかった。

ただ、わたしはここにいるから、こんな目に遭わされているんだとだけ納得していた。

十歳を過ぎて少し経った頃、今までの待遇が少し変わった。家の者達がわたしに対して奇妙な事をするようになったのだ。それが、性的行為だったことに気付いたのは、もっと大きくなってからだった。

気付いた途端、わたしは家に戻れなくなった。追いかけてくる事もないだろうとは思ったけれど、それでもやっぱり怖かった。

気持ち悪い。世の中の全てが気持ち悪い。歪んで見える。それでも、家を離れてしまえば、少しはマシに見えた。生活に困ったけれど、食べるものに困ったけれど、この自由を知ってしまったら、そんなことどうだっていい。このまま飢え死にしたとしても、あの家で死ぬよりもずっとマシだった。

今のわたしの生き方なんて、人間と認められないくらい惨めなものなのだろうけれど、性奴隷同然だったあの家での暮らしに比べれば、今の方が何百倍も誇り高く生きていられる。

他人はどうしてか、わたしを化け猫と呼ぶけれど、それでも構わなかった。蔑んでいるつもりなのかもしれないけれど、何とも思わなかった。食べ物を得て、それを食べて、腹を満たすだけの生活。今生きることだけを考える生活。寝る場所に困る生活だったけれど、毎回、どうにかなっていた。

そんな野良猫生活も、慣れれば楽しいものだった。あの家にいたときよりもずっと沢山の仲間に囲まれていたし、孤独も段々と薄れていった。もうこの生活を捨てるなんてことは出来ないくらい、わたしはこの生活を幸せだと思っていた。一番不安なのは、周りに誰もいないことだった。

人々の暮らしの影に潜んでいる魔物達の影。だけど、家の中という安全であるはずの壁に囲まれて暮らしていた時よりも、恐怖は薄らいでいった。何故かは分からないけれど、今はそこまで魔物なん

て怖くない。魔物も、今のわたしには近づいてこないような気さえしていた。そして、今や、独りになっても平気なくらい、わたしは魔物を恐れなくなっていた。

魔物はしばしば人の皮を被って現れるという。だけど、所詮人も魔物と似た性を持っていたりするせいで、その本質が人なのか魔物なのかは、本人にしか分からないのだという。それなら、同じじゃないか、とわたしは思った。彼らに出会ってしまって死ぬかどうかなんて、運がいいか悪いかだけの話だと思っていた。殺されてしまうのならば、相手が人間であれ、魔物であれ、同じ事だ。世の中には、同じ種類の生き物とは思えないくらい残酷な事をやってのける人間もいるっていうことは、よく知っているから、魔物なんて、もう怖くなかった。

それでも、他の人達は魔物を怖がっているようだった。きっと、皆、気付いていないのだ。わたし達の暮らしている群れの中にも、魔物はいつも息を潜めているということを忘れているのだ。

「猫、お前はよく一人で歩いているよな」

そうわたしに言ったのは、同じような生活をしている少年。彼が狐と呼ばれているのは、頭が良くて、まるで妖術でも使っているかのように人々を騙すからだ。その立ち回りは鮮やかで、やすやすと真似なんて出来ない。狐は一種のアーティストのようだった。

「お前は、魔物が怖くないのか?」

魔物という存在は、実はわたしもよく理解できていない。きっと狐もわたしとあまり変わらないだろう。ただ、概念として世の中には魔物がうろついているのだと皆知っていて、今どこに居るのか、目の前に居るのか、襲ってくるのか、という事は、可視的なものでもない。限りなく抽象的なそれを、皆が怖がっている。大人が怖が

るから、子どもも怖がる。いや、子どもが怖がるから、大人が怖がるのだろうか。どちらが最初だったなんて、誰にも分からないそうだ。魔物はいる。でも、それを具体的に感じることは、なかなか出来ない。その見えない恐怖を前に、人々は生活に安定を求める。

「わたしは……」

いつからだろう。そんな魔物があまり怖くなったのは。家を飛び出してこの生活を始めたことが影響していることは考えられた。でも、いつからなのかはよく分かっていない。魔物なんて本当はいないのではないかとさえ思ったりもした。そんなことを考える方が愚かだというのがこの社会の価値観。

だけど、いつまでも抽象的な彼らの存在は、わたしの中でさほど大きなものではなかった。

だが、そんな事を他人に言って何になるだろうか。これはわたしがわたしとして生きるための一つの考えに過ぎないのだから、主張した所で、オナニー以外の何者にもならない。わたしは、他に必要以上に自分を見せるという行為があまり好きではなかった。その線引きは曖昧なものではあるけれど。

「魔物なんて存在、忘れていた」

わたしがそう言うと、狐は眉を潜めてわたしを見つめてきた。それもそうだろう。彼は偉大な妖術を秘めていると言われているけれど、いつも人気のある所で過ごしている。人間が好きで、人間の息のかかっている場所で過ごしている。それは、魔物への恐怖の裏返しだ。言われなくても分かるし、この世界の殆どすべての人はそうやって生きている。

家を持っていたとしても、いなかったとしても、それは変わらな

いことだった。

「お前はいつも自虐的なのだな。俺だったら、そんな危ない事は無闇にやらないけれど」

「面倒なだけだよ」

「俺だって面倒だからやらないのだよ」

そう言って、手に持っていた彼は鶏肉を齧った。何かの仕事の報酬で貰ったといっていたけれど、その仕事が何なのかは聞かないでおいた。

誰から貰ったのか、そうでないかなんて、知ったところでどうしようもない。

「なんか、面倒っていうのも、人それぞれなのだな」

ぽつりと漏れた狐のそんな一言が、すべてを表しているとわたしは思った。鶏肉を齧る彼はまさに狐のようだった。他人には興味なさそうなふりをしておきながら、自己主張と質問で他人と関わろうとする彼。さほど魔物というものを恐れず、他人との間に壁を作っていると言われながらも、人間の群れの中に身を潜めるわたし。その根本にあるものは同じのようでいて、細かくは違う。違って同じで、同じで違う。それが、分かっていそうで分かっていない基本的な事だったりする。

「しかし、お前は警戒心が足りない気がするぞ。世の中には魔物に殺されたとしか思えない人だっているのだし」

「殺された時は、運が悪かった時」

狐のような事をわざわざ言う人は、何人もいた。わたしを育ててくれたあの家族以外なら。彼らはわたしが魔物に喰い殺された方が嬉しかっただろう。
それはともかく、忠告を受ける度にわたしは同じような答えを返している。常套文句のようになってしまっているけれど、所詮魔物に会ったことのない人間の言うセリフなのだろう。だからといって、今のわたしにはこれを改める気はなかった。
狐はわたしの答えを聞いて、少し表情を曇らせた。気付いていないわけではない。わたしだって、他人の感情を察する能力も多少は備えているつもりだ。だけど、察したところで、気を効かせるかどうかは、また別の話であるとも思っていた。
「なあ、俺がなんでこんな事を言っているのか――」
「そろそろ行く。もうすぐ日も落ちるよ」
察するけれど、気は効かせない。気持ちは理解するけれど、それには従わない。そんなわたしにとって、今の狐の言葉は聞きたくないものでもあった。彼らにとって、わたしのしていることは、それだけ危険な事なのだ。だけど、わたしにとっては、大切な自分の時間でもある。
それで、死んでしまった時は、死んでしまった時なのだから。
去り際の狐の視線は、刺さるようなものだったけれど、さほど痛くはなかった。ただ、柔らかな慈悲のようなものを含んだその表情は、何故だか心に沁みる。慣れていないのだ。だから、とても苦手なもの。
狐は、あまりに優しすぎるのだ。

「わたしには、冷たい風の方が心地いい」

いつだって風は冷たかった。この生活をしてから、温かい風も吹いているのだということを初めて知ったけれど、それでもやっぱり、温かい風は苦手だった。あの風を感じた途端に、心が苦しくなって泣いてしまいそうになるから。それは、毎日わたしを見下ろしている夕焼けの空にも似ている雰囲気。頬を伝う涙に多分意味はない。何が悲しいのかもよく分からないから。きっと、何かの反射のようなものなのだと思う。ただ、その反射を、あまり他人に見られたくない。

そう、これが、魔物を恐れずに一人でふらふら過ごしている本当の理由。

誰にも知られたくない、わたしだけの理由。

この苦しさから解放されるのなら、魔物に殺されたって構わないとさえ思ってしまう。くだらない。本当にくだらない。それほどまでにわたしは死を知らない。こんな人生だけれど、死を感じるような事は一度もなかった。食べるのに困ったり、終わらない折檻に絶望したりしたけれど、本当に死んでしまうと思ったことが一度でもあったかと問われれば、迷った挙句に分からないと答えるだろう。それほどまでに、わたしは死を知らない。

だから、こんな虚無に捕われる。

くだらない。

その言葉は、わたしのこの儀式を終わらせる言葉だった。夕焼けが沈んで、辺りが真っ暗になった頃に、浮かんでくる言葉。

くだらない。

全ての意味あるものを無意味に帰する魔法のような言葉。こんなつまらない時間を送る事に、他人は意味を見出さないだろうけれど、わたしにとってはきっと、何か大切なことだったのだと思う。そうでなければ、こんな習慣はとっくに抜け出して、もっとマシな時間を過ごしていたに違いない。

ともかく、いつの頃からか、わたしは毎日、黄昏時になるたびに、仲間達から離れて、この時間を過ごしていた。誰の追従をも許さず、独りでふらりと抜けだし、こっそりと帰っていく。この自由な状態は、癖になるほど素晴らしい。

魔物。それがなんだと言うのだろう。憑かれたとしても、襲われたとしても、その時はその時でしかないのに、どうして怖がらなくてはいけないのだろう。

こんなわたしは、狂っているのだろうか。こんなわたしは、何処かが壊れているのだろうか。でも、わたしがそれでいいと思っているのだから、それでいいはずだった。

夕暮れの終わりを見つめるわたしが、ふとこちらを見つめる美しい女性に気付いたその時までは、そんなくだらないことすらも考えられていたのだ。

魔物は、何をもって魔物とするのだろう。狂気に支配された人間との線引きは、一体どこにあるのだろう。そんな定義など、わたしには分からないけれど、どちらにせよ、それは恐怖に変わりなかった。本物の魔物であれ、偽物の魔物であれ、恐怖は平等に訪れる。恐怖の対象となるものの本質が何であるかということは、実は関係ないことのかもしれない。

そんなことを、後になって考えた。

ともかく、その時からすでに、わたしは、多少なりともその女性が気になっていた。ただ、その美しさは気にならないほどのものではなく、夕暮れに照らされる彼女の姿はとても優美なもので、しばらくの間、そんな彼女に見惚れていたものだった。

間違いなく、彼女はわたしを見ていた。見たところ、わたしよりも何百倍もマシな暮らしをしていそうな人間。そんな人間が、わたしのような汚らわしい偽物の猫に興味を持つのは、不自然なことだ。だから、美しさを感じる裏側で、わたしは彼女を警戒していた。

彼女はわたしをじっと見つめると、ふと笑みを浮かべた。彼女の微笑みはわたしの身体を冷やすどの風よりも冷たくて、とても心地よいものだった。その声もまた、うっとりするような美声。彼女のことをじっと見ていると、心まで奪われてしまいそうだった。

「この辺りで、魔物を恐れないで一人でふらふらと歩きまわる猫がいるって聞いたのだけど、あなたのこと？」

彼女に問われ、わたしはどうにか頷いて答えた。そんな特徴のものなんて、わたしくらいしか思い当たらない。

「そう。思ったよりも簡単に見つかったわね。何処か自暴自棄な雰囲気も、聞いていたよりはしないものね」

誰から何を聞いたのかは知らないけれど、こんな人がわたしに何の用だというのだろう。わたし自身には勿論、想い当たりも何もない。彼女のような人がこんな辺鄙な所に一人で現れるなんてこともおかしいし、とても奇妙だった。

……そうだ。どうして、彼女は一人でいるのだろう。彼女のような美しい人こそ、魔物を恐れて無闇に一人で出歩いたりしないとい

うのがわたしの中の常識だった。
所詮、わたしの常識なんて、通用するような常識さでもないのかもしれないけれど。

「あなたは、誰なの？」

わたしの声は、自分で思っているよりもずっと震えていた。その理由はもちろん、知っている。
それだけ彼女は異質だったし、単純に怖かった。美しさと怖さと不気味さが融合されている彼女。そんな彼女を見ていると、ひとつの恍惚とした感覚がわたしを襲ってきた。まるで、彼女に魅了されてしまったかのようだった。

「私？」

彼女が首を傾げた。亜麻色の髪がゆらりと揺れている。

「名前を教えるかどうかは、あなたの返答次第で変わる」

謎めいたその声。わたしは黙って彼女の言葉を聞いていた。返答できなかったからだ。彼女の眼差しは、まるで金縛りのようで、わたしは想うように動けなくなっていた。
まるで、何かの暗示にでもかかっているかのよう。
この人は、本当に、人間なのだろうか。

「あなたは答えるだけでいい。今の生活を続けるか、新しい生活を始めるか」

「新しい生活……？」

何だろう、それは。わたしにとって、あの家を抜けだして社会から逸脱したこと自体が新しい生活だった。これが長く続かないことなんて分かっているけれど、あの家で閉ざされた未来を待つだけの人生を送るくらいなら、明日もわからずに今をただ生きているほうがずっとマシだと思っていた。

ああ、でも、彼女が言っている新しい生活とは、何のことだろう。分かっている。それが何なのか、分かっている。

そしてそれは、わたしが本心では苦しいほど望んでいることだということも、よく分かっている。

「答えて」

答えをせがむ彼女の目に、きっと、わたしは魅了されていた。

2．飼い猫は椿木の中を迷う

「私の名前は、レオナ。呼び捨てでも構わないわ」

飼い猫には名前と鈴を付けるのは自然な事。

「あなたの名前は、ミユ。私が決めたのだから、ちゃんと覚えるのよ」

わたしは、以前の名前を訊ねられないまま、主人となった彼女から新しい名前を貰った。首に括られたのは赤いリボンと金色の鈴。

今までも、野良犬や野良猫のように暮らしていた者たちが人に拾われていくところを目撃した事はあったけれど、まさか自分が拾われる身となるとは思わなかった。

拾われていく者達には特別な魅力や能力があったけれど、わたしにはそんなものは一つもない。見た目が悪いのではないけれど、とりわけいいというわけでもないはずだ。

だから、どうしてこのレオナとかいう彼女がわたしの主人となろうと思ったのかは分からない。

でも、拾われる事を承諾した以上、わたしの主人は彼女であって、わたしはこの家の飼い猫になるのだ。レオナの家はとても立派なものだった。

彼女が何の仕事をしているのかは知らない。けれど、使用人たちも数人いて、それぞれ働いていた。働く傍からわたしを見つめる視

線があって、わたしは少し居たたまれなくなった。家、というよりも、館なのだろうか。ともかく、こんな場所に縁がない生活をしてきたので、違和感があったし、とても不安だった。館の奥の入り組んだ場所にある部屋に通されて、やっとレオナはわたしに説明をしてくれた。

「ここは椿木館と呼ばれている場所。椿木。あなたの苗字になる名前よ」

椿木。苗字になるという事にまだ実感がわかない。それだけじゃない。ミユという名前も、まだ自分の名前とは思えなかった。

そもそも、わたしは名前というものを持っていないに等しかった。猫、という呼び方が一番しっくりきていたほど。だから、名前に違和感があったと同時に、少し嬉しかった。

ミユ。それがわたしの名前なのなら、抱きしめて、大切にしたい。早くこの名前に馴染みたい。さようなら、今までのわたし。わたしは、今までの名前を完全に捨てて、ミユになるのだ。

「ここがあなたの部屋。あなたの世話係もいるわ。後でこの部屋に来るはずだから、ここで待っていなさい」

そう言って、レオナは立ち去ろうとした。

「待って」

わたしは慌てて彼女を呼び止めた。こうやって名前を貰って、鈴まで付けられた以上、わたしにもやらなければならない事があるはずだった。

だけど、その事については、まだ、何も教えてもらってはいない。

レオナはただ、飼い猫になるか、否かとしか聞いてこなかったのだ。だから、具体的に、わたしはどうしたらいいのか、分からない。

「わたしは、何をしたら……」

「ここで待っていなさい」

レオナはそれだけを言って、立ち去って行った。
わたしが知るべきことは、まだないということなのだろうか。どちらにせよ、分からないということがこんなにも不安だとは思わなかった。
レオナがいなくなってから、部屋に置かれている時計の音が妙に耳に纏わりついてきた。部屋の中はとても整頓されていて、今まで無縁だったような高価な家具が置いてある。さっきから時を刻み続けている時計もまた、立派なものだった。

ふと、背後から視線を感じた。扉が開く気配もなかったのに、いつの間にか部屋の入口に誰かが立っていた。若い女性だった。レオナと同じくらいにも見える。少し年上くらいだろうか。人形のような顔立ちも、レオナに負けてはいない。
だけど、レオナに比べて、その顔には血が通っていないようだった。そういった意味で、レオナよりもずっと人形のようだった。
身なりからして、使用人のようだ。彼女がわたしの世話係なのだろうか。

「初めまして、お嬢様。わたくしは、アンナと申します」

淡々とした声は、無機質なものだった。

アンナと名乗る彼女はガラス玉のような目でわたしを見つめてい

た。人形がそのまま歩いているかのよう。落ち着いた色合いのゴシック調の清掃服を着ている彼女は、まるで、この館のためにデザインされたインテリアのようでもあった。着ている、というよりも、着せられているのだろうか。それくらい、彼女には生き物らしさがなかった。

「お嬢様のお世話はわたくしが致します。ご主人様からの御伝言もわたくしが……。お嬢様は心配なさらず、どうぞ、ごゆっくりお寛ぎ下さい」

「アンナ、さん……」

「どうか、わたくしのことは、アンナ、と」

すかさず訂正され、わたしは戸惑いつつ、言いなおした。

「アンナ、聞きたい事が……」

「はい」

変な沈黙がわたしの口を縛る。だけど、黙っていても仕方ない。勇気を出して、わたしはアンナに訊ねた。

「わたしは、何をしたらいいの？　レオナは、ここで待っていなさいとしか言わなかった」

「お嬢様はここにいればいいのです。何も心配することはありません」

「でも……――」

さらに問おうとして、わたしは口を閉ざした。

こう言われてしまって、何を聞けばいいのだろう。何もしなくていいのだろうか。この場所にいればいいと言われたのならば、それに従えばいいのだろうか。けれど、何かが不安だった。それだけの説明では、不安を拭う事が出来なかった。

「お嬢様は、ただ、御主人様の言うとおりになされればよろしいのです」

アンナはそう言うと静かに微笑んだ。その笑みの冷たさは、レオナが見せたものにそっくりだった。

こんなにも違う二人が、同じような笑みを見せると、この館自体が同じ匂いを纏っているようにすら感じてしまう。

椿木館。もしかしたらこの館は、冷気に満たされた心細い場所なのかもしれない。

結局、わたしが何の返答も出来ないうちに、アンナは行ってしまった。

いまのわたしにするべきことはないという事だろうか。

鈴をつけられ、名前を貰ったわたし。安全で、豊かで、憧れていたはずの暮らしが始まろうとしているのに、わたしの心は何処か不安に駆られ始めていた。これが、環境が変わることからのストレスに過ぎなければまだいい。そうであると信じたい。

美しさに満たされた椿木館の生活が、わたしの願っている通りのものだと信じたい。ああ、わざわざ信じたいと言葉にしなければならないほど、わたしは緊張しているのだ。どういうわけなのだろう。

分からない。分からないということは、とても怖いことだった。

「レオナ……」

出来れば、もっと話したかった。どうしてわたしがここへ来ることになったのか、どうしてわたしを選んだのか。聞きたいことは山ほどあった。

アンナに聞いても仕方ない。レオナ本人から聞かなければ、納得出来ないのだから。

椿木館。ここは、どういった場所なのだろう。

別に、この部屋から出てはいけないとは言われなかった。館の中をうろついてはいけないなんて、言われなかった。これから、わたしはここに住む事になるのだ。

椿木の姓を名乗り、この館の者としての生活が始まるのだ。

ならば、この館の事をもっと探ってもいいだろう。世話係であるはずのアンナは、今は教えてくれる様子はなかったけれど、少しだけ、出歩いてみても怒られはしないはず。そう思って、わたしは宛がわれた部屋を抜けて、廊下へと出た。

床はつるつるで埃一つ落ちていない。さり気なく飾られている美術品も、もしも手に入れて売ったら手が震えるほどの額に換金出来そうなものばかりだった。もちろん、盗むなんて度胸すらもなくなってしまうくらいのもの。壊してしまえば、殺されてしまうのではないかというくらい、高価なものばかりに見えた。所詮、わたしの視点からみた価値だ。この館の者達にとってどのくらいの価値なのかなんて分からないけれど、それでも、わたしの緊張は深まるばかりだった。

廊下を抜けたところで、小さな階段が見えた。館に入った時に、大階段が見えたけれど、そことはまったく違う場所に繋がっていそうなところだった。使用人達の姿は見当たらない。そういえば、部屋を出てから誰にも出会っていなかった。

「上は、何だろう？」

このフロアは一階。
二階があるのは確かだ。
外から見た様子だと、三階以上はありそうだった。
一体いくつの部屋があるのだろう。わたしは好奇心に負けて、階段を登り始めた。

古い木の軋む音が必要以上に響き渡っている気がして、変な汗が出てくる。別に悪い事をしているつもりはないのに、誰かに見つかってはまずいという気がしたのだ。
階段を登っている少しの間すらも、わたしにとっては非常に長い時間だった。見えてきた二階は、一階とあまり作りの変わらない空間だった。部屋数は同じくらい。いちいち開けて確認するのも憚れるので、わたしは廊下を歩いていった。

玄関の場所はだいたい分かる。きっとそちらに行けば、館に入った時に見えた大階段に着くのだろう。では、反対側はどうなっているのだろうか。

好奇心に火がついた自分を止めるのは難しい。わたしはそれ以上考えるより先に、廊下を歩きだしていた。休憩時間なのだろうか、それとも、皆、それぞれ違う場所で仕事をしているのだろうか、誰ともすれ違わない。それどころか、この館に人がいる気配すらしないのだ。誰もいないわけはない。それは分かっているのに、まるで、

この館にたった一人取り残されたような感覚に見舞われて、とても心細かった。だから――。

「君が、レオナの拾った子？」

突然、後ろから声をかけられた時、わたしの鼓動は止まってしまいそうになった。

確かに誰もいないようだったのに、気配すら感じなかったのに、その声はすぐ背後からしてきた。何も悪い事をしているとは思わないのに、とっさに謝ってしまいそうになって、わたしはぐっと堪えた。

声のした方へ振り返ると、そこにいたのは、小奇麗な格好をした男性だった。一見すると、女性にも見えなくもないが、声と細やかな特徴から、男性であることはほぼ間違いない。

よくよく見れば、その男性は、レオナに少し似ていた。

「ミユ、と名付けられたんだったかな？」

「あなたは？」

男性は微かに笑み、近づいてきた。

レオナとも、アンナとも違う笑みだった。温かい血の通ったような笑みなのに、とても攻撃的で、レオナとアンナとはまた違った恐ろしさを秘めている表情。

まるで、決して自分は味方ではないということを主張しているかのような笑みだった。

「俺はレオン。そうだな、レオナと血と魂を分けたきょうだいと言ったら分かりやすいかな」

「レオナのきょうだい？」

「それも、双子のね」

レオンはくすりと笑った。

双子、ということは、兄も姉もほぼ関係ないという事になりそうだが、少し妙だった。

レオン、レオナ。この館には、何人の者が住んでいるのだろう。最初、この館にいるのはレオナだけだと思っていた。館に仕える者達の態度が、この館の主に向けられているものだったからだ。

だけど、このレオンがレオナのきょうだいであるというのは、嘘ではなさそうだ。ということは、この館は誰のものなのだろう。レオナのものであって、レオンは住まわせて貰っているのだろうか。それとも、その逆？

「ふうん、君は野良猫だったのだよね？」

レオンに訊ねられて、わたしは機械的に頷いた。

「それにしては薄汚れてはいないようだ。レオナが目を付けるだけのことはありそうだね。まあ、せいぜい、レオナの機嫌を損ねないように気をつけることだよ」

そう言って、レオンは去ってしまった。

機嫌を損ねる？

確かに、レオナは怒らせると怖そうな人ではあった。

第一印象だけれど、逆らってはいけないような雰囲気があった。
それにしても、と、わたしはレオンの立ち去った方向を見つめた。新しい環境に入れられて、頭が追いつかない。この館の中で、レオンとかいう彼はどういう立場にいるのだろう。教えて貰えるのならば、聞きたい事も山ほどあった。
だけど、わざわざ追いかけていって訊ねる気にもならなかった。

どうするべきか、一瞬悩んだが、わたしはさらに先へと進む事にした。廊下の奥は明りが切れていて、とても暗くなっている。まるでわたしの今の心情を表現しているかのようだった。
もしその場所で話しかけられたら、悲鳴をあげてしまうかもしれない。レオンに出会ったのがその前でよかったと思う程、明りの切れた場所は恐ろしかった。

突き当たりまでくると、また階段が見えた。上にも下にも続いている。
構造を考えると、上もまたここと同じような作りになっているのだろう。
下に降りれば、用意された部屋の近くに出られるかもしれない。
さて、どうしよう。

「怖いのかな、わたし」

ふと自嘲的な笑みが漏れてきた。
こんな立派な壁に囲まれた場所よりも、生まれ育った家や、家を飛び出した後の生活の方が危険で一杯だった。行方不明になった者は、男女問わず沢山いた。
だけど、わたし達のような者の一人や二人が消えたところで、誰

も注目なんてしない。
結局、わたしの達の仲間内で噂が広まるだけに留まっていた。
それが、魔物の仕業だと信じている者もいれば、魔物ではなく、他でもない人間の仕業だと知っている者もいた。中には、魔物に攫われたとしか思えないような者もいたけれど、殆どの場合は、わたし達のような人間を消耗品程度にしか考えていない人間達の仕業であると、わたしは知っていた。

そんな環境で生活していたというのに、いまのこの圧倒的に安全であるはずの状況は、とても不気味で不安で心細くて恐ろしいものだった。
わたしは、こんなにも勇気のない情けない人間だっただろうかと思う程、妙に身体が震えてしまう。

三階は何があるのだろう。気になるけれど、見に行くまで気になるのかどうか。今までわたしを動かしてきた好奇心すら、衰退しはじめている。

——せいぜいレオナの機嫌を損ねないように。

経った今、レオンに言われた事が何故か心に強く残っていた。
下手な行動には出ないほうがいいのだろうか。それとも、気にしすぎなのだろうか。
判断はつかないけれど、レオンの言葉は確実にわたしの足を鈍らせていた。いっそ、誰にも会わなければ、何も考えずに館の探索をすることが出来たというのに。
わたしはさっそくレオンの存在を疎ましく思っていた。

――レオナの機嫌を損ねないように。

損ねてしまったら、どうなるというのだろう。想像はまったく出来ない。だが、とても不吉なことであるのは確かだった。そして、わたしは、そんな不吉な事を言われたというのに、それを無視して行動できるほど、勇敢でもなかった。

一段、一段、ゆっくりと階段を降りる間も、木の軋む音が耳に障った。明りが切れているのが、とても痛い。一階の廊下の明りがまだ救いだった。

階段を降り切って廊下へと出ると、すぐにわたしはその人影を見つけた。戻ろうとしていた部屋の前に彼女はいた。アンナだった。アンナはわたしに気付くと、軽く一礼をした。

「お嬢様……」

頭を上げたアンナはわたしをじっと見つめ、告げた。

「お夕食の用意が整いました」

3．その愛撫は珍妙な麻薬

夕食は名前も知らない豪勢な料理ばかりだった。

どう考えても食べ切れない量の料理が大きすぎるテーブルに並べられ、その端っこにぽつんと座らされてとる夕食は、今までのどんな食事よりも緊張した。壁際にはアンナが黙ったまま立って、わたしが食べ終わるのを待っている。誰も一緒に食事を取るつもりはないらしい。

生まれ育った家でも、一人ぼっちの食事は多かったけれど、これは違った意味で孤独だった。

ふと、つまらない事で言いがかりをつけられていたあの頃が記憶に甦ってきそうになる。

家を出てからは全然思い出す事なんてなかったあの感覚が、わたしの頭を締め付けてくる。スプーンを持つ手が、震えてきた。

「他の人達は、何処に居るの？」

わたしは堪らなくなって、アンナに訊ねた。アンナは表情を変えることなく、淡々とだけれど、ちゃんと答えてくれた。

「お屋敷の方々は、皆さま、それぞれご自身のお部屋でとられていらっしゃいます」

「え、と、じゃあ……」

「わたくしどもは、違う時間に違う場所でとるのが決まりです」

わたしの質問を見越したように、アンナはそう答えた。

「他に聞きたいことは？」

冷たい視線でそう問われて、わたしは口籠った。

冷たさが美しさを創り上げることは知っているけれど、この美しさは触れれば触れるほど傷つくものなのだという事を実感した。

アンナの冷たい視線を浴びながら、わたしは黙って首を横に振った。

夕食が食べ切れない事は仕方のない事だと自分に納得させて、わたしはアンナに告げた。

「あの……わたし……」

お腹が一杯で食べ切れない。そんな事言ってもいいのだろうか。生まれ育った家でも、家を飛び出した後の生活でも、食べ切れないくらいの食料に囲まれることなんて無縁だった。そんな生活をしている人達がいることは知っていたけれど、今日食いつなぐ事ばかり考えているわたし達にとって、そんな奴らは敵視されて当然の存在だった。

それなのに、そんな敵視されて当然の存在に、わたしがなっているのだ。それは、とても苦しい事だった。せめて、全部食べてしまいたいけれど、食べ切れない事実は覆せない。

「お腹が一杯で……」

「畏まりました。それでは、お食事はこれまでにして、お部屋で休まれてはいかがです？」

そう促されてほっとした。と、同時に、何故だか悔しかった。
あまり考えてはいけない。もう少し前までのわたしではないのだから。

アンナの冷たい視線に追われながら、わたしはそそくさと食堂を出た。
廊下へと抜けても、まだあの緊張と嫌な気持ちは抜け切れない。やはり、部屋でゆっくりするのが一番なのかもしれない。食堂から自室までは、そう遠くはない。だけど、何だか身体が火照っているようで、気持ちが悪かった。きっと、緊張しすぎたのだと思う。
思えば、あの家に居た頃は、体調が万全だった時なんて一度もなかった。

自室へと戻って、ベッドに横になった瞬間、全身の力が抜けた。緊張から解放されたのだろうか。気付けば汗もかいている。それだけそわそわしたのだと思う。疲れているのだろうか。
ともかく、わたしは早くこの生活に慣れてしまわなくてはならないのだ。きっと、慣れていないだけなのだ。そう思いながら就いた眠りでは、夢を一切見なかった。
きっと心の何処にも夢を見る余裕なんてなかった。見たとしても、嫌な夢だっただろうから、むしろ夢なんて見なくてよかったのかもしれない。

ふと、わたしは目を覚ました。わたしにとってみれば、ベッドに入って少し目を瞑っていた程度の感覚だったけれど、どうやら数時間ほど経っているようだった。
目が覚めたのは、物音を感じたからだ。何の物音かなんて考えるまでもなかった。部屋の入口に誰かが立っている。最初は暗くてよく分からなかったのだけれど、目が慣れてきて、それが誰なのか分

かった。アンナではないことはすぐに分かった。
けれど、アンナによく似た背格好の人物。
目が慣れる少し前に、それが誰なのかは予想がついた。そして、その予想はきちんと当たっていた。

「レオナ……？」

「丁度よく目を覚ましてくれたわね」

レオナで間違いなかった。白いネグリジェに身を包む彼女は、闇の中に浮き上がって見えた。
その目は、窓から差し込む月光を受けて光っていて、わたしには少し不気味に見える。そして、彼女が浮かべた不敵な笑みもまた、その不気味さを際立たせた。
レオナは静かにわたしの横たわるベッドへと近づいてきた。慌てて起きあがろうとすると、レオナはわたしの頭を掴み、抑えつけてきた。

「な、何を……」

「大人しくしていなさい」

声を潜めたレオナの表情から、その心情は読み取れない。わたしは怖くなった。何をされようとしているのか全く分からなかったからだ。

「あなたは大人しくしていればいいの」

宥めるようなレオナの声が逆に怖かった。空いている方の手で、レオナはわたしの背中をなぞっていく。何をされているかはすぐに

分かった。アンナの用意してくれた服が、レオナのなぞるような手にあっさりと抜け落ちていく。

「やめて……」

「どうして？」

レオナの一言に、わたしは口籠った。戸惑ったというのが正しいだろう。レオナが何をしようとしているのか、予測がつかない。途轍もなく恐ろしい事をされようとしているような気がしてならなかった。

けれど、それ以上の抵抗は出来なかった。レオナの目が光っているように見えたからだ。彼女のその威圧的な目が、とても怖かった。わたしの身体をなぞっていく彼女の目が、とても怖かった。

「大丈夫。力を抜いて。優しくするから」

そう言ってレオナは、わたしの首筋に口づけをした。
体中が強張った。捕食されるというのはこういう感覚なのだろうか。

断じて言える。彼女にされているのは、性的交渉などではない。仮にそんな気持ちが含まれているとしても、大部分はもっと違った気持ちで占められている。わたしはその大部分の気持ちを恐れているのだ。怖い。とても怖い。生まれ育った家でされてきたあらゆる虐待よりも、ずっと怖かった。
相手を怖がらせる何かがこのレオナにはあるのだ。怖い。
全身から力が抜けて、動けなくなってしまう。

「お利口ね。痛いのは少しだけよ。すぐに気持ち良くなるから」

レオナの吐息が首筋にかかる。胸元から腹部まで、爪でなぞられていくのが痛い。
段々とその手は両足の付け根まで伸びていく。このままわたしの身体は引き裂かれてしまうのではないか。そんな気がして怖かった。

「そんなに力まないで」

レオナの舌がわたしの胸をなぞっていく。生まれたままの姿になってしまっていることが恥ずかしいという気持ちはなかった。そう思う余裕もないくらいこの状況は怖かった。このままわたしは殺されてしまうのだろうか。そうじゃないと信じたい。今は、そうではないと信じていたい。

「ごめんなさい、怖がっているのね。大丈夫よ」

急にレオナの声が優しくなった。

抱きしめてくるレオナの腕が温かい。頭を撫でられると、わたしの身体を縛っていた緊張が解れていった。解れた途端、レオナに抱きしめられているのが温かく感じられた。
この人は怖いのではない。きっとわたしは緊張していて、警戒してしまっていたのだ。
生まれ育った家でされていた事と、似ているけれど違うこの行為。だけど、怖がるわたしを宥めるように撫でるその手の感触は、生まれて初めて感じるものだった。

レオナは悪い人じゃない。そう確信した瞬間、わたしもまたレオナに抱きついていた。
怖いという感情は何処から現れたのだろうか。わたしの誤解？

それとも、本能？　どちらにしても、もうわたしはレオナを拒絶する気にはならなかった。

「あなたは私の傍に居てくれたらそれでいいの」

わたしに声をかけてきた時とは違う彼女がそこにいた。使用人に対して、気丈に振る舞っていたところも、この館へ来た時に垣間見えた。なのに、今のレオナは違う。

まるで、怖いものから逃れようとする子どものように、わたしを抱きしめてくる。

「お願いよ。あなたは私を置いて行かないで」

「レオナ？」

何が彼女を苦しめているのだろう。分からないけれど、わたしはレオナに抱きついたまま、綺麗な髪をそっと撫でた。わたしも撫でて貰って落ちつけたのだから、そのお返しのつもりだった。だけど、それはお返しにはならなかった。

一瞬の事で、わたしには何が起こったのか全く分からなかった。けれど、手首の痛みと、恐ろしく見開かれたレオナの眼光によって、してはいけないことをしてしまった事に気付かされた。何が彼女のスイッチだったのかは分かっている。髪を触った瞬間にそうなったのだ。もっと言えば、頭、だろうか。なんて、冷静に判断している暇もなかった。冷たい眼差しが、わたしの全身を押さえつけている。手首を握りしめている力も強すぎて、とても痛かった。

「ごめんなさい……」

わたしはどうしていいか分からないまま、謝った。

「ごめんなさい……」

「あなたの役目はわたしの傍に居る事。いいわね？」

静かだけれど強い口調の言葉が降りかかってくる。これに逆らえるほどわたしは強くない。これに逆らうなんて出来るわけがない。それが、わたしの役目だと言うのだろうか。この暮らしと引き換えに、何を払うと言うのだろう。

優しくわたしを宥めたと思えば、力でわたしを抑えようとし始めるレオナ。彼女が分からない。彼女のことが分からない。わたしに求められているのは、何？
この数十分の間に、わたしの頭は混乱しきっていた。そして、それよりもずっと、レオナに触られているところが熱く火照ってしまって、どうしようもなかった。

「レオナ……」

自分の声が甘くなっていることに驚く暇もなく、わたしはレオナに縋りついていた。

「いい子ね。あなたとなら、退屈な日々もマシになりそうよ」

レオナの口付けはとろけるようで、わたしはその快感にどっぷりと浸かっていた。どうして、どうして、レオナにされるがまま。そして、レオナに操られるように、わたしから漏れる声も段々と嬌声に変わっていく。レオナに奏でられるかのように、わたしは喘いでいた。

冷静でいて、冷静でないわたし。気持ちよくて、どうなってもいいくらい気持ちよくて、わたしはレオナに甘えていた。
これが、レオナの目的だったのだろうか。この快感に、易々となびいてしまったことが悔しくないわけではない。ああ、でも、こんな快感に抗うなんて無理に決まっている。抵抗する間もなく、わたしの蜜壺は湿りきってしまっていたのだから。

レオナの冷たい指が、わたしの下腹部へと忍びこんでくる。その快感にわたしは小さく悲鳴を上げた。その悲鳴がレオナの欲を刺激すると知っていながら。レオナの巧みな指の動きで、わたしのなかは刺激されていって、今まで以上の火照りが足の付け根から全身にかけて走っていく。レオナが激しく指を動かす度に、くちゅくちゅと嫌らしい音が響き渡った。わたしの身体は喜んでいる。レオナに食べられる事を喜んでいる。心なんて置き去りに等しかった。好きとか嫌いとかレオナに対して思ってもいないのに、激しい愛を受けるわたしの身体は、この上ない喜びに満たされていた。

レオナがわたしの乳房に吸いついた時、同時に、レオナの指が陰核と膣の両方を刺激して、わたしは息が詰まりそうになった。まるで、本当に食べられてしまっているかのようだったけれど、もう、レオナに対する恐怖なんて何もなかった。
恐怖を感じるほどわたしの心にはゆとりがなかった。もうわたしの心身は、快楽によって支配されている。力によるねじ伏せよりも、快楽によるねじ伏せの方が厄介だとわたしは知っている。それに、本当に抵抗出来ないということは、別にレオナにされても構わないという気持ちが何処かにあったからなのかもしれない。
ともかく、レオナにされるがまま、わたしの身体は絶頂へと導かれていく。気持ちがいい。頭が真っ白になる。食べられているよう

な口付けに、わたしの呼吸が整う事はない。終わりの見えない攻めに、段々と意識まで遠ざかっていくようだった。

これが、わたしの役目？
レオナの玩具になる事が、わたしの役目なの？

——レオナの機嫌を損ねないよう……。

レオンの言葉が甦ってくる。この役目でこの館に居座れるのなら。この役目を果たすだけで、わたしが椿木ミユでいられるのなら、わたしはそれを果たす事に何の躊躇いもない。大丈夫。この生活が苦しくなる事なんて、大丈夫、きっとないはず。気付けば、そう自分に言い聞かせていた。すっかり夜も更け、裸のままレオナに抱きつかれて眠っている時だった。

レオナ。彼女はどうしてわたしを選んだのだろう。彼女の気丈な態度、そして、不安定な優しさと厳しさの奥に秘められているものは、何なのだろう。

——置いて行かないで。

その言葉はまるで、幼子のようでもあった。わたしを力と快楽でねじ伏せて全てを吸い取った彼女は紛れもなく荒々しい女だったけれど、その時の声だけは、母親に縋りつく幼い子どものようだった。

レオナは一体どんな人なのだろう。すやすやと眠る彼女は妖艶で美しい。初めて会った時の神秘的な美しさは薄れてはいない。あの瞬間だけだった。あの瞬間だけ、子どものような可憐さが垣間見えた。

レオナ。この人はどういう人なのだろう。わたしを椿木ミユとしてこの館に導いた女。わたしにとって絶対的な存在となる人。双子の男兄弟を持つ謎の女。怖さと幼さ、強さと儚さを抱えている彼女が、どういう人なのかとても気になった。

レオナ。彼女に取り憑かれてしまいそうだった。この人は、わたしのことを滅ぼすのではないだろうかと、わたしのなかでは何故かそんな恐れが生まれていた。

恐れと欲求が、わたしの中で生まれていた。

レオナ。わたしは彼女の虜となってしまいそうだった。誰かが今のわたしを不幸だと決め付けたとしても、それを救おうと思ったとしても、それは全くのお節介。わたしは、彼女でいい。どんな男も女もいらない。彼女がわたしに求めると言うのなら、わたしはそれに応えたっていい。確かに昨日までは知らない人だった。声をかけられるまでは、知らない人だった。

だけど、まるで、魔法にでもかけられてしまったかのように、わたしは彼女を受け容れている。ああ、きっと、これは仕組まれたことだったのだ。

レオナ。わたしの隣で、わたしを抱きしめて眠る美しい女。妖艶な彼女の笑みがわたしの脳裏を過ぎっていく。けれど、どうして、わたしなのだろう。どうして、わたしが選ばれたのだろう。きっと、運がよかったのだと思う。飽きられるまでの事なのだと思う。

でも、それでもいい。この運が尽きるまで、わたしはこの館にいよう。

居心地の悪さなんて一日目ではなにも分からない。明日、明後日と、この館での生活がどういったものになるのか。それが重要でも

あるけれど、今はともかく全てに身を任せていきたい。そう思った。わたしを必要としているこの女が、どういう人なのか。まずはそれを知りたい。探りたい。

――レオナの機嫌を損ねないよう……。

レオンの言葉を反芻しながら、わたしはレオナの寝息を聞いていた。身体の温もりを感じて、さっきまで行っていた事を想い出して赤面した。同性と寝たのは実は初めてではない。ただ、レオナから漂っていた雰囲気は、正直なところ他のどの女性よりもずっと恐ろしかった。

だから、他にもっと怖い事が待ちうけている気がしたのだ。そうでなかった事に寧ろ安心した。

だけど、落ちついてから想い出してみると、やっぱり恥ずかしい。彼女にされるがまま、素直に喘いだ自分のことが。快楽に身を任せて浸っていた自分のことが。快楽を代償にレオナに吸い取られているものは何だろう。そんな事を考える間もなく、わたしは絶頂を迎えて嬌声を上げて、自分から彼女を求めていた。

そんなわたしのことが、とても恥ずかしかった。

レオンは知っていたのだろうか。わたしがここへ連れてこられた目的を知っているのだろうか。レオンだけじゃない。アンナも、他の使用人達も、知っているのだろうか。

わたしだけが知らない状態なのだとしたら、とても心細い。目的は何なのだろう。はっきりと教えて欲しい。けれど、聞きだすのは怖かった。この生活を続けたいのなら、無難に過ごしている方がいいようにさえ感じた。

だから、わたしはこの夜は、疑問を飲みこんでしまう事を決めた

のだった。

4. 椿木色飾る人食い

　目が覚めると、わたしはちゃんと服を着ていた。
　誰が着せたのかは分からない。レオナまたはアンナなのだろうけれど、アンナは何も言わなかった。アンナは知っているのだろうか。夜にこの部屋で行われていたことを。知らないなんてことがあるのだろうか。そう考えてしまうと、とても気まずかった。
　これがもしわたしの務めなのならば、そのわたしの世話役となったアンナだって知っている可能性が高い。ああ、もう、こういうことはあまり考えないでおこう。混乱してしまうだけだ。

　朝食はやはりとても豪華なものだった。
　今まで食べた事もないような豪華さに、今まで味わったことのないような美味、そして、今まで感じたこともないような満腹感で、朝食後は部屋から一歩も動く気になれなかった。

　こんな生活をしていると知ったら、仲間は羨ましがるだろうか。特に狐は食べ物に拘っていた所があったから、妬みさえするかもしれない。
　生まれ育った家の者達はどうだろう。明らかに今のわたしの方がいいものを食べて、いい部屋で寝泊まりしている。そんな事も知らないだろうけれど、わたしとしてはそれでも気分がよかった。
　何処で過ごすにしても、優雅さの消え失せないこの館。つい昨日まで路上生活者同然だったわたしには場違いなのかもしれないけれど、館主足るレオナに連れてこられたのだから、誰もそれに異を唱

えられる者はいない。
　そう、わたしはすでにこの館での生活を誇らしく思い始めていた。今までのわたしなんてもう忘れた。わたしは椿木ミユ。この館で暮らす権限を持っている者。それはレオナのお陰なのだから、レオナに仕えるのがわたしの務め。

　レオナ。

　彼女を想い出した途端、夜の営みを想い出して、身体が火照った。彼女の巧みな指使いが、たった一回でわたしを虜にしてしまった。そうやって彼女に魅入られた者は何人いるのだろう。
　それを考えると、何だかとてもつまらない気持ちに苛まれる。わたしの心が酷く落ち込むのだ。そう、これはきっと嫉妬。早くもわたしは嫉妬し始めている。おかしい。変だ。どうしてしまったのだろう、わたしは。レオナについて行くと決めた時からだろうか、いや、レオナに出会ってしまった時から、わたしはおかしくなってしまったのかもしれない。

　それならば、務めを果たすまで。

次の夜も、その次の夜も、レオナはわたしの部屋に訪れた。
その度に、わたしは不安定な感情を抱えて暗闇の中を横たわって、レオナの訪れを待っていた。

　しかし、レオナに触れられた瞬間、不安定な感情は治まって、わたしはレオナに全てを捧げることに専念するのだ。所詮、このために連れてこられたのだったら、それを見事に果たすことがわたしの仕事。
　この服も、この部屋も、あの豪華な食事も、もてあました時間も、

この仕事の報酬という事だ。館の生活に慣れれば慣れるほど、わたしはこの仕事を辞める時というものが怖くなり始めていた。

そういえば、館の外の空気を長らく吸っていない。一日の時間は時計で分かるけれども、一体、今が何月の何日なのか、この館に来てどのくらい経っているのか、全く分からないのだ。

暦なんてものは、わたしの部屋にはない。館内のどこかにあるのかもしれないけれど、幾ら探しても見つからない。恐らく、わたしが入室を禁じられている場所にはあるのかもしれない。だって、レオナやレオンが月日を把握していないという事はなさそうだったから。

この館の主は、レオナとレオンで間違いないようだった。アンナに聞いたわけではないけれど、館で暮らし始めればだいたい分かってくる。レオナとレオン以外の家族はいなかった。どうやら、彼らは若くして両親を亡くしているらしい。

そして、二人がこの家を継いだ。でも、レオンにとっては、館の主などという鎖は邪魔でしかないようで、この館の事は住処としか考えていないらしく、館を守るための外部との親交のほとんどはレオナが行っているらしかった。

もちろん、彼らが参加する親交的な集まりに、わたしが行けるはずもなく、わたしは殆どの時間をもてあましながら、平和ボケした退屈な椿木館での生活を送っていた。

そして、ある日、暇に耐えかねてアンナに月日を訊ねてみて、驚いた。初めてここへ来た日から、まだ一週間しか経っていなかったのだから。

七日しか経験していないにしては、レオナの訪れはすでに濃厚な

ものになっていた。

鬱憤の溜まる日常なのか、彼女はいつも荒々しい感情と欲望をわたしに直接ぶつけてきた。

時には身体の自由を奪われて、時にはわたしが同意するよりも先に無理矢理押さえつけて、わたしの務めを強要してきた。その度に、わたしの心は傷んだし、その時のレオナはとても怖かったけれど、生きていくためには仕方ないって思うと、何ともなかった。本当に、何ともなかった。

わたしに仕事をさせるのは、レオナだけ。

レオンはわたしのことなんて、レオナの愛玩ぐらいにしか思っていないようだった。わたしの服を用意して、豪華に着飾ってくれるのは、いつもアンナだったけれど、レオナの指示通りに動いているだけだと言っていた。つまり、わたしはレオナの所有物のようなものなのだ。

でも、割り切ってしまえば、こんなの何ともない。

レオナにはいくつかの逆鱗があった。一つは頭を撫でられること。これは一回偶然にも知ってしまったから、もう失敗はしない。子どものようだった様子が一変して、冷徹で恐ろしい目に変わってしまった事は、忘れたくても忘れられない。その印象が強烈だったから、他にもタブーがあるのではないかと常々警戒していた。そして、その予想は当たっていた。

使用人達の様子からも、察することは出来た。レオナの機嫌を損ねない参考になるから、わたしは暇をもてあましつつも、常に耳は澄ませていた。

入ってはいけない部屋。聞いてはいけない事。触ってはいけない

場所。言ってはいけない言葉。幾つもあった。
特に、入ってはいけない部屋については、何度も自分の頭に叩き込んだ。レオナやアンナが直接わたしに忠告したりはしなかったけれど、使用人達が異様にその部屋を不気味がっているのが、たった七日でもよく分かったから、相当関わってはいけない場所なのだろう。そんな場所に間違っても入らないように、わたしは注意を払っていた。

全ては、この椿木館に居残るため。この館の生活に慣れたわたしが、また元の生活に耐えられるのか、全く自信がなかった。この館から追い出されないように。いつしかわたしはそんな事を考えるようになっていた。

館の者達だけでなく、この館の内情を知る者達から、わたしが人間として扱われていない事に気付いた時は、レオナに連れてこられてからあまり日が経たないうちに訪れた。
レオナがわたしをどう扱っているのかについては分からない所が多かったけれど、少なくとも、アンナを始めとしたこの館の使用人や、レオナのきょうだいであるレオンはそうだと断言できる。

けれど、嫌な思いをさせられるわけではなかった。わたしの知っていた世界では、こういう立場に置かれた人達はとても不幸な身であるはずなのに、わたしはちっとも不幸だとは思わなかった。

夜な夜な愛欲というものに支配され続けている間に、わたしの頭はおかしくなってしまったのだろうか。いや、そうではない。本当に不幸だとは感じないのだ。
話に聞いていたり、想像していたりしていたような生活を、わたしは送っていない。
それどころか、独りで自由気ままに生きてきた時よりもずっと、

わたしの生活は楽そのものだった。一人の時間というものは、あったところでわたしにとってはくだらないものでしかなかった。

人間の中にはこういった時間が欲しいと言う人もいるようだけれど、わたしは違う。一人でもいいけれど、一人の時間を持て余してしまえば、それは虚無でしかない。虚無というのは、確実にわたしの心を削っていくとても迷惑なものだった。

わたしは一人に向いていない。というか、考える時間に向いていない。

何も考えずにその日その日をなんとなく送っていく方があっているのかもしれない。

だから、レオナに誘われて飛び込んだこの生活は、とても向いている生活だった。逆らったら何をされるか分からないという噂も聞いているけれど、そもそも逆らうなんてことがあるだろうか。

確かに退屈で仕方ない時もあるけれど、生活もしくは命すらも投げ出してまでどうにかしようなんて思わなかった。

わたしはレオナに服従している。けれど、それは不幸と同等のことではないのだ。

レオナ好みの服を着せられて、館内で勝手気ままに時を過ごしていればいい。なんて楽な生活なのだろう。レオナの命令に従っていればいいだけの生活。なんて、楽なのだろう。

だけど、その退屈な時間は、確実にわたしの心を蝕んでいっているような気がした。いや、気のせいだろう。きっと、気のせいだろう。

わたしはこの退屈な生活に身を置いていていながら、疲れているのか

もしれない。

毎晩、毎晩、レオナの日頃の鬱憤をこの身にぶつけられているのだ。そんなわたしはただの肉奴隷ではない。時には流血を伴う行為もあった。ナイフを持っていることとあったけれど、持っていようがなかろうが、彼女の鋭利な爪で引き裂かれるのは毎回の事だった。

奇妙なのは、その時のレオナの様子。楽しそうにわたしの身体を引き裂いたと思えば、わたしが怯えた顔をしているのに気付くと、本当に申し訳なさそうな顔をして謝るのだ。それなのに、すぐにまたわたしの身体を引っ掻いて、出てきた血を美味しそうに舐めとる。時には、わたしの肉さえも齧り取ることがあって、その度にわたしは恐怖した。

「絶対に殺さない」という約束の言葉はあった。わたしはそればかりを信じて、この行為を仕事だと割り切って耐えていたけれど、それでも怖さが勝る時は多々あった。だけれども、そんなわたしの不安をわたしの心ごと抑え込む記憶はあった。

――せいぜい、レオナの機嫌を損ねないよう……。

拒絶すれば、レオナは怒るだろう。抵抗と拒絶は全く違う。多少の抵抗は、レオナにとっても嗜みの一つに過ぎないから、反射的に抵抗してしまっても、少し痛い目にあうだけで、そんなにひどい事にはならなかった。けれどこれが、もしも拒絶だったら、そうはいかない。拒絶なんてしたら、何が起こるのか、恐ろしくて考えたくもなかった。

レオナはとても怖い人のようだった。

美しさで包み隠しているその内には、残酷さが秘められているの

だ。その残酷さは、レオナが美しければ美しいほど、際立っているようにすら感じた。彼女のそんな残酷さが垣間見えるのは、使用人に対する態度や、不機嫌な時である。

特に、使用人の失敗に対して、レオナはとても厳しい。使用人の一人に、左頬に火傷を負った娘がいるのだが、それは、レオナの機嫌を損ねてしまった罰として負ってしまった傷なのだと執事長の役目を担っている老人が教えてくれた。

彼が言うには、前頭首であるレオナとレオンの父親が、とても気性の荒い性分だったらしく、怒っている時のレオナはその父親によく似ているのだという。

もしも下手にレオナの逆鱗に触れてしまえば、どうなってしまうのか。もしかしたら、火傷程度では済まされないような事になるかもしれない。

わたしのような、いつ消えても誰も不審がらない程度の身分の者は、使い物にならなければ殺されて、ゴミのように廃棄された所で、闇に葬られて終わりなのだ。生きるためにも、レオナを怒らせるなんてことは、しない方がいい。

そういった決意を固くしたのは、ある朝、館の中で騒ぎが聞こえてきた日だった。

あまりに悲痛な叫びが聞こえたので、わたしは戸惑いつつも、その音がする場所へと近づいてみた。辺りには驚くほど誰もいなかった。

使用人達は何処へ行ったのだろう。

近づかないようにしているのだろうという予想は出来た。関わらない方がいいことなのだろうけれど、気になって仕方なかったわた

しは、音を探り続けて、どんどん歩いて行った。
そして、初めて、この館の地下室へと入りこんだのだ。地下があることは知っていたけれど、近づけばレオナの機嫌を害すと知っていたので、入った事はなかった。
この館の地下は薄暗くて、誰もいないはずなのに誰かの気配がするような、そんな不気味な場所だった。だから、音が地下室からすると分かった時、部屋に戻ろうかと迷った。
だけど、音に混じって聞こえる悲鳴が、とても気になったので、わたしは地下へと足を踏み入れてしまったのだ。

いかなければよかった。

そう思っても、後悔しても、遅すぎる。これはきっと最初からそう仕組まれていたのだと思う。そう思う。わたしが地下室へと向かってしまったことは、ずっと前から仕組まれていた事なのだと思う。きっと、行かなかったとしても、いつかはそれを知る事になったのだと思う。どちらにせよ、地下室へ向かい、格子のついた窓の間から一つしかない部屋の中を覗き込んだわたしは、そのまま固まってしまった。

耳を劈く様な悲鳴。その悲鳴をあげているのは、見知った顔の使用人。
名前は知らないし、あまり喋った事もないけれど、わたしとあまり歳も変わらないし、綺麗な娘だという印象はあった。
だから、地下室の中で行われていることは、あまりにも衝撃的だった。
部屋の中には、二人しかいない。悲鳴を上げ続けるその娘と、そ

の悲鳴を聞きながら氷のような笑みを浮かべるこの館の女王だった。
ああ、使用人の娘が何をしたというのだろう。一体何の罪で、彼女はあんなに酷い目にあわされているのだろうか。硬直したまま地下室の中を覗くわたしが理解出来るのは、もはやあの使用人は、これまでのように仕事をすることなんて出来ないという事だった。
見てはいけないものを見たとはこのことだ。このことだとしか思えない。

使用人の娘は中途半端に服を脱がされていて、露わになっている場所は、もはや肌色でもなかった。血塗れなのは一目瞭然の事、だけど、よく見れば、その赤に紛れて痣も見え隠れしている。何度も打たれた上に、鋭利なもので切られているのだ。だけど、それだけならばまだ良心的だ。なんせ、もっと残酷な事が彼女に身に起こっているのだから、痣なんて殆ど印象に残らない。

何が起こっているのか、この騒動が何を意味しているのか、この館にいる者たちが知らないなんてことはあり得ない。わたしの部屋にまで届いてきた悲鳴は、もちろん、他の者たちも聞いているはずだった。なのに、ここに駆けつけている者はわたししかいない。それがどういう意味なのか……ああ、そういう意味なのだ。これは、見捨てられた娘。生け贄に捧げられている羊のようなもの。そして、その羊を引き裂いて遊んでいるのは、この館を統べる美しい女……レオナ。

「れおな……さま……がぐぎいいぃ――ッ……」

泣き叫ぶ娘は、きっと命乞いをしているのだろう。
だけど、それすらも混乱して何を言っているか分からなくなっている。

痛みと絶望で、命乞いのことすらも忘れてしまっているかもしれない。ああ、彼女が痛ましい。彼女が可哀そう。これが単なる悪夢であったら、どんなにいいだろう。

だけど、血に塗れた綺麗な娘を見つめる美しい女は、恍惚に溢れていた。

まるで、自分の作品に惚れ惚れする芸術家のように。

「綺麗……とても綺麗よ、リサ」

レオナが口を開いた。リサ。それが彼女の名前らしい。ああ、なんて哀れな彼女。彼女が正常だった時を覚えているからこそ、この気持ち悪さは生まれている。彼女の痛みは計り知れない。

むしろ、あれがわたしでなくてよかったとさえ思ってしまうほど、そんな薄情な部位を自分に感じてしまうほど、おぞましい様子を見てしまったのだ。声を押し殺し過ぎて、息が苦しかった。レオナが何を相手に暴力をふるっているのかに気付いてからずっと、悲鳴を上げそうな自分の口を力ずくで抑えていた。もしも覗いていることが誰かにばれてしまったら、あの惨状が自分にも降りかかるのではないか、そんな考えが過ぎって、とても恐ろしかった。

ごめんなさい、リサ。わたしにはあなたを救う力はないの。

リサは、生きているのだ。

手足を失った血だるまの彼女は、生きているのだ。

「あなたはこの館に来る前から綺麗だったけれど、今が一番綺麗よ」

「――……」

リサはもう言葉を発していなかった。そんな彼女を相手にレオナ

は淡々と喋っている。その様子を見ていて、わたしは悟った。いくら泣き叫んでも、リサが赦しを得られる事なんてあり得ないのだ。レオナにとってこれは、罰でも何でもない。彼女自身の性癖による欲望を満たすためだけの、ただそれだけの行為。その生け贄に、リサが選ばれたということだ。

ああ、だけど、そんなこと、あり得るのだろうか。こんなことが行われていることが外に漏れると、ただ事じゃない。ただ事じゃないというのに。

その時わたしは、リサの身のうえについて想い出した。話してくれたのは、アンナだった。

いつだったかは覚えていない。だけど、この館で働いている人達について訊ねた時に、教えてくれたのだ。アンナやリサなどの使用人、いわばこの館のメイド達は、身よりの無い娘や田舎から売られてきた娘ばかりであるということ。

この館以外に行き場など無いに等しい者ばかりであるということ。つまり、リサが消えたとしても、この館の外には漏れないということだ。この館の者が口を割らない限りは……。

本当に、本当に、見てはいけないものを見てしまった。

「誰だってそう。女の子は、苦痛に顔を歪めて自分の血潮に塗れて、そのなかで薄っすらと感じる快楽に戸惑っている所が可愛いのよ。リサ、よく聞いて、リサ、怖がらなくていいの。あなたはわたしになるだけだから。一つ残さずわたしが食べてあげる。大好きよ、リサ。わたしのリサ……」

リサは泣き叫んでいるばかり。きっと、レオナの言葉なんて聞こえていない。

それでも、レオナは不敵に笑みながら血塗れのリサの頭を撫でていた。綺麗な髪が血糊で汚れてしまっている。レオナの手も血塗れだった。切り取られたリサの手足は見当たらない。

わたしの目に映るのは、肉片ばかり。原型がなんだったのかも分からない肉片ばかり。

もう限界だった。

これ以上見て居られなかった。

リサの悲鳴が耳に纏わりついて、脳に刻まれてしまう。

部屋の外まで漏れている血と肉の匂いが、体中に染み込んでしまう。そして、それらがもたらすのは吐き気。吐き気が止まらなかった。吐き気と頭痛が止まらなかった。レオナに気付かれないようになんて気を使っていられない。

とにかく此処を離れなければという事だけを考えて、わたしは階段を上がっていった。とにかく、自分の部屋へ。今見た事を忘れなければ。忘れなければ……。

背後から、大きな悲鳴が聞こえたのを最後に、もう悲鳴は聞こえなくなった。

5. 首輪を外すことは出来ない

格子窓から見た現実は、本当に現実だったのだろうか。

いや、現実なわけがない。

そんな恐ろしい事に出くわすなんて、こんなに安全な壁で守られている館の中で、そんな恐ろしい事が行われているなんて、おかしいじゃないか。

もっと混沌としていた家無しの時でも、あんな恐ろしい場面を見た事なんてなかった。虐待に塗れた家でも、あんなにグロテスクな場面に触れるような機会なんてなかった。

きっと恐ろしい夢を見たのだと思う。そう思いたい。

廊下を歩いている今は現実だけれど、きっと幻覚だ。白昼夢だ。

そうでないはずがない。そうであるに違いない。自分を思いこませるのに必死だった。そうしないと、自分が保てなくなりそうで、恐ろしかった。

この館にいれば、何も心配なんてしなくていいって思っていたし、今もその気持ちは変わっていないからこそ、わたしが見たあの光景は信じ難かった。あの光景を造り出したのは、わたしの安全を確証するはずの御主人様。そう、レオナだ。レオナが人を殺した。それも、残酷な方法で、楽しんでいるかのように。あの悲鳴が外に漏れていないはずがない。だって、わたしには聞こえたから。だから、レオンやこの館の執事長を始めとした使用人達が知らないはずなんてないのだ。

そして、その恐怖は、その日中ずっと続いた。暫く自分の部屋で引きこもったわたしは、昼過ぎになってこっそりと外へ出てみた。

朝はどこにもいなかった使用人達が、ちゃんと働いていた。
だけど、その中にはやはり、リサは見当たらなかった。
使用人達を捕まえて、リサという娘の事について訊ねてみても、皆、適当な事を言う。ある人なんか、「そんな人いたかしら」と煙に巻いて何処かへ行ってしまった。皆、リサがどうなったのか知っているのではないだろうか。やっぱりこの館はおかしい。

アンナに訊ねてみても、やはりいい返事は貰えなかった。他の使用人の事はよく知りませんので、と、やや冷たくあしらわれて終わってしまった。アンナもきっと知っているのだ。知っているからこそ、わたしに言えないのだ。
でも、だからといって、レオナに聞く事なんて出来ない。あの惨たらしい状況を見てしまって、レオナに向かって下手な事を口走るなんてこと出来ない。出来るわけがない。

その日の夜が恐ろしかった。
血塗れの部屋の中で微笑んでいたレオナがわたしの部屋に来るのが怖かった。
彼女に触れられて、昨日までのような態度を取れるだろうか。いや、きっと朝に目撃したおぞましい光景を想い出して、悲鳴が漏れてしまうかもしれない。
そうなったら、どう弁解すればいいのだろう。レオナが疑うような態度を取ってしまったら、どうしたらいいのだろう。考えるだけで息が上がってしまう。

そんな心が落ち着かない内に、夜になってしまった。
わたしがリサについて訊ねてまわった事も、もしかして、レオナに知られているのではないだろうか。そう思うと余計に怖かった。
殺人の現場を見てしまったわたしがどうなってしまうか。あまりにも分かりやすい事しか見えない。ああ、そうだ。分かりきってい

るじゃないか。
此処から逃げよう。逃げるしかない。レオナが来る時間が迫る中、わたしはようやくこの館から抜け出す事を思い立った。昼に思い立てなかったのはどうしてだろう。きっと、朝に見たあれが嘘だと信じたい気持ちがあったから、だから、リサという娘の行方について訊ね回ることしか出来なかったのだ。

ああ、そんなことしていないで、逃げてしまえばよかった。
後悔しても仕方ない。
今、逃げるしかないのだ。

思い立ったら、もうこの部屋に留まる理由もなかった。アンナはとうに自室へと帰っていて、他の使用人達も寝静まっているようだった。
誰が何時まで起きているのかなんて知らないけれど、廊下を覗いてみる限りは、誰かが起きているという気配もない。

だけど、ぐずぐずしていたらレオナが来てしまうかもしれない。今朝、人を殺したレオナが、血に染まったあの手で、わたしを味わおうとやってくるかもしれない。

あの恍惚な時を思い出してはいけない。思い出したら、足が止まってしまうから。だけど、足が止まってしまう理由は、恍惚とした快楽の想い出だけの所為じゃない。見つかったらどうしようという気持ちがあったからだ。幾らでも言い訳の材料はあるだろうけれど、それは、冷静でないと使えない。どうにかして心を落ちつけてみよう。

歩いていると、自分の足音が響いているような気がして、無駄に緊張する。誰にも遭いたくない。ああ、考えてはダメだ。思考は悪

い方に向かっていって、それが行動に繋がってしまう。つまり、何かを失敗するのだ。そうなっては危なすぎる。大きな物音でもたててしまえば、どうなるか分かったものじゃない。

　レオナから貰った「殺さない」という約束の言葉は、わたしのなかではもはや崩壊していた。体中に付けられた傷跡が、殺される事へのカウントダウンに思えて仕方ない。残虐の限りを極めた結果が、リサの最期だというのだろうか。ああなりたくない。

　手足を切り落とされたリサ。血塗れでマネキンのように横たわっていたリサ。痛みと恐怖と混乱で、パニックに陥って泣き叫んでいたリサ。彼女の凄まじい最期が頭を過ぎる。それを冷徹に見つめていたレオナ。毎晩、わたしを攻めるのでは満たされない程の欲求が、リサにぶつけられていた。本当は、レオナは、わたしも殺したいのではないだろうか。そして、リサを殺した事を知って、自分の本性を見てしまったわたしを、レオナはどう扱うのか。

　——絶対に殺さない。

　果して、本当だろうか。いや、本当だとしても、レオナは自分を抑えることが出来るのだろうか。あれほどの欲求。人間を拘束して手足を切り落として残虐の限りを尽くしながら味わうというサディスティックの極みで満足するような人が、我慢をし続けるなんてことが出来るのだろうか。

　その時わたしは、レオンから受けた忠告の本当の意味を悟った。機嫌を損ねないというのは、それだけの意味ではない。彼女を下手に刺激してはいけないのだ。もしかしたら、こうやって夜中に部屋を抜け出した事は、よくなかったかもしれない。

　かといって、一生この館で怯えて暮らすのは嫌だ。

わたしは一心で館の外へと抜け出そうと歩き続けた。外へ出る扉はいくつか知っているけれど、施錠されている場所も多い。施錠は南京錠でされているから、わたしだけでは解除できない。そして、鍵を誰が持っているかなんて知らなかった。

でも、一か所だけ、南京錠ない場所を知っていた。内側からだったら簡単に出られる場所があるのだ。館の西側。それは、わたしの部屋から随分と離れた場所だった。

道のりが遠すぎて、気付けばわたしは汗まみれだった。

緊張だけでこんなに汗をかくことなんて、今まであっただろうか。生まれ育った家で感じてきた恐怖の比じゃない。その理由は全て、朝に目撃してしまったあれの所為。

怖い。怖い。この館では、何度もあんなことが行われていたのだろうか。この館で惨い死を遂げた者は、何人いるのだろう。

幸いな事に、わたしを外に逃がしてくれる扉までの道のりには、誰もいなかった。寝静まっているのだろうか。誰とも会わなかった。まるで、この館にわたししかいないようだった。そろそろいつもレオナがわたしの部屋に訪れる時間なはずだ。

もしかしたら、わたしがいない事に気がついて、わたしの部屋に皆が集まっているのかもしれない。もうそうなら、逃げるのは、いましかない。

その時だった。心臓が凍りつきそうな思いをしたのは。暗闇に浮かぶのは、わたしが目指している扉。わたしを外に連れ出してくれる唯一の道。

だけど、それを阻んだ者がいたのだ。それは、廊下の脇に開かれている扉の向こう、暗闇の中から、すっと現れ、わたしの腕を掴んで、わたしを無理矢理部屋の中へと引っ張った。わたしはもがいた。

悲鳴を上げなかったのは奇跡だ。口を塞がれて、静かにするように諭されて、しばらく羽交い絞めにされて、わたしをここへ引っ張ってきた何者かの体温を感じていると、少し落ち着いた。

どうやら、相手はレオナではない事が分かってきた。女性であるのはすぐに分かった。柔らかな胸の感触が、背中越しに感じられる。

「お静かに。お嬢様」

潜められた声。
その一言で、これが誰なのかがすぐに分かった。
彼女のつけている香水が鼻をくすぐってくる。花のような香りを纏うのは、アンナ。
わたしの世話係をレオナに押し付けられた、レオナとは対照的に静けさを纏う美しい娘。
ぎゅっと抱きしめてくる彼女からは、かつての冷たさではなく、今のわたしには泣きだしてしまいそうなくらい温かいものが醸し出されていた。

「御主人様がお探しです。他の使用人達もあなたを捜してうろついております」

「アンナ……わたしは……」

口から手をのけられて、わたしは圧し殺した声で言い訳を口走ろうとした。
廻りきらない頭で、どうにかこの場を凌がなくてはと考えていたのだ。
だけど、アンナは微かに笑みながら首を振った。抱きしめる温も

りは変わらない。
そんな彼女には、何故か、幼子に取っての母親の腕の中のような安心感があった。もちろん、それは単なる想像で、わたしは母親の腕の中という安全地帯を体験した事はないのだけれど。
「お嬢様がなさろうとしていたことは知っております。わたくしはお嬢様を咎める気はありません。お嬢様はここから逃げるべきなのです。ただし、それは今日ではありませんよ」
アンナに諭されて、わたしはじっと彼女の目を見た。
嘘をついている目でも、わたしを騙そうとしている目でもなかった。
その表情は、本物だと思った。そうだ。アンナも身よりなくして此処へ来ているのだ。彼女もいつリサのようになるか分からずに、怯えながらここで暮らしているのだ。
「西扉から外へ出られたとしても、庭を囲む塀は、番犬でも飛び越せない高さです。庭をさらに北の方へと進めば、裏門が見えてきますが、そこは御者であり門番であるリカオンが寝泊まりしております。リカオンはこの館の誰よりもレオナ様にもレオン様にも忠誠を誓っている男。今日この先へ向かったところで、リカオンに見つかってしまうでしょう」
アンナが嘘を言っているなんてこと、なかった。
そうだ。裏門には近づいたことがあるのだ。確かに、そこには男がいた。若い男だった。名前なんて知らなかったけれど、わたしが裏門に近づくと嫌そうな顔をしたので、何も言わずに立ち去ったのだ。あの男がリカオンというのだろうか。
名前なんてどうでもいい。どちらにせよ、彼がいるのならば、わ

たしの計画は大失敗だ。

「安心してください。わたくしはお嬢様の味方です。三日間の辛抱です。三日待てば、お嬢様を外へ導くことが出来ますすよ」

「本当に？」

藁にもすがる思いというのはこういう事なのだろう。

アンナがわたしを騙そうとしているなんて思えなかった。そっとわたしの頬を触りながら、温かい手で抱きしめてくれるアンナは、とても頼りがいがあった。

「しあさっての夜、仮面舞踏会が開かれるのです。この都のお偉方が必ずご参加される大切な舞踏会です。もちろん、レオナ様もレオン様も御出席されます。リカオンは御者としてお二人と共に舞踏会へ向かいます。その時がチャンスです。裏門は手薄になるので、お嬢様を安全にお送りする事が出来ます」

「アンナはどうするの？」

わたしは急に不安になった。

わたしを勝手に逃がした事がばれてしまったら、アンナはどうなってしまうのだろう。けれど、アンナの親切心を振り払えるくらい、わたしは勇敢ではなかった。

アンナはわたしの髪を撫でながら、静かな声で言った。

「怖いのは分かります。けれど、今日のところはお部屋にお戻りください。レオナ様は怒りを表に出さない御方。怯まずに、夜景を見たかったから抜け出してしまった、と、謝るのです。大丈夫。三日の辛抱ですよ」

アンナに諭されて、わたしは目眩がした。三日後ならば、逃げられる可能性が高くなる。
だけど、あの部屋に戻って、三日も耐えなくてはならないなんて、恐ろしい。でも、このまま出て行ったところで、リカオンとやらに見つかって終わりなのは、アンナに言われた通りだ。そうなれば、選択肢なんて一つしかない。

アンナに手を引かれて、わたしは自室へと戻っていった。あと三日だけの自室。三日待てばいい。三日待てば、あの恐ろしい世界から逃げ出すことが出来る。自分に降りかからないわけがない恐ろしい現実から、抜け出すことが出来る。
アンナが味方だから大丈夫。きっと、大丈夫。そう自分に言い聞かせながら、わたしはアンナとともに自室へと戻った。

長い道のりだった。廊下を進む足音が反響していたみたいだけれど、さっきとは違ってその音は全然耳に入って来ない。アンナに続いてただ淡々と進むだけなのに、冷や汗が出てきていた。やがて、アンナが小さく声を上げて明りを正面に向けた時、心臓が跳ねあがりそうになった。

明かりに照らされていたのは、レオナ。冷たい視線のレオナだった。アンナが機敏に頭を下げているのを、わたしは呆然と見ていた。レオナはアンナには目もくれず、わたしをじっと見ていた。冷たい、と言ったが、少し違う。感情の宿っていないような目だ。無機質な目でわたしをじっと見つめている。
わたしはどうにか喋ろうとしたけれど、上手く口が動かせなかった。
「何処に行っていたの？」

レオナが訊ねてきた。とても穏やかな声だった。笑みと穏やかさで表された怒りは、わたしの心に突き刺さる。わたしは無意識にアンナに縋っていた。アンナが何か言ってくれるのを待っていた。アンナもそれを理解しているらしかった。わたしが上手く言葉を発せずにいるのを悟って、わたしの代わりにレオナに答えてくれた。

「なかなかお休みになることが出来なくて、気分転換に部屋を抜け出されていただけのようです。どうか、そんなにお咎めにならないでくださいまし」

アンナの言葉を聞きながら、わたしはじっとレオナの顔を見ていた。レオナは表情一つ変えずに、わたしから目を逸らさないままアンナに言葉に答えた。

「別に怒ってなんかいないわ。ただ、何処に行っていたのかを聞いただけじゃない」

感情の籠っていない声に、わたしは恐怖を覚えた。

気を抜くと、朝に見た恐ろしい光景が頭を過ぎってしまいそうになる。いけない。今だけは耐えなくてはいけない。もしも、あれをわたしが見てしまった事が知られたら……考えてはいけない。考えてしまったら、その動揺は必ず失敗に繋がる。

今はただ耐えていればいいのだ。

「失礼しました。ただ、お嬢様はお眠りになれずお困りのようでしたので――」

「見つけてくれて有難う。世話係として優秀な事は認めるわ」

アンナの言葉を遮って、レオナは強く言い放った。
「部屋までは私が連れていく。あなたはもう下がって、休みなさいな」
優しげな声だったけれど、その言葉に込められている感情は決して優しいものではなかった。こう言われて、アンナが従わないわけがない。わたしとしては、部屋に戻るまでアンナにずっといて貰いたかった。だけど、そんな希望を言える雰囲気でもなかった。
レオナの穏やかな雰囲気。穏やかなのに威圧的に感じる異常な雰囲気。このレオナと二人きりになるのが、とても怖かった。

「さてと、ミユ」
レオナの声が耳をなぞっていく。
「アンナと何を話していたかは、後でじっくりと聞かせて貰うわ。それと……」
レオナの美しい指が、わたしの頬から唇にかけてなぞっていく。その愛撫にわたしの身体は素直に反応してしまう。レオナが相手だと、わたしは悲しい程に無力だった。レオナの吐息が耳にかかる。
恍惚がわたしの脳裏を駆け廻っていった。
「今朝、あなたが見たものを、教えて貰えるかしら」
恍惚が戦慄に変わった瞬間だった。怖くてレオナの表情を確認出来ない。覗いていた事が気付かれていたというのだろうか。いや、でも、下手な事を言ってはいけない。
まだ、誤魔化しとおせるかもしれない。あと、三日だ。あと三日

耐え抜けばいいのだから。
わたしが答えないでいると、レオナは軽く溜め息をついた。思っていたよりも固い雰囲気ではなかったので、わたしの身体に入っていた無駄な力が、自然と抜けた。レオナの手がわたしの身体から離れる。
それは、見えない束縛から解かれたようなものだった。

「いいわ。ひとまず、部屋に戻りましょう」

先に歩きだしたレオナに続いて、わたしは黙ったまま歩き出した。下手な事を口走ってはいけない。ただ、レオナに従っていればいい。レオンが言っていたように、レオナの機嫌を損ねないように。
もしも、損ねたとしたら、どうなってしまうのだろう……。

6. 椿木館の愛玩物

部屋に着くと、そのままベッドに押し倒された。

わたしが何も言わないうちに、レオナはわたしの服を脱がしていく。

何が起こったのか理解するより先に、事は起きた。

それは、いつもの手加減した攻撃ではなかった。愛のある攻撃ではなくて、これは脅しでしかない。わたしの嫌がる心と恐れる心は、声となって自然と漏れていく。

だけど、レオナは容赦しなかった。愛撫もしないままわたしの足を開いて、わたしの中に勢いよく指を突っ込んでいく。とても痛かった。身体も心も痛かった。

だけど、泣いても、彼女は許してくれなかった。これが、彼女の機嫌を損ねた罰なのだろうか。泣いているわたしの口を、レオナはもう片方の手で塞いだ。

耳元で彼女の声が再生される。

「静かに。あまり五月蠅くすると、私も苛々しちゃうから」

――機嫌を損ねる。

涙は溢れてきたけれど、そう言われてこれ以上騒ぐ気にもならなかった。

身体の震えが止まらない。震えっぱなしの身体では、レオナにはとても敵わない。

わたしはレオナにされる事を黙って受け入れた。このまま殺されてしまってもおかしくはない。わたしの中に彼女の爪が突き刺さったとしても、おかしくないのだ。

だけど、そんな緊張と恐怖の狭間からも、快楽は絶えずわたしの脳をくすぐってくる。レオナは十分に女を知っている。いや、わたしを知っている。彼女はすでに、どんなに乾いているわたしの恥部を、ものの数秒で湿らせてしまえる技を持っていた。

わたしが抵抗しない事を確認すると、レオナは勢いよく指を動かした。痛い。だけど、痛いだけじゃない。気付けばわたしはレオナによって甘い声で鳴かされていた。

ここに来てからずっと、わたしはレオナに敵わないまま。だけどそれは、わたしだけだったらっていう話。敵わなくたっていい。無駄な抵抗なんてしないし、意地も張らない。

レオナを前にしたら、わたしの理性の鎧なんて簡単に砕け散って、醜い欲望が満たされていくことしか感じられなくなるのは認める。

だけど、これだけは断じて譲らない。わたしは絶対にここを抜け出す。レオナの本性を見てしまった以上、もうここにはいられない。抜け出して、元の混沌とした生活に戻る。元の生活が安全だったなんて口が裂けても言えないけれど、少なくともここにずっといるよりはずっと安全だと判断した。

つい昨日の夜まではここが一番安全だと思っていたなんて信じられないくらい、今のわたしにとって、この場所は死の牢獄に等しい場所だった。

外に出たら口を噤もう。秘密を漏らせばレオナに居場所が知られてしまうかもしれない。それは、一生レオナから逃げ続けるという意味。でも、それでもいい。

今、一身に浴びているこの恍惚と快楽と共に訪れる耐えがたい恐怖から逃れられるのなら。

「ああっ……んぐっ……」

「いい声で鳴くじゃない。お仕置きにしては甘かったかしら。でも、まだまだこんなもんじゃないわよ」

快楽と恐怖は同じくらいの波でわたしを襲ってきていた。痛みなんてもはや感じなくて、いかれたわたしの頭によって、すべて快楽に変換されてしまっているらしい。

襲ってくるのは精神面ののみの恐怖。

このまま食べられてしまうのではないかという恐ろしさと一緒に、わたしの頭を狂わせる甘い刺激を感じるのだ。怖い。このまま、レオナに全てを持っていかれそうで、怖い。アンナが導いてくれる三日後まで、わたしの心が持つのか、それがとても不安で、不安で、仕方なかった。

「レオナ……んんっ……ね、え……レオナっ……あぐっ」

「甘えた声でどうしちゃったの？　もっとやって欲しいのかしら？」

レオナは遊んでいる。わたしを完全に支配したと確信して、わざとどんどん深みへとわたしを連れていく。もう戻りたいのに、これ以上、沈みたくないのに、レオナはどんどんわたしに快楽を与えていく。くちゅくちゅと嫌らしい音が響いていた。感じているのだ。

レオナにいいようにされて、感じてしまっているのだ。

痛みなんてそもそもあったのだろうかって思うくらいなくなってしまっている。まるで、男根でかき乱されるように、わたしの中はレオナに支配されていた。レオナの舌がわたしの肌を這っていく。

妙に緊張して、わたしの身体に力が入った。
その時、恍惚の狭間で見つめていたレオナの表情の妖艶さは、忘れられないものになりそうだった。
「美味しそう。とても美味しそう」
わたしは耐えた。全てから耐えることにした。
ここにいるのは、レオナとわたしではない。レオナとミユだ。ミユはわたしじゃない。わたしであって、わたしじゃない。レオナによって鳴かされているミユ。彼女の玩具としてこの館に飼われているのは、わたしではなくて椿木ミユ。椿木ミユはわたしじゃない。身体はわたしでも、心はわたしじゃないのだ。
今、こうやって鳴きながら快楽に浸っているのは、レオナの支配欲を満たすために抵抗すらしないで応じているのは、わたしではなくてミユだ。
それなら、わたしは誰？　レオナが遊んでいる玩具がわたしでないのなら、こうやって感じて、考えて、必死に耐えているわたしは、一体誰なのだろう。
「うぐぅ……」
奥歯を噛み締めて、わたしは痛みに耐える。わたしの身体は血塗れだった。レオナの噛み痕と引っ掻き痕が酷く疼く。噛み千切られた個所はすでに何箇所かある。レオナはまだ飽き足らないで、わたしで遊び続けている。
一体、いつまで？
いつまでこうして遊ばれていればいいのだろう。

わたしの血を滴らせるレオナの唇が、わたしの口を塞ぐ。鉄の匂いのする口づけは、もう何十回も行った。舌と舌を絡ませて、体中を揉み解されるわたしの身体は、骨の髄までレオナに支配されていこうとしていた。これはきっと儀式。わたしに最後の鎖を繋ぐための、儀式なのだ。

「心配しないで。優しくするから」

これがレオナのいう優しいならば、優しくないレオナはどれだけ恐ろしい事をするのだろう。

考えてすぐに過ぎったのは、リサの姿だった。彼女はどうなったのだろうか、と、考えるのも愚かな事。あれで生きているなんて事があるのだろうか。あったとしても、レオナが彼女を長々と生かしておくわけがない。そう。きっと彼女は死んだ。生きながらにして四肢を切断されて、レオナによってずっと拷問を受けていたのだ。わたしが悲鳴を聞いたのは朝。一体、どのくらいの間、リサは苦しんだのだろう。

レオナから解放されたのは、もうすぐ夜が明ける頃だった。ベッドの上にいるのはわたしだけ。辛うじて、ネグリジェを纏ってはいたけれど、きちんと着る力は残っていなかった。身体のあちこちからはまだ血が流れていて、とてもひりひりする。汗や愛液や唾液や涙や涎や鼻水とかで、わたしの身体はぐしょぐしょだったけれど、それを拭く体力もない。

もうこのまま眠りに就きたかった。

三日。三日もこんな生活をしなくてはいけないのだろうか。世の中には見なければよかったことなんて一杯あるけれど、リサのこと

もそうだったのだろうか。
　見に行ってしまったわたしが悪かったのだろうか。あれさえ見なければ、この館の中で何の不自由なくただ退屈なだけの平和な毎日が過ごせたのに、今や違う。こんな命の危険が及ぶような檻のなかで暮らすなら、弱肉強食の外の世界で生きていった方がマシ。

「お嬢様……」

　アンナの声がしたけれど、わたしは返事すら出来なかった。

「お召変えをお持ちしました。お怪我の消毒もいたしましょう」

「んん……」

　ちゃんと返事が出来ない。とても身体がだるくて、眠たかった。このまま闇の奥深くに入りこんで、そのまま目が覚めなくたっていいというくらい、無気力感がわたしを襲っている。全身がひりひりする。外気が冷たく感じるのは、薄着しているからだ。

　アンナに抱き起こされて、やっとわたしは起きあがる事が出来た。アンナが持ってきた消毒液は、身体によく沁みた。おまけに、外気が冷たいので、身体が縮まってしまいそうだった。アンナは無言でわたしの身体に塗り薬を塗っていた。
　わたしとしては、聞きたい事が山ほどあったのだけれど、今のアンナは答えてくれそうにない。もちろん、そんなアンナに無理矢理問い質したりする気はなかった。
　今のわたしは下手に動くべきではない事を思い返して、喉まで出かかって言葉をごくりと飲みこんだ。

「御主人様がお呼びです。今日の朝食は御一緒に取られたいそうで

す」

アンナの言う御主人様がレオナのみを指す事はもう分かっていた。レオンとレオナが並ぶ時は両方に「様」と敬称をつけるけれど、レオンのみを指して「御主人様」と言った事がない。

これも、執事長が教えてくれたことだが、正式な頭首の継承はレオナのみが行っているという話だ。レオンもまたレオナのきょうだいとしてこの館に置いても、この館に関わる家々からも相応の扱いを受けていたけれど、この館の者達が「御主人様」と呼ぶのは、いつもレオナの方だった。

「御主人様によれば、じっくりと御顔を見たいのだとか」

アンナの表情はいつもと変わらない。だけど、わたしは不安だった。レオナならば、このアンナの心情すらも僅かな手掛かりから見通してしまうのではないかという奇妙な恐れがあったからだ。あれこそ、わたしが生まれてこの方怯え続けていた魔物なのではないかという考えが、たった今芽生えた。

レオナは魔物なのではないだろうか。そうとしか考えられない。他人にあんな事をするのは、魔物としか思えない。そうだとしか思えない。そうだと信じたい。信じ込みたい。

わたしは無言のまま、アンナの用意した服に着替えた。

いつものように、レオナの趣味に合わせた服。まだ、わたしはレオナのペットでしかないのだ。レオナによって決められて服を着て、レオナによって決められた食事を取って、レオナによって決められた部屋に寝泊まりするわたしは、完全にレオナのペットだ。それでいいと思っていた。それでも外の生活よりはマシだと信じていた。

だけど、もうそんな事は信じられない。あんな光景を見てしまっ

て、そんな事を信じられるわけがなかった。

わたしが食堂へ入ると、レオナはすでに席について待っていた。アンナはわたしを案内すると退室してしまった。レオンはいない。レオナだけだ。

今ここに居るのは、レオナとわたしだけだった。

「ミユ、座りなさい」

レオナに言われて、わたしはすぐに席に着いた。

朝食はいつものように豪勢。この館の外では絶対に食べられなさそうなものばかりだった。外だとその日食べる事さえやっとなのに、ここへ来てからわたしは、ずっとこんなに恵まれた食事を与えられている。わたしは、その生活から逃げようとしている。

はっとわたしは我に返った。座ってからぼんやりとしていたわたしは、ずっと監視されている。

レオナの視線がとても痛かった。レオナに見つめられていると、動作がぎこちなくなっていく。

どうしたらいいのかが分からなくなって混乱してしまうのだ。全ての動きを評価されてしまっているような気になってしまって、どう動いたらいいのかさえも分からなくなっていって、段々と頭が痛くなる。

スプーンを持つ手が震えている。スープを飲むという動作一つでも、失敗してしまいそうなくらい怖かった。

でも、失敗って、何だろう。

「食べながらでいいから、聞きなさい」

レオナは紅茶のカップをテーブルに置いて、言った。

「明後日の夜、阿利崎邸で仮面舞踏会があるの」

阿利崎邸のことは、この町で知らない者なんていないだろうと言われている。わたしみたいな野良猫同等の人間でも知っているような富豪、阿利崎氏の邸宅のことだ。

何度か外観だけを覗いた事があるけれど、勿論、中に入った事なんてない。だいたい、このわたしが椿木館で暮らしていること自体が奇跡なのだ。

「遊戯とはいえ、捨て置いてはおけない貴族の社交場。お父様が頭首だった頃から、わたしもレオンも欠席した事がないのよ」

真っ直ぐと見つめられてそんな不慣れな世界の事を語られては、飯を食べる手の動きもぎこちなくなる。食べ物をこぼさないように細心の注意を払いながら、わたしはレオナの言葉に耳を傾けていた。

アンナの言った通りだ。その仮面舞踏会の日に、わたしはここを出る。アンナの計画が上手くいけば、わたしは自由の身だ。

「飼い猫のあなたは勿論参加出来ない。だから、館の中でいい子にしているのよ。いいわね」

その時、わたしはパンを齧ろうとしていたのだが、こちらに向いているレオナの視線にはっとした。相手を凍りつかせるような冷たい視線は、魔性のもの以外に考えられなかった。わたしはじっとその視線を目で受け止めていた。そして、パンを皿に戻す事も忘れて、じっとレオナを見つめていた。

「いいわね、いい子にしているのよ」

意味深なその言葉に、わたしは唾を飲み込んだ。まさかとは思いたいが、わたしとアンナの計画を、レオナはお見通しなのではないだろうかとさえ思えてくる。
けれど、そんな事はないはずだ。わたしはわたしの与えられた任務を、疑いもなく実行しているようにレオナの前では演じている。演じるも何も、つい一昨日くらいまでは本気で疑いなんて持っていなかった。あれさえ見なければ、リサの最期さえ見なければ、わたしは疑いも持たずに自分の仕事に専念しながら一生をこの館で過ごしていたかもしれない。

そのことが、わたしの最期をどう飾るかを左右していた事を、わたしは知っている。
運が良ければこのまま安定した暮らしを一生していたと思うし、何かしくじっていれば、リサと同じ末路を辿る事になっていたかもしれない。
レオナはじっとわたしを見ていた。

「いいわね」

念を押され続けて、わたしはゆっくりと頷いた。

わたしの瞼の裏に浮かぶのは、リサの最期。愛欲と暴力の犠牲者の最期。
絵具の様な血飛沫が、暗い部屋と、レオナの身体を赤く染めていた光景。レオナの美しい顔は――返り血に染まった顔は、満足そうな笑みを浮かべて、哀れなリサの姿を見つめていた。
一瞬、その笑みが目の前のレオナの顔と重なり、寒気を感じた。変な汗が噴き出てくる。不審がられてはいけない。
だけど、いけないと思うほど、緊張の糸で縛られてしまう。

落ち着かなくては。
その阿利崎邸で開かれる仮面舞踏会の日まで今までのように過ごしていれば、外へと逃げ出すチャンスが訪れる。それまで、変な動きを見せたりせずに、疑われなければいいだけなのだ。今までと同じように過ごしていれば大丈夫。大丈夫。

その「同じように」がとても難しかった。

レオナに何も思われていないはずがない。だけど、食事の間、レオナはわたしの挙動には一切触れなかった。傍から見ればさほど怪しくないと言う事だろうか。分からないけれど、細かい事は気にしないに越したことはない。下手に気にしてしまったら、動揺していることがばれてしまう。
動揺していることがばれるなんて、考えるだけで恐ろしい事だ。

「いいわね、ミユ」

「はい」

レオナの問いかけに、わたしはやっと答える事が出来た。出来る事ならば、もっと早く返答したかった。でも力み過ぎても逆に怪しまれてしまう。平常心、平常心だ。だけど、平常心というものは、意識すればするほど捉えにくくなるものだって今になってよく分かった。
これが三日も続くなんて、大丈夫なのだろうか。
レオナは食事を取り終えるまで、それ以上何も言わなかった。そして、食事を終えると、ナプキンをたたみ、ただ一言置いて去った。
「食べ終わったら部屋に戻っていなさい。今日はあまりうろうろし

てはダメよ」
従うに越したことはなかった。今日一日部屋にじっとしていればいい。簡単じゃないか。部屋にじっとしているだけでいいなんて、逆に有難い。
本でも読んでいれば時間は過ぎていく。
こういう時に、字を習っていてよかったとつくづく思う。もしも字も読めなければ、退屈な時間をどう過ごせばいいのか分からない。勝手にうろついては怒られるし、見なければよかったものまで見てしまう……。

レオナとレオンが阿利崎邸へと向かうのは明後日。
それまで本を読んで静かに過ごしていれば、そして、レオナに疑われないようにその任務を全うしていれば、後はアンナの指示を待つだけだ。
そう。慎重に行けば大丈夫。大丈夫なはず。

7．深紅に塗れた記憶の書

朝食を食べ終えたわたしは、まっすぐ自分の部屋へと戻っていった。

椿木館内の図書室から持ってきた本をいくつか、机の上に置きっ放しだったことを想い出して、それを読みながら今日一日は過ごそうと決めた。図書室からわたしの部屋まではあまり離れていないのだけれど、うろうろするなと言われてしまっているので、図書室に行っていいのかも分からない。

だから、自分の部屋にいる方が無難だと考えた。

ここへ来てからというもの、図書室からはたびたび本を借りていた。

あまりに高価な本があると、さすがに触るのも躊躇われてしまうけれども、あまり見ないでいると段々と分からなくなってしまうというのが文字である。

文字を習えば文字を読めなくなる事なんてないと思う人は多いかもしれないけれど、決してそうではない。こうして、何度か文字を読んでいなければ、必ずその能力は衰退していってしまうという考えをわたしは持っていた。

……と、さもわたしの持論のように語ったが、狐の受け売りだったりする。文字を読めると言うのは、とても便利で、まず、新聞を読む事で館の外で何が起こっているかが分かる。贅沢と退屈、そしてその裏に秘められた闇の中で飼われているわたしにとって、外の様子が知れる新聞は、貴重な情報網だった。

レオナはわたしが新聞を読むことをあまり好まなかった。レオナが好まないので、使用人達もなかなかわたしには持ってきてくれない。仕方ないので、わたしは、図書室に保管されている新聞を読むしかなかった。それも、誰もいない時じゃないと、レオナがあまりいい顔をしない。ただ、そこまで機嫌を悪くする程の事ではなかったので、前は少し不安なだけだったけれど、今となっては物凄く恐ろしい事である。知らずにレオナの機嫌を損ねるような事を続けていたら、きっと、わたしも……。

図書室に顔を出したのは、三日前。
新聞の持ち出しは出来なかったので、持ち出したのは、小説とこの館にまつわる歴史書、そして、誰かの詩集のようなものだった。もしも昨日に図書室に行くという事が考えつければ、新聞を無理矢理持ち出すことぐらいしていただろうと悔やむ。けれど、悔やんだって仕方ない。

小説は昔流行った小説家による幻想小説。内容は、少女が夢の中に捕われて、逃れられなくなるというもの。けれど、白い鳥の導きで、最後には現へと戻ることが出来る。夢の描写はとてもリアルで、幻想小説と呼ばれるに相応しいものだった。少女を捉えるのは、心地よい夢から恐ろしい悪夢まで様々。
そして、少女をつけ狙うのは、淫夢を司るインキュバスと、サキュバスの二人。二人は少女に宿る卵を狙って、何度も彼女の前に現れ、彼女を襲う。やがて、インキュバスに強姦された乙女は、卵を失い、サキュバスの生む子どもの苗床となる人形になってしまうのだ。この二人が少女に行う事が恐ろしくて、わたしの夢にも出てきてしまったくらいだ。
ああ、まだこの時はレオナがあんな事をするなんて知らなかったから、レオナが隣に居る事で安心出来たのに……。

歴史書は、読まなければよかったと思うような暗い歴史が直接的に書かれていた。
この椿木館の功績は、その全てが闇と穢れであり、「沢山の屍を越えているからこそ、今尚その力を衰えさせないのだ」という記述は、狂気に満ちているようにすら感じた。
この館の地面には一体何人の骸が転がっているのだろう。そう考えると、とても恐ろしかった。でも、世の中はそれが全てなのかもしれないと思うと、こんなことで怖がっていてはいけないのかもしれないとも思えた。

椿木。

レオナからこの姓を負わされた意味を、わたしはじっと考えた。何故、彼女はわたしをここへ連れてきた。何故、彼女はこの闇に染まる椿木の姓をわたしに与えたのだろう……。
それには意味がある。何か意味があるはずなのに、まだわたしはちゃんと分かっていない。慰み者にするだけならば、わざわざ姓を与える必要なんてないのだ。
なのに、今のわたしはレオナの慰み者でしかない。ペットと言えば、まだ聞こえがいい。愛玩といえば、まだ聞こえがいい。だって、愛玩ならば、あんなことさせられるまでもないはずだから……。
こういう形で、歴史書は、退屈しのぎにはなったけれど、わたしの思考を暗く染めていったのだ。

詩集は全く持って謎だった。誰が書いたかも分からないし、タイトルもない。
ページをめくるとぱらぱらと詩らしきものが書かれている。謎の多い本で気になったので、持ってきたのだ。書いてあることはよく分からない。

けれど、謎が多ければ多いほど、妄想で遊ぶことが出来るもの。
そういえば、三日前に借りてから、まだちゃんと読んではいなかった。歴史書と小説はすぐに読んでしまって、その謎の多い詩集を敢えて後に残した。
美味しそうなものは最後に残す。それによく似ている動機だった。

退屈なわたしの今日のお伴に、その詩集は最適だと思った。外に出たいけれど、出たくない。

レオナへの恐怖をしばし忘れるために、わたしはセンスのいいデザインの装丁のその詩集を手にとって、ぱらぱらと捲った。本に書かれているのは、作者の心情をそのまま無理矢理言葉にしたといった感じのまとまりのない散文だった。手書きであるのは見て分かる通り。

本自体はものすごく高価なものに違いなかった。
白いページもあれば、ぎっしりと書かれているページもある。
まるで、誰かの日記のようだった。詩集ではなく、日記だとしたら、この館に住んでいた者の日記かもしれない。だけど、書かれていることは、日常の事ではない。賞賛や嘆きの言葉。それも、誰に対してのものなのかは、よく分からない。

今、わたしが見ているページには、こう書かれている。

「見る者は黙るだろう。聞く者は話すだろう。魂の色の込められた結晶が、この城に染み込んでいき、この城に生まれる者達の精神へと結びつく。その時、わたしは絶頂なる快楽に身を打ちひしがれて、神の裁きも届かない世界へと旅立つ事になるのだろう」

やはり、これはこの城の者が書いたもののようだ。

けれど、わたしには意味が分からない。だけど、この詩集に書かれている言葉は、何故かわたしの胸を熱くした。意味も分からないくせに、わたしはまるで絶対的な魅力を持つ者から誘惑を受けているかのように、詩集のページを捲り続けた。

そして、次のページを見た時、戦慄が走った。

「聖なる剣が穢れた欲望によって振り落とされる時、結晶は砕け散り、羊は嬌声を上げて剣の主に忠義を誓う。剣の主に宿るのは、大いなる力。それは、彼、もしくは、彼女の中に宿る魂を揺り動かし、この城全ての者達へ恐怖と恍惚を与える」

何故か分からない。分からないけれど、リサの最期がわたしの頭を過ぎった。

理不尽にも命を落としたリサ。命を落とした所は見ていないけれど、あれで生きているはずがない。長く持つはずがない。わたしが見た時はすでに虫の息だった。

残っている全ての力を振り絞って、彼女は叫んでいた。望みを失った悲しさを、声にして発していた。……あれが、彼女の最期の声だろうということは、明らかだった。

「そして、剣の主は、すべての羊の心臓を手に入れる。それこそが、彼、もしくは、彼女の絶大なる幸福。この幸福を味わえるのは、城に生まれた者だけ。この幸福は、余所者には味わえない。それこそが、賢者によって、この城にかけられた祝福」

わたしの頭から血の気が引くのが分かった。

あれさえ、リサの最期さえ見なければ、この詩集のこのページが何を語っているかなんて知らずに済んだ。倒れてしまいそう。目が廻る。何が祝福だ。これは、呪いではないか。

レオナ。彼女の顔がわたしの脳裏を過ぎる。彼女もまた、この「祝福」を受けてしまっているのだろうか。なんてことだろう。なら、わたしは……わたしが連れてこられた意味は……そして、アンナが逃がしてくれる意味は……。羊……羊って、何？

「羊には椿の冠を与えよ」

この文は呪われている。

「羊は城から出してはいけない」

この文は呪われている。

「一度城に入った羊は、裁きの雷によって、砕け散るだろう」

この文は呪われている。

「羊を救う道はただ一つ」

信じない。わたしは、信じない。

「剣の主と混ざり合うのみ」

信じない。絶対に、信じない。

こんな本、持ってこなければよかった。嫌な妄想ばかりがわたしの頭の中を駆け巡る。そう、これは妄想だ。妄想に決まっている。妄想じゃないわけがない。違う本を読むべきだ。今すぐこの詩集を放り投げて、違う本を読むべきだ。読むべきは、外の世界の本。小説を読むべきだ。

だけど、どうして、どうしてなの、どうして、この詩集から手が

離れないの。怖い。とても怖い。まるで取り憑かれたように、わたしは詩集のページを捲り続けている。白いページ、一文字しか書かれていないページ、そして、一文しか書かれていないページ。ページが大波のようにわたしの目を、頭を、心を、襲ってくる。

「これ読んでいる羊よ」

あるページに書かれている一文が、目にとまった。それ以外は何も書かれていない。次のページは真っ白だ。その次のページは、違う内容の文が書かれている。なんだろう。この呼びかけはなんだろう。この呼びかけの続きは、続きは、何処かにないのだろうか。わたしはページを捲り続けた。これは詩集なんかじゃない。詩集なんかじゃない。

「覚悟し、愛を受け容れよ。それこそが、救いの全て」

違う。いいや、もうこんな事からは目を逸らしたい。きっとこれはただの詩集。わたしが考えているのは、ただの妄想。悪い癖に過ぎない。大丈夫。この考えは間違っている。わたしが思い描いているのは、単なる空想にすぎない。

——ならば何故、リサは死んだのだ。

読むべきでなかったのか、読むべきして読んだのか分からないが、この詩集はとんでもないものには違いない。剣の主が、レオナだとしても、羊が、リサだとしても、そして、わたしがここへ連れてこられた意味が、この本の中にあるとしても、全く無関係だとしても、この本がとんでもない代物であるのは違いなかった。

わたしを連れてきたレオナ。わたしを逃がそうとするアンナ。太

陽と月のどちらがより輝けるかは歴然としているけれど、わたしはここを脱出してみせる。華やかな生活の裏に隠された血生臭い事実から逃げるのだ。これはもう、わたしのような世の中の末端の人間には太刀打ちできない事柄である。外に出よう。そして、全てを忘れてしまおう。それがいい。それがいいに違いない。

——取り残されるアンナ達は——。

……もう考えたくない。

疲れてしまった。読んだだけで疲れてしまった。心が疲れてしまった。まるで、この本に暴力を振るわれたかのように、わたしは震えていた。汗も止まらない。息が苦しくて、涙が出てくる。

「冠を宿した羊の愛撫に満たした身体を切り刻み、結晶を散らばらせ、聖なる管を少しずつ引きずり出せ。そして、本当の愛を彼らに教え、一体と化すのだ」

椿木ミユは……レオナが与えてくれた名は……本当に、こんな愛の形なのだろうか。嘘だ。違う。でも、これでもう、ここに残るなんて考えは微塵も残らなかった。

三日。三日が長い。明後日。明後日までが遠い。

同じ空間に居るだけで怖い。ああ、今日の夜も、レオナはわたしの元にやってくるのだろうか。彼女はわたしが何の本を読んでいるか知っているはずなのに、顔色一つ変えないで、わたしに、変わらぬ愛をわたしの身体に、刻み続けた。動揺一つみせないで、わたしで遊ぶのを辞めない。レオナは、レオナは何を考えているのだろうか。

どうして、わたしに、椿木という姓を与えたの？
「羊のあげる嬌声は、わたしの心を躍らせる。彼らの安息は、剣の主の体内にのみ存在する。だからこそ、一体化しなくてはならない」
何なの、これは。
「一滴の血も残させず、全ての肉を、全ての臓物を、全ての骨を、羊は捧げる」
何なの、この記述は。羊って何。椿の冠を被る羊って何なの。何なの。ああ、考えたくないのに、考えてしまう。剣の主はレオナ、羊はリサ。それだけ？　それだけなの。もしかして、ここで働く使用人達は、皆、椿木の姓を持っているのだろうか。
だとしたら、何のために椿木の姓を与えられたのか……。
「快楽は、剣の主の者。甘い蜜を啜り、その香りに包まれて、至上の幸福を味わうのは、剣の主の特権」
レオナの目を想い出した。普段と変わらぬ表情の裏に、何か暗くて厳しいものが隠されていたような気がした。たまに感じるあの厳しさ。それが一層強かったような気がしたのだ。この本は、触ってはいけないものだったのだろうか。
でも、もしそうだったら、そう言っているはずだった。レオナは何も言わなかった。だから、わたしも何も訊かなかった。
「抗う羊の舌は抜かれ、赤で彩られた臓物は、宝石のように輝く」
わたしの脳裏に羊の悲鳴が聞こえてくる。

「それでも抗う哀れな羊は――」

わたしが聞いているのは、リサの悲鳴？　それとも、わたしの？

「四肢を堕とされ、命宿したまま貫かれ、神聖なる赤をもって、超絶の苦へと導かれるだろう」

――リサ……。

もう限界だった。

「アンナ……」

わたしは一心不乱に呼んだ。

「アンナ、いないの？」

それがレオナの機嫌を損ねることだとしても、今のわたしにはアンナが必要だった。アンナにいて欲しかった。ここからわたしを出してくれると約束してくれたアンナ。彼女がいないと心細かった。でも、わたしの声はアンナには届かなかった。捜しに行く事も躊躇われる。

部屋から出るのは怖かった。

早く、ここから抜け出したい。

こんな本を読んでしまって、今夜、レオナが来た時にどうすればいいのだろう。いつも通りに振る舞えるわけがない。だけど、いつも通りに振る舞わなければ、恐ろしい事が起こるかもしれない。この本に書かれている不吉な事を、身を持って体験するかもしれない。

そう思うと、全てが怖かった。夜が来る事も、三日間もここで暮

らさなくてはいけない事も、全てが怖かった。

「アンナ……」

わたしは泣きだしそうだった。

この場所から出してくれるのは、アンナしかいない。信頼しようとしていた主が、一番信用してはならない人だったなんて。早く明後日になって欲しい。だけど、レオナが来るかもしれない、来るに違いない夜になって欲しくなかった。本を投げ出して、わたしは寝台から離れた。寝台すらももう怖かった。

四肢を失くしたリサが寝かされていたのは、手術台の様な寝台。その四肢の断面は真っ赤だったけれど、わたしの目に焼き付いている。失血死寸前だったのだろうか、でも、まだ生きていた。あの時、リサはまだ生きていた。

ああ、なりたくない……。

助けて……。

どうして、こんな館が、こんな館の人達が、摘発されないままでいるのだろう。いや、でも、こんな事、世間の人達が知るわけがない。こんな恐ろしい事なんて、世の中の末端を生きていたわたしですらも知っていただろう。それに、この館が、レオナが、裁きを受けないでのうのうと生きているのもおかしなことだ。リサだけじゃない。この本に対してわたしが考えていることがもしも正しいのならば、犠牲になったのはリサだけじゃない。

……誰も裁けないほど、この館の権力が強いのだろうか。

けれど、この館よりも力を持っている家なんてもっとあったはずだ。

……その家も、闇を抱いて生きているのだろうか。

だとしても、こんなことが赦されていいのか。

ああ、今は許されたとしても、いつか許されなくなる日が来るだろう。

だけど、それは今日、明日、明後日じゃない。

わたしはここから逃げる。逃げてしまう。そして、何も言わない。卑怯者だと思われてもいい。卑怯者だと自分でも思う。だけど、怖いのだ。立ち向かう勇気がない。リサに呪われたっていい。館に残る者全てに呪われたっていい。

ただ、あの微笑を、レオナのあの冷たい微笑を見つめながら死ぬのは嫌だ。

8. 不安と恐怖を打ち消す快楽

日は野の果てに沈んでいき、夕餉までわたしは一人で部屋に籠っていた。

やがて、アンナに呼ばれて向かった夕餉もまた、アンナを除けば独りきりだった。

食堂に向かうまで、もしもレオナやレオンと一緒だったらどうしようと思っていたので、独りきりで本当に良かった。

だけど、独りで料理を食べていると、変な緊張がわたしを包んだ。見ているのはアンナだけ。わたしの味方であるはずの、アンナだけだ。なのに、他の誰かからも見られているような、そんな気がするのだ。

アンナは何も言わない。アンナが何も言わないと、わたしも何も訊けない。見られていないようで、誰かに見られているかもしれない。それが、アンナが警戒するリカオンとやらの人物のように、もしもレオナ達を敬愛する者だったら、わたしもアンナもただじゃすまない。

タダって何。そんな事、考えなくても直結する。リサが何をしたのかははっきりとは分からないけれど、何があったとしても、リサはもう二度と……。

「お嬢様、紅茶が冷めてしまいますよ」

アンナに声をかけられて、わたしははっと我に返った。いつの間にか、料理を食べる手も止まっていて、わたしはティーカップを持ったまま、考えに耽っていたようだ。

いや、悪い白昼夢に捕われてしまっているという方が正解だろう。とても怖い事。とても恐ろしい事。この恐怖から逃れる術を知っている。この館から逃げ出す事。椿木ミユという名前を捨てて、ここを去る事だけだ。

「アンナ……寝る前に温かいココアを飲みたいわ……」

「かしこまりました。八時ごろにお持ちしましょう」

アンナは無表情のままそう答えた。見つめてくる目に、意志が込められているかですら分からない。わたしを必死に引きとめた時のアンナの目ではなく、ここの使用人のアンナの目をしている。

わたしが求めているのは、約束してくれたアンナ。ここから安全に抜け出す術を教えてくれたアンナ。

夕餉を終えて、わたしは部屋に閉じこもった。本を読む気にもならない。

退屈しのぎに持ってきたあの本は、わたしの不安を大きくさせるだけの恐ろしいものだった。ただでさえ、あと、二時間、三時間もすれば、レオナがやってくるというのに。閉じこもった私が感じる孤独は、恐怖という檻に入れられた孤独。きっとこれは、訳も分からないまま人間に捕まった獣が感じるような恐怖に似ているのだろうとぼんやりと感じた。

館の時計の鐘が鳴って、わたしは夕餉を終えてから一時間経っていることに気付いた。まるで、夢でも見ていたかのように、部屋へ戻ってきてからの記憶がない。いつの間にか時間が経っていたという感覚だ。ノックする音が聞こえてきて、わたしの意識は戻ってきたのだ。

誰なのかは見当がついた。きっと、アンナだろう。ホットココア

を持ってきてくれたのだ。
そう思って扉を開けたわたしは……わたしは、自分の吐息が凍りつきそうになるなんていう感覚を初めて知れた。それくらい驚いたのだ。廊下に立っていたのは、アンナではない。
レオナに似ている美しい顔。煌々とした目の光は、薄暗い廊下でとても目立っていて、レオナのそれと同じくらい威圧的だった。

「そんなに驚いたかい？」

「何か用ですか？」

「これは、これは、釣れないものだね。さすがはレオナに飼いならされているだけある」

廊下に立っていたのは、レオン。

胡散臭い彼の様子は出会った頃から変わらない。むしろ、酷くなっているような気がする。そうだ。気を抜いてはいけない。レオンはレオナの双子のきょうだいなのだから、何か探りをいれてくるかもしれない。レオンの笑い方は、何故か、野良猫時代の親友の狐に似ている所があった。

きっと、狐が人を適度に騙しながら暮らしていたからだと思う。レオンにもそういった部分は少なからずあるのではないだろうか。いや、レオナにもそういった部分はある。そう、このきょうだいは、とんでもない闇を隠して、人々を騙して暮らしているのだ。
だって、レオナがしたことを、このレオンが知らないなんて事、あるはずがない。

「レオナが心配していた。元気がないってね」

「元気がないわけでは……」
「何か嫌な事でもあったのかな？　……例えば」
と、その時、レオンの目が青く光った気がした。狐もこういう目をしていた時があったことを想い出す。これは、探りを入れている証拠だ。
わたしには分かる。レオンはわたしから何かを聞きだそうとしている。
「怖い夢でも見た……とか」
怖い夢。そんな言葉になんて騙されない。やはり、レオンは知っている。レオンも知っている。彼も共犯なのだ。彼だって、この椿木館に生まれた者なのだ。
「別に、そういうわけでもありません」
わたしは淡々と答えた。
「ただ、なかなか寝付けなくて気分がすぐれなかっただけです」
「ふうん、寝付けなくて、ねぇ」
レオンの舐めるような視線に、わたしの身体は震えそうだった。けれど、震えてはいけない。震える場面ではない。わたしは必死に身体に念じた。そして、自分が出せる力を精一杯出しきってつくりだす凛とした態度で、レオンを見つめた。レオンは笑みを浮かべたまま、「そうかい」と、呟くと、わたしをじっと見つめながらこう

言った。
「ならいいのさ。不満でも溜めこんでいたらと、レオナが心配していたのでね」
そう言って、レオンは踵を返した。その背を見送っているうちに、わたしはふと衝動に駆られた。喉まで出かかっている言葉が、飲みこめないでいる。
彼はレオナのきょうだい。それも、双子のきょうだい。彼にこそ聞いてはならない。言ってはならない。それが、リサのこと。リサの名前。
「まあ、大丈夫ならいいのさ」
そう言って、レオンは去っていった。ついに、わたしに口からリサの名前が飛び出すことはなかった。これでいい。リサの名前を口走れば、何が起こるか分からない。でも、一度出かかった名前は、なかなか飲みこめなくなるものだった。
ノックされて、扉が開かれる。次に入ってきたのは、アンナだった。ホットココアを持ってきてくれたのだ。
「アンナ……」
「お嬢様？　どうされたのです？」
アンナはココアをテーブルに置いて、わたしに駆け寄ってきた。わたしはそんなに気にされるような顔をしていたのだろうか。
ほろりと流れたのは、涙？
耐えきれないのだ。耐えきれない。
わたしは何を見てしまった？

わたしは何を感じている？
心を落ち着かせる事なんて出来るわけがない。

アンナがわたしを抱きしめた。アンナらしくない、そう思った。
ここに連れて来られて、わたしの世話係だと紹介された時、アンナはもっと冷たい美しさを纏う人に見えた。だけど、実際は優しい蝋燭の明かりの様な人なのかもしれない。
疲れた心と体を温めてくれる、そんな人なのかもしれない。そう、わたしは安心というものに包まれていた。だから、ぽろりと漏れたのは、レオンに向けて言いそうで言わなかった言葉。

「アンナ……リサは……何処へ行ったの？」

わたしが泣いているせいか、それとも、リサの名前を口に出したせいか、アンナはじっとわたしを見つめた。リサと想い出があったわけではない。名前だって、ずっと知らなかった。知ったのは、よりによって、あの時。見てはいけないものを見てしまった日。
アンナは目を逸らして、溜め息混じりに言った。

「他の使用人の事は、存じておりませんので……」

「嘘よ」

わたし自身、自分が止められなかった。ずっと我慢していた感情が濁流のように押し寄せてくる。特に固くもないわたしの口からは、どんどん言葉が出てきた。慎重さも、警戒も、一切含まれない。
ある意味で、正直な、そんな不用心な叫び。

「わたし、見たのよ。リサが殺されているの、見たのよ。殺した人も、知っている――」

「お嬢様！」

咎めるようなアンナの声に、わたしはますます悲しくなった。

「どうして、どうして、アンナ達は嘘を吐くの？　わたしはどうしてここに連れてこられたの？　教えてよ」

「それは……」

わたしはわたしを止められない。溢れてくる感情に押し流されて、涙も止まらなかった。レオナが後で来る事も忘れて、泣きじゃくった。今まで抑えていた分、わたしはますます混乱していく。

あれを見て、正気でいることの方がおかしい。それでも、レオナにばれないように、我慢してきたのだ。でも、限界だった。早くも限界になっていた。明後日まで長すぎる。早く安全な所に逃げたかった。

「お嬢様は特別な御方。でも、御主人様の御機嫌を損ねるような真似は決してしてしてはなりません」

宥めるようにアンナは言い、そして、わたしの耳元で囁いた。わたしにしか聞こえないほどの声で。仮に誰かが外で聞いていたとしても、聞こえたりはしないだろう。

「明後日までです。明後日まで耐えてください」

「……アンナは？　アンナはどうなるの？」

わたしの極力小さな声で訊ねた。涙は止まらないし、嗚咽も漏れ

るけれど、声を小さくすることは出来る。

「わたくしの事は、お気になさらず」

そう言って、アンナはわたしから離れた。あまり聞いてはいけなかったのだろうか。もの言いたげな目をしているアンナ。その姿がわたしはどうしても気になった。

だけど、アンナはそんなわたしの目から逃げるように、部屋の扉へと向かい、そして俯き加減に振り向いて言った。

「ココアが冷めてしまいますよ」

逃げている？
それとも答えたくない？

気にしないでという言葉が、きちんとした答えではない事をわたしは知っている。じっとわたしが見つめているその視線から逃れるように、アンナは部屋を出ていった。

「お休みなさいませ、お嬢様」

アンナが去れば、次に誰が来るかなんて分かっている。取り残される今のわたしの緊張と恐怖は、ここでずっと働いているアンナの感じているものとは比べ物にならないくらい小さなものかもしれないけれど、それでもわたしには耐えられないものだった。

テーブルに置かれたココアを手に取ると、熱さがわたしの手に伝わってきた。猫舌ではないけれど、熱さに弱いわたしの肌はじんじんと痛んでいる。けれど、カップを放す気にはならなかった。この熱さが、逆に心地よい。不安なわたしの心を紛らわせてくれた。

ココアは少しだけ苦かった。砂糖が控え目なのだろうか。その苦さが少しだけ目に沁みてくる。甘さ控えめのココアを飲みながら、わたしはぽろぽろと泣いていた。アンナに見せた涙が止まらない。このままレオナに遭いたくない。
だから、早く涙を止めなければ。だけど、止まらない。止めようと思って止まるものでもないし、我慢出来るものなら、そもそも泣きだしたりしない。

ココアを飲みながら、わたしは止まらない涙が床に落ちていくのをただ見ていた。泣きながら飲むココアは一層苦くて、けれど、少しだけ甘い。苦さと甘さの渦は、この時間すらもかき乱すかのように混じり合って、わたしの舌に染み込んでいく。止まらない涙。わたしの耳から聞こえてくるのは、時計の針の音。もうそろそろ、レオナがいつも訪れる時間になる。ココアはいつの間にかなくなっていた。飲みきった事さえも、覚えていない。時計の鐘の音が鳴って、わたしは時の流れを知った。

こういう形で、明後日の夜を迎えられたらとても有難い。でも、時間の流れっていうものは、一定した物じゃない。一分ですら、長い時は、一時間よりも長い。一日は、早い時は、一時間よりも早い。そんなことはとうの昔に知っているから、明後日までは本当に待ち遠しかった。
鐘の音が鳴りやんで、わたしはぼんやりとその時を待った。
部屋の扉が開かれて、現れるのは、レオナ。リサを殺した女。この椿館の主人で、全ての鍵を握っているはずの人間。でも、わたしはその鍵が何なのかを知るつもりはない。生きて帰れればそれでいい。……後ろめたさがないわけじゃない。アンナの「お気になさらず」で惑わされたりしない。

わたしはただの小娘なのだ。平然と人を殺すような女に、立ち向かえるわけもない。

レオナはいつもと変わらない表情でわたしを見つめていた。でも、少し様子が違う。いや、様子が違うのは当たり前かもしれない。だって、わたしが泣いているのだから。涙を引っ込めるなんて、無理だった。当然だろう。これがコントロール出来るのは、才能がある人だけだ。

わたしには無理。身体の仕組みが違うもの。

「どうしたの、ミユ」

レオナは本当に心配そうにわたしを覗きこんだ。その表情に、わたしは騙されそうになる。レオナのこの表情。まるで、無条件の愛がわたしを包み込んでくれるかのよう。それに縋りたくなる気持ちが、わたしの中で湧きおこってしまって、わたしは一層泣いた。相手は殺人鬼なのだ。リサを殺した。残酷な方法で。それは、間違いなくこの目で見た事実なのに、どうしてわたしは彼女に縋りたくなるのだろう。

「ミユ……」

気付いたら、レオナに抱きしめられていた。甘い香りがわたしの頭をぼんやりとさせる。泣いた赤子に子守唄を聞かせるように、騒ぐ獣を甘い眠り粉で眠らせるように、彼女はわたしを抱きしめて、甘い声で囁いた。

「大丈夫よ、ミユ」

大丈夫。その言葉は、何処まで大丈夫なのだろう。

「何があったのか、話してごらん」

話せるわけがない。リサの名前を言えない。言ってしまったら、取り返しがつかなくなってしまいそう。だけど、レオナの心配そうな表情は本物のように見えた。リサの名前は言えないけれど、違う事なら、今のレオナになら、訴えられるかもしれない。

「レオナ……わたしは、どうして、ここに来たの？」

背中を撫でるレオナの手は動揺を見せない。レオナから感じるのは、飽く迄も温かな雰囲気のみだった。リサのことさえ見ていなければ、本当に温かな人なのだと錯覚していただろう。それくらい、安心感のある声で、レオナはわたしを包み込んでくれた。

「ミユ。あなたは特別で、大切な人よ」

温めてくれるレオナの匂いが、わたしの鼻孔をくすぐる。

「大切すぎて、大切すぎて、悲しくなってくるぐらい。ミユ」

泣いている？　レオナが？

「だから、ね」

背中を撫でていた手は止まり、代わりに長い爪が食い込んでくる。その異様さに、わたしは怯んだ。優しいレオナが、あのレオナになってしまう気がして、とても怖かった。

「私を置いて行かないで」

レオナの涙が肩にかかる。この人は、どういう人なのだろう。独自の悲しみを抱えて、たくさんの男女を従えて、良家の長として振る舞っている彼女。その裏で、血と肉と憎悪や強欲、狂気といった汚さに塗れた真実を抱える彼女。リサを殺したのは、間違いなくこの人。わたしは今でも覚えている。忘れようとしても、忘れられない。丸裸にされて、手足を落とされてなお、生きていたリサのことを。鉄の棒でリサを穢しながら、彼女が苦しむ様子を嘲笑いながら見ていたレオナ。

――あなたは私のものになるの。

そう言いながら、苦しむリサの胸を噛み千切るレオナ。夥しい血を浴びながら、にやりと笑んでいた彼女。そう、すべてこの人だ。この人がやったのだ。

わたしに毎晩していたのは、なんだったの？
わたしもいずれはリサのようになってしまうの？
そう考えると、今ここでレオナに抱かれていることさえも、怖い事だった。

「置いて行かないで」

仮に置いて行ったとしたら、どうなるのだろう。この人はどうなってしまうのだろう。そして、わたしには、どんな罰が下るのだろう。考えても、予想すらつかない。当り前だ。だって、わたしごときにすべてを把握できるわけがないのだから。

「お願いよ」

そう耳元で言ったレオナからの甘い口付けと、繊細な指遣いで、わたしの身体はいつの間にか蜜を産みだしていた。怖いと言っても、非道だと思っても、レオナを前にすると、わたしの身体はすっかり言う事を聞かなくなってしまう。あっという間に、ベッドに押し倒されて、冷たい指を挿入れられたわたしは、レオナの思うままに鳴いてしまうしかない。怖い、悲しい、苦しい、痛い、そんな負の感情よりもずっと、この感情が勝っている。

——とても、気持ちいい。

この時ばかりは、身も心も馬鹿になる。快楽に溺れてレオナに縋る自分を、すぐに省みる力さえも失うのだから。今夜は何度逝かされてしまうのだろう。そんな不安と期待を胸にしたわたしは、すっかりレオナへの恐怖など忘れてしまっている。

——ああ、なんて、汚らわしい。

9．女を貫く肉のナイフ

次の日、朝餉はまたレオナと一緒だった。

何を問い詰められるわけでもなく、ただ、何もかもを見通しているかのような笑みで、朝餉をとるわたしを見つめている。そんな彼女から伝わる緊張に身を震わせながら、わたしはじっと耐えた。

今日は、レオナは不在となるようで、使用人達も何処か慌ただしく朝の支度をしているように見えた。レオナも急いでいたらしく、わたしの朝餉が終わるより早く、一言だけ残して食堂を後にした。

「今日もおとなしくしているのよ」

そして去り際に、もうひとつ。

「そう言えば、最近この館の周りを子狐がうろちょろしているらしいわ。見かけても関わらないように、ね」

――レオナの機嫌を損ねてはいけない。

そんな言葉を想い出したわたしは、黙ったままレオナが去っていくのを見つめた。

それにしても子狐とは、何のことだろう。まさか、本物の子狐がこんな町中でうろちょろしているなんてことはないだろう。きっと、浮浪者の子どもの比喩だ。

……それにしても、子狐。

狐といえば、わたしの友人を想い出す。でも、彼がこんな所に現れるなんてこと……あるわけがない。子狐の事は考えたって仕方ない。

わたしはさっさと朝餉を終えて、自室へと閉じこもった。

下手に出歩いても、怒られる可能性が高くなるだけ。この間のように見てはいけないものを見てしまっては、もう精神も持たないだろう。だから、部屋に籠っていた方が楽だった。

気が滅入ったら、庭でも散歩していれば時間も経つだろう。そうだ。落ち着いて、時間が経つのを待てばいい。とうとう明日だ。明日の夜にはこの館から出る事が出来るのだ。

――私を置いて行かないで。

泣いたレオナの声がふと甦ってきた。彼女の期待に背く行為をするのが苦しくないわけではない。けれど、このまま彼女の元に居ても、絶望しか待っていないのは明らかな事。どんなに外で生きていくのが大変でも、ここを去るということは、正しいに決まっている。

そう信じることにした。

わたしがそんな思案に捕われていると、部屋の扉がノックされた。どうぞ、と言い終わらない内に扉は開いて、ノックした張本人の姿が現れる。その姿を見て、わたしはいぶかしく思った。そこにいたのは、レオンだった。

思えば、昨日も来た。ただ様子を見に来ただけだと言ったが、いささか不自然だったことは今でも覚えている。

かちゃり、と音がしたのを聞き逃しはしなかった。

「なにか？」
鍵をかけられた事に気付かないわけがない。だけど、わたしは冷静さを出来るだけ保って、レオンを見つめた。
「二度連続のレオナとの食事はどうだった？」
「それを聞きに来たのですか？」
こつ、こつ、とレオンは部屋に入ってくる。どうぞ、と言ったのは確かだったが、にじり寄ってくるように入ってくるレオンの姿は何処か不気味さがあった。
もっと仏頂面をしているような気がしていたのだが、今のレオンは違う。不敵な笑みが薄っすらと浮かんでいる。その笑みは、レオナから垣間見えるものと同じ。
……違う、あの時のレオナと同じものだ。リサを殺していたレオナと同じ笑みが、そこにあった。

「何をしにきたのです？」
近寄ってくるレオンから離れたくなって、わたしは立ち上がった。レオンに捕まってはいけない気がした。レオンはそれ以上無駄な事を言わなかった。
わたしは急いで、レオンの後ろ――扉の方へと走った。
けれど、ここでの生活に慣れてしまったわたしは、すっかり外で培った身体能力を退化させてしまっていた。あっさりとレオンに捕まったわたしは、そのままベッドへと虚しく押し倒された。
「やめてください！　なんでこんなことを――レオナ様に知られたら、どうするおつもりです！」

犯されるという事には気付いていた。でも、一番怖いのは、暴力でも強姦でもなく、レオナの事だった。だが、わたしの一瞥と忠告は、レオンには通用しなかった。

「レオナならもう外出したよ。それより、君はまさかこのままずっとレオナだけの玩具でいられると思っていたのかい？」

レオンの力に叶わない。男と女とは言っても、こんな男にあっさりと捕まるなんて思いもしなかった。ひとつは、着せられている服のせいでもある。満足に動けないくせに、他人からは安易に脱がせられてしまうこの服。着る者のための服ではなくて、着せる者のための服であることは明白だった。

次第にレオンの手がわたしの鼠径部へと伸びてくる。そこだけは触られたくなかった。相手が誰であっても、そこを触られてしまえば、満足に抵抗なんて出来なくなる。片手では乱暴にわたしの両手を握り抑え、片手ではやさしくわたしの鼠径部を撫でていく。

「やめて！　レオン様！」

「ペットの分際で、命令かい？　生意気な小娘だな」

段々とわたしの服は脱がされていく。
そのとき、ほんのすきがあったのでわたしは、レオンの拘束を解いて、ベッドのシーツで身を隠そうとした。だけど、すぐにまた拘束されて、今度は首筋をじっとりと舐められていって、痺れるような快感がわたしの身体を巡っていった。

――やめて……。

その声はもはや外に漏れず、全く逆の感情でわたしの心はいっぱいになっていた。怖いという気持ちだけではない。その証拠に脚の付け根はもうすでにじっとりとしていた。

すっかり濡れたわたしの中に入ってくるのは、レオナよりも少し太い指。それが二本。少し痛かった。でも、痛がる声を上げても、レオンは容赦しない。

ゆっくりと確実にわたしの中へと侵入して、そして、膣壁を探り始めた。その奇妙な感覚と共に、わたしの身体は突然火照り始めた。

レオナにされている時も来る感覚だ。

レオンはわたしの様子を見ると、面白そうにその部分を攻め続けた。

「んん……あっ――」

「随分、素直な身体をしているのだね。レオナはいつもこれを独りで堪能しているわけか。レオナがハマるのも分かるな。まあ、一番大切な評価はまだ先だけどね」

くつくつと笑いながら、レオンはわたしの中をまさぐり続け、そして、一気に指を外へと掻きだした。同時に、わたしの中からたくさんの愛液が噴き出てくる。わざとしているのだろうか。こんな男に全裸を見られていること自体があってはならないのに、どうして、こんな目にあっているのだろう。

「さてと、十分濡れているのだから、本番はこれからだね」

――本番。

その言葉にわたしは絶句した。レオナとの行為ではせいぜい指か

小さな棒程度だった。
けれど、本番となると違う。
経験がないわけじゃない。でも、その経験も快楽と共に痛さがかなり伴うものだった。痛さと快楽の比率は、男に全てが委ねられる。そして、このレオンがそれを握っているのだ。

わたしは怖くなった。けれど、身体はすっかりレオンのものになってしまっていた。散々弄られ続けたわたしの膣は、熱い肉棒を待望している。それが現れようとしていることを、喜ぶように、下半身からわたしの頭に指令を送っているのだ。目の前に現れたレオンの肉棒を、わたしは舐めた。もっと、きちんと舐めろという命令に、わたしは口いっぱいに肉棒をくわえて、そして、一生懸命舐めた。

考えなんてない。わたしの下半身が、これを求めているからだ。舐めている間、レオンの手がわたしの乳房をまさぐっていた。乳首を攻める手に、わたしの身体は時折、跳ねるような快感に襲われて、肉棒を舐めるのが大変だった。
暫く舐めると、レオンは肉棒を放して、そして、わたしをまたベッドに寝かした。合図も何もない。今のわたしは、ただ、レオンのためだけにある。レオンの腹を満たすだけの食物。

「う……ぐうう……」

結構な痛みだった。初めてじゃないのだけれど、レオンの肉棒はそれだけ大きかった。わたしが痛がっているのを見て、レオンはサディスティックな笑みを浮かべて、わたしの耳をしゃぶりながら、囁いた。

「今からじっくり食べてあげるよ。レオナに怒られるのはどうせ君だからね。君の中にたくさん種をまいてあげる。でも、安心して。

それまで痛みと一緒に、癖になる快楽をあげるからね」
どんどんレオンの肉棒がわたしの中へと挿入っていく。奥まで届く前も後も、痛みは変わらなくて、わたしは顔をしかめながらその痛みに耐えた。やがて、レオンの肉棒は奥まで挿入り、わたしとレオンは一体になった。

「痛いかい？　俺は気持ちいいよ。ミユのきつきつの膣壁が包んでくれてね。勿体無いな。こんなにいいものをレオナだけのものにしておくなんて……」

レオンの息遣いが荒くなってきた。出し入れされていく肉棒の摩擦に、わたしは声を押し殺しながら、暴れた。そのわたしの両手を抑えて、レオンはわたしの身体をひっくり返した。
激しく攻められては、逃げ出す事も出来ない。レオンの攻めは驚くくらいわたしの弱点に当たっていて、我慢しきれないくらいの喘ぎ声が、わたしの口に溢れていた。痛みはまだある。でも、痛みだけじゃない。頭がおかしくなるくらいの快楽が、わたしの身体のすみずみまでを痺れさせ始めていた。

段々と落ちていく感触。好きでもない男に抱かれた事がないわけじゃない。だけどこれは、すごくおかしな感触だった。両手を抑えられているのも、全くの無意味。
既にわたしに逃げる気なんてなかった。レオンの荒い吐息がうなじを、そして両手がわたしの乳房をまさぐる。うなじを舐められて、噛まれて、レオナがするよりも荒い行為が、わたしに快楽をもたらしてくる。わたしにはすでに、声をあげないように、なんて理性も残っていなくて、レオンにされるがまま喘ぎ、咽び、ベッドのシーツに縋りついて、その欲望を一身に受け取っていた。

わたしの中を彼の肉棒が突き刺していく。その痛みと征服される快感、捕食されているという快感。おかしくなってしまったかのようだった。レオナとの夜には感じないものを、レオンは与えてくる。
奥深くへと挿入っては出ていく感触に、痛さと痙攣と快楽と恍惚が同時に襲い掛かってきて、わたしは泣きながら喘いでいた。くちゅくちゅと嫌らしい音がする。
わたしの膣はしっとりと濡れていて、彼の肉棒が入りやすいように、より快感を得ることのできるように、すっかりと出来あがっていた。

生温かい感触がわたしの中にある。レオンは荒い息を上げながら、必死にわたしを支配している。彼も気持ちがいいのだろうか。それ以上に、わたしが気持ちよくなっているような気がする。好きでもない男なのに。どうして、身体は欲するのだろう。膣がひくひくとしていて、肉棒をくわえられていることに喜びを感じているようだった。

レオンに身体を掴まれて、反転させられる。
向かい合いながら、でも、わたしの目は彼を見ない。彼の顔はわたしの乳房にあった。必死に乳房に吸いつき、猛獣のようにわたしの全身を食らう。喰らわれているはずのわたしは、その快感にただ喘ぐばかり。抱きしめて、彼の首筋に口づけをする。彼もわたしの乳房から口を放して、わたしの唇に吸いついてきた。舌と舌を絡ませて、本来は実を結ぶための行為を、必死に続けていった。
やがて、レオンはわたしの耳元で、呟いた。

「いい子だ……ミユ」

それが合図だった。さっきよりもずっと強い攻めが始まって、わたしの膣の中で彼の肉棒が荒ぶっている。わたしの頭は熱くなって、

悲鳴にも似た嬌声を上げる事も自分ではもう止められなかった。そして、それが暫く続くと、やがて、彼のものが一気に深く挿入された。
　生温かい感触。同時に、どくどくという脈打つ感触が、わたしの中で感じられた。気持ちがいい。ゆっくりとレオンは腰を動かして、わたしの中に放たれた物を掻き雑ぜている。

　すごく気持ちがよかった。

「どうだい……レオナよりも、気持ちよかっただろう……」

　気持ちがよかった。だけど、何故か、悲しくなった。
　今のわたしはきっと、拒否ということを忘れてしまったのだろう。

　レオンが飽きるまで、相手をするつもりになっていた。快楽に支配されきってしまっている。わたしの中に残ったままの大人しくなったレオンの肉棒を、出される前に膣の筋力で少しだけ攻めた。レオンに抱きついたまま、自分から深い口づけをレオンにして、彼の乳首を舐めた。

「不思議だけど……すごく、気持ちよかった……」

　わたしがそう言うと、レオンはわたしの中から肉棒を出した。わたしは、精液と愛液に塗れている彼のものをそっと触って、軽く舐めた。何度も、何度も。
　彼はそのわたしの頬を抱えると、唇を舐めながら、そのままベッドにわたしを押し倒し、両足を持ちあげた。

「攻められるのは、好きじゃないのさ」

そう言って、わたしの入り口を舐めはじめた。精液と愛液に塗れた場所を、舌で出し入れされている感触。まだ彼の形に慣れていなかったわたしの股からは、血が漏れていたらしい。
それすらもレオンは舐めて、そして、また、彼は自分の肉棒をわたしの股間にあてがった。見つめるわたしに、レオンはにやりと笑いながら言った。

「一回で済むと思ったかい？　今日は、レオナはいないのだよ」

一気に挿入されて、わたしは悲鳴を押し殺す。一回挿入れたといっても、やっぱりまだきつかった。少しずつではなく、ナイフでも突き立てるように、一気に奥まで突き刺されて、とても痛くて、とても苦しかった。目に涙を浮かべていたらしく、それをレオンは舐めとってまた口づけをした。

「やっぱり、痛さを感じている時の君は、魅力的だね」

何を言っても、どう反応しても、レオンが飽きない限りこの状態からは解放されない事は分かっていた。痛さと快楽で感じる痺れに身をよじらせながら、わたしはじっとレオンの気が済むのを待った。
いつまでだろう。レオナがいれば。レオナさえいてくれれば、こんな事にはならなかったのだ。

……いや、それは違う。この館に来なければよかったのだ。レオナについて来なければよかった……。
首を絞められたわたしは、それ以上考える事が出来なくなった。レオンはどうして首を絞めるのだろう。首を絞めながら、何度も、何度も、何度も、わたしの身体を突き刺していく。
捕食によく似たこの行為。性欲を満たすためだけのこの行為。一回でも快楽に負けて喘ぎ喚いた自分が情けなくて、わたしは気付け

ば泣いていた。

泣いたら終わるとでも思った？

いや、違う。この涙がレオンのサディスティックな心をますます刺激することは分かっていた。まだ殴られていないだけましだ。いや、それか、身体に傷でも付ければ、レオナにこの事を知られてしまうからかもしれない。それがなければ、わたしはとっくに傷だらけだったのだと思う。

二回目の射精が終わって、わたしはまたどくどくとした生温かさを感じた。愛ではなく、欲望に塗れたこの行為。性欲処理のためだけに、わたしの中にぶちまけられた種子。

レオナに知られたら、どうなってしまうのだろう。まさか、双子のきょうだいに手を出すなんてことはないだろう。

……それなら、責められるのは、わたし？

深く息を吐いて、わたしは首絞めから解放されたことに気付いた。黙ったままベッドを立つレオンを見上げる。顔は涙と鼻水でぐしょぐしょだった。体中、体液まみれで、気持ち悪かった。そして、思い出すのは、快楽に負けて、自分からレオンと繋がろうとした自分の姿。悔しかった。情けなかった。

レオンはそんなわたしを放っておいて、何処かへ消えた。数分もしない内に戻ってくると、ベッドに寝そべったままのわたしを見下すように見つめた。

「風呂に入れ」

そう言って、レオンはわたしに手を差出した。差し出されたレオ

ンの手はとても熱く、手首を握る力もとても強かった。

１０．心を打ちつける言葉の釘

風呂場は各部屋にきちんと設置されている。わたしの部屋にも勿論、風呂場はあった。

けれど、今のわたしには風呂に入る気力もなかった。何もしたくない。でも、そのままベッドに寝ているわけにはいかないということらしく、レオンは裸のわたしを風呂場に押し込んで、扉を閉めた。

扉越しにレオンはわたしに言った。

「このことをレオナに言っても無駄さ。レオナの性格じゃ、その苛々は君にぶつけるだろうしね。それに、俺はミユが自分から俺とやりたがっていたって言えるしなぁ」

わたしは恐怖を覚えた。そんな事をレオンが言えば、レオナが怒る事は当然だ。それでなくても不機嫌になるに違いないのに。

「やめてください。それだけは」

「ミユ、君はやけにレオナを怖がっていないか？」

突っ込まれたくないところを突っ込まれ、わたしは唇を噛んだ。

まさか、リサが殺されているところを見たなんて、レオンに言えるわけもない。彼らは双子のきょうだいなのだ。共謀している可能性だってある。

わたしは泣きたくなった。どうしてこんな目に遭わなくてはいけないのだろう。

ああ、全てはレオナについてきたのがいけなかった。この椿館に来てしまったのがいけなかった。少なくとも、明日までは、椿木ミユでいなくてはならない。そして、椿木ミユでいる限り、わたしは、この立場から逃れることは出来ないのだ。

わたしはべたべたになった顔を手で拭うと、浴槽へと入りこんだ。さっきレオンが姿を消したのは、風呂の湯を入れてくれたかららしい。この館の主のきょうだいが直々に入れてくれた湯だ。なんていう皮肉も、考えてみて、虚しかった。

考えようによっては、風呂を入れてくれたのは随分と優しいことだ。もしあのまま放っておかれたとしても、あのままでいる事なんて出来るわけがない。あんな姿を使用人に見せるのも嫌だった。アンナに見られるのも……。

ましてや、レオナの耳に入ってしまうようなことがあっては、恐ろしいものだ。レオンは、どうせ責任はわたしに押し付けられると言っていたけれど、これは、少しばかりの優しさ……なのだろうか。

「レオナを何故怖がる？」

レオンに再度問われ、わたしは口を噤んだ。

言えるわけがない。でも、何も言わないでいても、彼が執拗に聞き続けるだろうことは予測できた。何か言い訳をしなくてはならない。だけど、この狡猾そうな男を前に、いいわけなんて出来るのだろうか。まだ、風呂場の扉が仕切りになっていることが救いだった。

表情を読まれる心配がないだけでこんなにも心強いことなんてない。

「レオナ様は……輝かしい御方です……」

自分でもたどたどしくなっていることがよく分かる。けれど、無理して強い口調で言ったって何ら変わりないだろうし、そもそも言うこともできない。

「あの方を前にすると、わたしなんて本当に小さな存在に思えて、それで……」

うまく言葉が繋げなかった。いい言葉を捜そうとすればするほど、それは難しくなっていく。うまくいかない事が不満で、わたしは浴槽の中に唇を沈めた。

わたしの言葉が続かない事を感じ取ってか、レオンは小さく笑った。

それがどういう意味のこもったものなのか、表情が見えないから読み取りにくいけれど、何にせよ、わたしの不安を煽ることは確かだった。

「輝かしい御方……ねえ……」

くっくっと笑うレオンが、わたしの言葉なんて鼻から信じようと言う気がないのは明白だった。

彼は彼なりの考えを既に持っている。そして、それはわたしがこの状況下でどう答えたところで、揺らぐことは決してないとも言える。

「レオナは心配していたよ。君の心が自分から離れてしまう事を恐れているからね。……まあ、今日の事を話せば、あいつが嫉妬するのは目に見えているのだけれど」

そうなったとしたら、本当にわたしだけが責められるのだろうか。レオナとレオンは双子のきょうだい。だけど、きょうだいである事

を上回る暴力性をレオナが持っていたとしたら、レオンもまた危険なのではないだろうか。

「まあ俺は、あそこまでレオナが執着する君を少しでも味わってみたかったから、どうでもいいことなのだけれどね。そうそう、味はまあまあよかったよ。どっかの高級娼婦よりも艶っぽくて、癖になるマゾヒスト女って感じかね。サディスティックな要素を普段持ち合わせていない奴も、君と寝たら首の一つや二つを絞めたくなるだろうさ。……それにしもて、これは面白い」

レオンの笑いは狡猾そうなもので、不穏だった。何よりも、わたしはこんな男と寝てしまった事、こんな男の体液を身体の中に受け容れてしまった事が気持ち悪くて仕方なかった。

今も身体の中に、この男の体液が残っていると思うと……しかも、それは、下手すれば実を結ぶものとなると思えば……とても怖いものだった。

「知っているかい？　いや、知っているのだろうね。だから、君はレオナを怖がっているのではないのかい？」

レオンが何か言おうとしている。それはとても大切なこととの気がした。

「レオナは……身体の中に怪物を飼っている。それは俺も同じ。きっと、君の中にも小さな怪物の卵くらいはあるだろうよ。だが、レオナと俺の怪物は特別だ。君のとは比べ物にならないくらいの凶暴な怪物を、俺達は飼っているのだよ」

「怪物……」

その怪物とやらがリサを殺したとでもいうのだろうか。そういって、彼は、レオナの人殺しを説明した気でいるのだろうか。わたしの中にだって、確かに憎悪や嫉妬、羨望、失望や怨みといった負の感情は存在するし、それらは例えようによっては怪物の様なものだろう。

けれど、それだからといって、人間をあんな惨い方法で殺すことを、それを悪びれる様子もなく、そんな説明で済ませるなんて、わたしにはとても理解出来ない。

レオンは扉の向こうでくすりと笑った。顔が見えない分、不気味さは倍増する。怖くて、怖くて、仕方なかった。

「その様子だと、君は、レオナの本性を結構知っているようだね。まあ、毎晩ベッドを共にしていれば分かると言うものだけれど……それともなんだい？　君はそれ以上のことを知ってしまうような場面に遭遇したとでも言うのかい？」

レオンの口ぶりは相変わらず、疑問形ではなくて断定に近いもの。自分が予想している事がほぼ真実であることを疑ってはいない。ただ、わたしがそれを認めるのを待っているだけだ。

もしも、扉越しでなかったら、隠しきれなかっただろう。

「まあ、君が何を知っていたとしても、俺には関係ないけれどね」

その言葉が、ぐさりと胸に突き刺さった。レオンは何かに気付いている。

多分それは、レオナに話されたらとても困る事。

言葉の一つ一つでわたしの反応を探っているのがよく分かる。扉越しでも、油断出来ない。顔や姿が見られなくても、返す言葉や、吐息、沈黙などで、知られてしまう事も一杯あるものなのだ。

「この事はレオナに言わないでおいてあげるよ」

その言葉を最後に、レオンの気配は消えた。

取り残されたわたしは、温かい湯の中で寒気を感じていた。レオンの心の中を覗いてやりたい。何を知っていて、何を知っていないのか、何を考えていて、何を考えていないのか、それを知りたかった。

これ以上、ここに居てはいけない。そう思ってしまう。ああ、でも大丈夫。大丈夫なはずだ。明日の夜にはここから出られるのだから、大丈夫だ。今はじっと耐えるしかない。

余計な事は何も考えずに、明日の夜を待てばいいのだ。

——身体の中に怪物を飼っている。

それが何を意味しているのか、わたしには分かる。

リサ以外にもああやって殺されていった人がいないなんて事があるだろうか。

きっと、何人も、何人も、ああやって殺されていった。あの部屋は、そういう部屋なのかもしれない。人を監禁し、死ぬまで痛めつけるための部屋。そして、この館にいる人達は、皆、その事を知っている。あんなに悲鳴が聞こえたのだ。知らないはずがない。リサが何をしてしまったのかは知らないけれど、あんな残虐な方法で殺されてしまうほど悪い事でもしたのだろうか。見捨てられるようなことをしてしまったのだろうか。いや、そんなわけがない。皆、怖いのだ。怖くて、助けられなかったのだ。そして、何人も助けられ

ずに苦悩しているのだっているかもしれない。

ああ、狂っているのは、レオナだ。
そして、この館に流れている空気だ。誰もレオナに逆らえない。逆らってはいけない空気に、皆が負けてしまっている。抗えないまま、ただ従っている。
そして、この空気が流れ始めたのは、レオナが生まれるよりずっと前の事なのだろう。それを示していたのが、あの古ぼけた本。崩壊的な詩文。
見てはいけないものを幾つも見てしまったわたしには、もうこの館にいることなんて出来ない。

さまざまな感情が入り乱れて、わたしは浴槽から出られないままじっとうずくまっていた。温かい湯も、長く抱きかかえられていれば、具合も悪くなるもの。だけど、動きたくなかった。レオンがいなくなってから、誰もわたしに話しかけてくる者なんていない。それが、心地よくもあったし、寂しくもあった。

タオルケットに包まれて、風呂場から出た時、部屋の窓から見える空の色は、すっかり変わっていた。よくもなかったけれど、悪くもなかった天気。
だけど、今はすっかり曇り空になっている。天気が崩れるのだろうか。まるで、今のわたしの心を反映しているよう。暗いのは、時間が経ったからではない。
本来のこの時間だったら、もっと美しい空がわたしを見つめてくれるはずだ。

タオルケットを抱きしめて、部屋のベッドに近づくと、そこには着替えが置いてあった。
これも、レオナの好みで決められた服。この館に居る限り、レオ

ナの決まりは守るべきこと。それは分かっているけれど、もう、この服を着ること自体も嫌になってきている。

ここへ来た時のみすぼらしい服が懐かしい。

外は自由気ままだった。それはもう、全てが自己責任であって、塀で囲まれていないという恐ろしさは、何処までも付きまとったし、何度も、何度も、怖い目に遭ったけれど、それでも、この館でいつ殺されるか分からない恐怖にさいなまれるよりも、ずっとマシだ。

こんなこと、おとなしく殺されるのを待つ家畜がいいか、いつ襲われるかも分からない野生がいいかの違いに過ぎない。それならわたしは、野生を選ぶ。自由を選びたい。外では分からなかった。塀の中に居る方がずっとマシだと思っていた。

来てしまった所が悪かったのかもしれない。椿木ミユという名前を与えられたのが悪かったのかもしれない。これは、わたしの運が悪かっただけのこと。レオナについて行ってしまったことが、レオナに声をかけられてしまった事が、悪かった。

用意された服を持つわたしの両目から、涙がこぼれていった。此処へ来てから幾度となく流している。これが、何を意味した涙なのか、自分でも分からない。けれど、わたしの心にも限界が近づいていることはよく分かった。ここで働いている人達は、どうなってしまうのだろう。

いや、だけど、今は、自分が逃げることで精一杯だ。わたしは救いのヒーローでもなんでもない。この椿館にいる者たちを救う力と勇気なんて、わたしにはない。

……アンナ。あなたはわたしを救おうとしてくれている。わたしに何を求めているのだろう。せめて、彼女もこの恐ろしい館から逃

れられたらいいのだけれど。
と、服を着替えたその時、誰かが扉をノックする音が響いた。
「お嬢様、アンナです」
噂をすれば影というものなのだろうか。噂をしていたのは頭の中でだけであったけれど、なんとなくアンナが来るような気はしていた。扉を開けた先にいたアンナは、何処か疲れているような、そんな気もした。
「お夕食の準備が整いました」
「もう夕食の時間なのね……」
時間の進みが早い事は、ある意味、有難いことかもしれない。それだけ明日の夜が来るのが早く感じるということだから。
「もしもお具合が悪いようでしたら、お部屋にお持ちしますよ」
淡々とした言葉の裏に、優しさがあるのは分かっていた。
わたしは黙ったまま俯き加減にその言葉に甘える意を伝え、部屋に戻っていった。アンナがああ言うということは、レオナやレオンは一緒に食事を取らないという事だ。それならば、食堂での緊張なんて少しもないけれど、部屋を移動するという気力がもうなかった。
なんとなくベッドの上に座って、料理が運ばれてくるのをじっと待つことにした。
外の様子は薄暗くてあまりいいとはいえない。明日の仮面舞踏会にレオナとレオンが迎えないくらい酷い天気にならなければそれでいい。お願いだから、明日には回復して欲しい。陰鬱なこの館から

出る時くらいは、清々しい空の下に戻りたい。そんな考えがふらふらとわたしの頭の中を巡っていて、ぼんやりとしてきた。段々と眠気に襲われていくこの感覚。

それに酔いしれていると、再び扉がノックされた。

料理だろうか。そう思ったけれど、違うことはすぐに分かった。開ける前に、答える前に、扉が開いたからだ。

「ミユ、いるわね」

その声に眠気が吹き飛んだ。現れたのは、真っ赤なドレスに身を包むレオナ。

帰宅したままの出で立ちで、ここに訊ねてきたようだった。わたしはすぐに立ち上がって、レオナの前に立った。真っ赤なドレスはレオナの存在そのものを際立たせているかのようだった。

強すぎるその印象は、今のわたしの目と心にはきついものだった。

「明日の夜は阿利崎邸に出かけるわ。勿論、あなたは連れていけないけれど、夜には顔を出すから、おとなしく待っているのよ」

「はい……」

「元気がないわね。どうかしたの？」

「いいえ……特には……」

そう答えるしかない。だけど、特に何もないように装う力さえも、今は出てこなかった。力ない返事に、レオナが首を傾げないはずがない。鋭いレオナの眼光に負けて、わたしは目を逸らして、床を見つめた。

「特には……ねえ。レオンも言っていたけれど、あなた、何かに怯えているわね」

「え……そんな、ことは……」

レオンとレオナ。この二人は同じものと考えた方がいいかもしれない。そう思った瞬間だった。どちらかがわたしの絶対的な味方になるなんてこと、あるわけがない。

それよりも今は、この状況をどうやって抜けきるかだ。
レオナはどうして今、問い詰めてくるのか。
様子を見に来ただけ？
明日の事を伝えに来ただけ？
そうだったとしても、今のレオナを納得させなければ、この状況を抜ける事は出来ない。

じっと見つめてくるレオナが、何を感じているのか。覗きたかった。彼女の真意を覗きたかった。わたしが何に怯えているのか。それは何故なのか。彼女の納得できる答えを用意できるわけもない。わたしが何を言おうと、納得するかどうかは彼女次第。レオナ。彼女の疑惑から逃れるには、どうしたらいいだろう。明日までは。明日までは疑われずにここを去りたいのに。

レオナはそっとわたしに近づいて来て、じっとわたしの目を見つめてきた。こうされると、目を逸らさずにはいられない。レオナは何を思っているのだろう。こんなわたしを見つめて、何を思っているのだろう。何かを疑っているのだろうか。
それとも心配？
レオナは黙ったまま、わたしを抱きしめてきた。冷たい手が背中に、吐息が首筋にかかる。わたしに見えているのは、レオナの真っ

赤なドレスの色。目を合わせる事が出来ないまま、わたしはレオナに抱かれていた。

「ねえ、ミユ？」

耳元で囁いてくるレオナの声に、わたしの身体が凍っていく。

「あなたは私を置いて行ったりしないわよね」

１１．仮面舞踏会の夜

いよいよ、阿利崎邸での仮面舞踏会の夜がやってきた。
わたしにとっては、一生を左右すると言っても全く過言ではない夜。御者リカオンによる馬車が走り去る所を、屋敷の上階からじっと見送った。これで、レオナの姿を見るのは最後であるはず。
最後でないと言う事は、きっと死と同等の意味を成すだろう。

昨晩のレオナと過ごした時間を思い出しながら、わたしはもうすぐ来るだろう自由の時を感じ、身震いした。本当に逃げられるだろうか。本当に椿木という姓を脱ぎ棄てられるだろうか。いや、逃げなくてはならない。脱ぎ棄てなくてはならないのだ。

「お嬢様……」

アンナの声に、わたしは頷く。
アンナが用意してくれた地味な色のマントを手に持って、アンナに続いて部屋を出た。
他の使用人達にも見られてはならない。一番見られてはならない者はいないとはいっても、レオナを前に何も見てないなんていえるだろうか。寧ろ、わたしが逃げようとするのを留めるに違いない。アンナがわたしを逃がそうとしてくれていることが奇跡なのだ。

現に、アンナは何も言わず、とても慎重に前を歩いていた。明かりも最小限に蝋燭の明かり。ゆっくりと、だけど、急ぎ足で進む彼女を前にしていると、とても緊張した。物音をたててはいけないという緊張。それは、とても大きな緊張で、呼吸すらも難しくなるほ

どだった。そうして、段々と、わたしが前に行こうとしていた西扉へと近づいてきた。以前、アンナに引きとめられた場所だ。ここから先は、外の世界への通用口。ただアンナについていくしかない。

「アンナ……」

「お静かに……」

アンナに咎められ、わたしは口を閉じた。

そして、間もなくして、西扉はさり気なく現れた。誰もが見逃しそうな扉。正門から続く正面扉に比べたら、全く地味な扉。だけど、この扉がわたしを外へと導いてくれるのだと思うと、何処となく温かい気持ちになれた。そんな西扉をアンナは素早く開けた。

その開かれた先に見えるのは、番犬も飛び越せないと言う高い緑の壁。

夜である今は、その緑の色もよく分からなかった。

辺りを見渡すわたしの手を、アンナはぐっと握った。その時、わたしは、行く手に誰かがいる事にやっと気付いた。

まさか、番犬だろうか。いや、それにしては、小柄だった。それは、犬と呼ぶにはまだ少し身軽な体型の者。呼べるならば、狐が妥当なところだろう。

「狐……？」

そう、それは、狐だった。わたしと同じように宿無しの身として生き抜いていたあの少年。

間違いなく、あの狐だった。わたしは目を見開いたまま、アンナに引っ張られるままに、狐に近寄っていった。狐は、間違いなく狐

だった。久しぶりに見るその姿に、わたしの目から、自然と涙が零れた。安心なのか、苦しさなのかも分からない、不思議な涙だった。
ただ、狐は小さく笑んで、その涙を拭ってくれた。

「久しぶり……今は、ミユだっけぇ？」

「どうして、ここに？」

悪戯っぽく言う狐にまともな返事すらも出来ず、わたしは困惑した。狐がこの椿館にいるわけがない。彼が入れる隙間なんてどこにもないはずなのに、魔法でも使わない限りは、何処からも入る事なんて出来ないはずなのに。

「こっそり覗き見していたら、そちらの美人のメイドさんに雇われてね」

くすりと笑いながら狐は言った。

「毎日、遊びに来る子狐がいるようでしたので、餌付けしたまでで御座います」

アンナは静かにそう言った。

「よく言うよ。俺が猫の友人だって知った途端に、そっちから頼んできた癖に」

狐のからかう声に、アンナは無言で返した。話がよく見えないが、どうやら狐とアンナは以前からやりとりをしていたみたいだ。わたしがここから出られるのも、狐の協力があるからこそのようだ。

「それにしても、いくら魔物が怖くないからって、何も自ら魔物の巣窟へと吸い込まれなくたっていいのにね」

「魔物って、レオナ様のこと……？」

「しっ……」

狐とわたしのやりとりをアンナが制した。まだここは椿館の敷地内だ。使用人や番犬がくるかもしれないという危険からは脱却していない。アンナは何処までも冷静だった。

「分かった、分かった。一応、俺が来た道は大丈夫なはずだけどね」

「この館の者達を見くびってはいけませんよ。館外に住まう魔物と同等程度には厄介なモノもおります」

アンナの冷たい口調に、狐はにやりと笑った。

「それって、あんたみたいな奴の事かい？」

くっくっと笑う狐に、アンナは再び無言で返す。そして、わたしの手をぐっと引っ張り、アンナは狐を無視して歩き出した。狐はそれを見て、溜め息混じりについてきた。

「お固い姉さんだぜ。ちょっとからかっただけじゃないか」

「そんな時間はありません。早く裏門へ」

アンナの鋼鉄の返答に、狐は参ったようだった。アンナはまるで見える者にでも追われているかのように、先を急いだ。時間がない

のだろうか。
けれど、御者であるリカオンもまた仮面舞踏会にいるのならば、まだ慌てるような時間ではないのでは……。
「レオナ様は何処までも抜け目のない御方。もしかしたら、わたくし如きの計画は、とうに見破られているかもしれません」
ここにきて、アンナは非常に不安な事を言いだした。
アンナについていきさえすれば安心だと思っていたわたしの脳裏に、一抹の不安が生まれた瞬間だった。とても嫌な予感がする。この館で感じる不安というものは、命の危険ではあるけれど、それ以上のものかも知れない。それは、わたしがリサの最期を見たから感じるのだろう。
現に狐は眉唾とでもいいたげな表情で、アンナの言葉を流した。
「行くならさっさと行こうぜ。裏門まではどうせ誰も来やしないさ」
その確信は何処からくるのか分からないけれど、狐はそう言ってひょいひょいと前へと進んでいった。アンナはそれでも己の緊張感と慎重さを失わずに、わたしの手を引いて進んだ。わたしは、アンナの慎重さに従う事にした。何年この館に仕えているのかは分からないけれど、わたしや狐なんかよりもこの館に慣れているのはアンナである。
この館を相手にしている今、彼女の行動や意識を無下に出来ないのは当然だった。
「猫……ミユだったか……どっちで呼べばいい？」
狐に唐突に問われ、わたしは苦く笑った。

「どっちでもいいわ」

椿木ミユを捨てようとしている今だけれど、ミユという名前を呪ったりはしない。

寧ろ、育ちの上でつけられていた名前を想い出すよりも、いいかもしれない。

レオナに与えられた名前ではあるけれど、この名前を呪うほど、レオナのことを嫌いではないのかもしれない。

けれど、身の安全を考える限りでは、レオナからは一刻も早く離れるべきだと判断しているのだろう。

「どっちでもいいとは、困る答えだな」

「静かにしてくださいと言っているでしょう？」

若干、苛立った声で、アンナが言った。アンナのそういう態度は珍しいので、わたしは少し怯んでしまった。けれど、狐は怯まず、苦笑のみを浮かべて謝りの意を軽く示して、さらに先へと進んだ。

「ほうら、裏門が見えてきたぜ」

狐に言われて気付いた。確かにそれは、裏門だった。リカオンらしき男が見張っていた門。外へと続く門。正門よりもずっと警備が薄い場所。

「今夜はあの忌々しい番犬のおっさんもいないようだしね」

狐は笑いながら言った。たぶん、その番犬のおっさんとは、リカオンのことなのだろう。わたしが以前見た男もリカオンだとしたら、やはり彼はここをずっと守っているのだろう。そして、それを知っ

ているということは、狐は何度かこの裏門に近づいてきたのだろう。

「さあ、急ぎますよ。油断してはいけません」

アンナに急かされて、狐は先へと進んだ。わたしはアンナに手を引かれるのを待ってから、歩き出した。一人で歩くのがもはや怖かった。外に居た頃は、魔物の存在に怯える人達を尻目に、独りで歩き回っていたというのに、今のわたしは違う。

アンナに手を引かれなければ、歩くことすら怖いと思ってしまう。もしかしたら、魔物は本当にいるのかもしれない。わたしはその魔物を本能的に感じ取って、怯えているのかもしれない。

裏門は無人だった。この上なく無防備な状態だった。よく見れば、リカオンよりも小柄な番犬が二人程、門の隣に縛られて気絶していた。これをやったのは間違いなく狐だろうと言う事はすぐに分かった。

裏門は閉められていた。狐がそれをゆっくりと開ける。どんなに慎重に開けようとしても、軋む音は避けられない。夜の闇に吸い込まれていく音が、わたしはとても気になった。

怖いのではない。もっとこう、身体の全てを締め付けるような感覚が、わたしを襲ってきた。アンナの手を握って、わたしはその門をくぐった。

一歩出れば、晴れて、自由の身。さらに二歩、三歩、四歩、と椿館から離れていけば、わたしは元の野良猫に戻る事が出来る。アンナの手から離れて、わたしはさらに歩き出した。

ここまで案内したアンナに対し、別れと感謝を告げようと振り返る。

その時――。

「ほうら、やっぱり思った通りに動いたでしょう？」
嫌に聞き覚えのある青年の声がした。
「残念です。使用人風情が、御主人様方を欺こうなどと考えるなんて……」
男の声。姿は見えない。だが、薄っすらとその影は見えた。大きな影。
握る手に汗がにじむ。アンナの手を感じていなければ、わたしは呼吸すらも忘れるくらい恐れていただろう。狐は険しい顔で、その影を見つめていた。わたし達の目に見えている影。
それは、とても大きくて、一つではないけれど、一つ。
二頭の馬と一つの車。馬車だ。誰の馬車かなんて、考えるのも愚かというもの。
馬車の前に降り立っていたのは、二人の人物だった。喋ったのは、そのうちの一人と、馬車にて待機する御者。ああ、これらが誰かなんて、考えるのも愚かというもの。
「アンナがまさかここまで感情を露わにした行為を見せるなんて、面白いっていえば、面白いけれどねぇ」
わたしは堪らなくなって、アンナに縋った。だが、アンナもまた、動けないでいた。立ち向かう気力なんて起こるはずもない。それは、椿館に一度でも住んだ者ならば、皆全て同じ事。
ただ、狐だけが抵抗の意を見せていた。
「狐ね。正直、毛皮にしか用はない生き物だな」

そう言って笑うのは、レオン。レオナと共に仮面舞踏会に行ったはずの、彼。

「狐など、生かしておいてもろくなことは御座いませんとも」

御者席から、低い声で穏やかに言うのは、きっとリカオンなのだろう。狐は彼らを威嚇して、じっと攻撃の機会を窺っていた。無駄な事だ。むしろ、辞めた方がいい事。わたしは狐にそっと声をかけた。

「逃げて」

馬鹿言うな、とでも言うかのように、狐は威嚇を辞めなかった。狐が一番警戒しているのは、レオンでも、リカオンでもなかった。レオンの隣でじっと黙ったままこちらを見ている影。その内に秘めている心情を知るのでさえ恐ろしい……レオナだった。

狐が動きだした。飛びかかるのは、勿論、レオナ。だけど、それはあまりに浅はかな行為だった。狐にしては、浅はかすぎる。

その行動はまるで、レオナが魔術でもかけて、狐を操ったかのようだった。不用意に飛び出した狐は、あっけなく御者席から飛び出したリカオンに取り押さえられた。

その日暮らしをしているだけの狐が、館の門番をもしている番犬に勝てるはずもなかった。段々と気を失っていく狐を、わたしもアンナもただ見守ることしかできなかった。

「安心してください、お嬢様」

狐を抑え込んだリカオンが、わたしに向かって言う。

「お友達をここで殺したりなんかしませんよ」

冷静な声だった。その雰囲気はアンナにも似ているけれど、リカオンの与えてくる印象はアンナよりもずっと冷徹なものだった。敬意を払ってわたしに話しかけているけれども、それは、わたしが椿館のお嬢様——つまり、レオナにとっての大切な玩具であるからに過ぎない。もし、レオナがわたしにほとほと飽きて、わたしから椿木の姓を奪ったとしたら、彼のわたしへの態度は随分と変わるだろう。

狐がぐったりと倒れ込んで、わたしもアンナも何も抵抗出来なくなった。

「そう。最初からそうしていればいいのに」

黙ったまま立ち竦んでいたレオナが、ぽとりと言葉を零した。その様子は、かつて垣間見た残虐な彼女に似ているものだった。そう、リサを楽しそうに弄り殺していたレオナ。あの彼女に限りなく近い彼女が、今、目の前に立っている。

レオナの表情は、仮面舞踏会に行く前にわたしに見せたものを変わらない。でも、その表情の中に眠る感情は、大きく違っていた。

「信じていたわ」

レオナの落とす言葉は、まるで、小雨のようだった。

「ミユ、あなたを信じていたのよ」

疲れきった声のようにも思えたし、絶望しきった声にも聞こえた。恐らくその両方なのだろう。わたしはレオナを裏切った。その事に、

レオナは思っていたよりも大きなショックを受けた。そして、それは、わたしが予想していたよりもとても危険な作用を引き起こすものだったのかもしれない。

「アンナに誑かされて、外に出ようとするなんて、アンナが誑かして、外に出そうとするなんて、疑いたくもなかった……」

「御主人様……」

アンナが口を開きかけた、が、それはレオナに呆気なく黙殺された。わたしの手を握っているアンナは震えていた。アンナは知っている。リサがどういう最期を迎えたのか。

そして、その理由ももしかしたら知っているのかもしれない。アンナはとにかく、震えていた。

もしも、レオナが自身の中にたまった感情をそのまま暴力として放出するのなら、誰が選ばれるなんてものじゃない。この場に居る三人。わたしとレオナ、そして狐は、それを免れないだろう。誰が先になるか、だけの事だ。アンナがぐっと唇を噛んだ。血が出てしまうのではないかというくらい、力が入っている。

「レオンがね、教えてくれたの。ミユは逃亡するだろう。そして、アンナがそれを手助けするだろうって」

涼しげに話すレオナは、無表情のままだった。

「あなた達を疑いたくはなかったけれど、ずっと考えていたわ。もしもレオンの言うとおりだった時は、一体、どういうお仕置きが必要かしらって……」

そう言って、レオナは微笑んで見せた。
わたしはぞっとした。
その微笑みこそ、リサを拷問していたレオナそのものだったからだ。これまでわたしにしていたサディスティックな行為は、子どものお遊び程度のもの。
本当の彼女の欲望は、もっともっと深い所で解消されるもの。わたしとアンナが裏切ったことを、失望しているだけじゃない。
まるで彼女は、わたしとアンナが裏切ったことを口実に、拷問することが出来ることを喜んでいるかのようにさえ見えた。
わたしはこの時やっと、自分の置かれている状況の恐ろしさを実感できた。
頭では分かっていたつもりだったけれど、実際に置かれてみないと分からない。
「アンナ、あなたは忠実で出来がいいだけでなく、随分と魅力的な使用人だったわ」
レオナはにっこり笑ったままそう言って、アンナを見つめた。
「あの部屋でも、さぞや、わたしを満足させてくれるのでしょうね」
あの部屋。それが何の部屋なのか、わたしにはなんとなく分かっていた。
館の中にどうどうと存在する部屋。誤って近寄ってしまったあの部屋。
わたしはあの時の光景を思い出せない。赤と暗い灰色が目に焼きついてしまっていて、ちゃんと思い出せない。思い出したところで、

わたしが得るものは、この先にわたしが迎える事となる未来への絶望のみだろう。アンナの手を強く握り返して、わたしはレオナを見つめた。

わたしが泣いていたとして、今のレオナは何を感じるのだろう。

そんな事は、微塵も分からない。

「連れて行きましょう」

レオナの短い一言で、レオンとリカオンが動き出した。

１２．染め上げる鬼畜の宴

血の気が引くという表現は、実際に起こってみれば、それがどれほど的を射た表現であるのかがよく分かる。単なる野良猫として生活していた時も、ひやりとした事は何度かあったけれども、今ほど失神しそうなくらいの瀬戸際に立たされているのは、初めてかもしれない。

幼い頃、壁というものは檻でしかなかった。壁に囲まれていることによって、安全は損なわれ、家族という立場を利用した連中から逃れることを阻む敵でしかなかった。

しかし、いざ自由になってみれば、壁というものがどれだけの危険から自分の身を守ってくれていたのかがよく分かった。どんな野生動物も、自分の身を隠す場所を欲する。

わたしにとってそれは、わたしの自由を阻んでいたはずの壁だった。そして、椿木レオナに見初められた時、わたしは生涯初めて一番安全な壁を手に入れたはずだった。

それがどれだけ浅はかな間違いだったか、今なら分かる。

今この瞬間、椿木ミユの立場は大きく変動した。こんな兆しがなかったわけじゃない。きっとあのまま静かに従順でいても、いつかはこうなっていたのだろうと今なら思う。

わたしは今までとは全く違う首輪をつけられて、柱に繋がれていた。狐は鉄格子の向こう。この場所は、リサが殺されていた場所に似ている何処か。わたしの知らない椿館はまだまだたくさんあるようだった。この場所にあるのは、いくつかの檻と、部屋を支える鉄

柱。

　そして、部屋の真ん中にあるのが、この部屋のメインともいえる手術台や分娩台のような台だった。

　台はわたしの繋がれている鉄柱のすぐ傍にある。目を瞑っても、耳を塞いでも、すぐ傍にあるという存在感は、どうしても忘れられなかった。台には手すりがあって、その手すりに絡まっているのが、手錠。その手錠にかけられているのは、アンナだった。

　自由を奪われた彼女は台の横に座り込み、人形のように静止してしまっていた。

　アンナがこれからどうなってしまうのか。是非もなくわたし達は見せつけられるようだ。部屋にいるのは、わたしと狐の他には、レオナとレオンの双子がいた。だが、アンナに近寄ってその頬を撫でているのは、レオナ。その様子は、いつしかのリサそのものだった。アンナは見動きが取れない。

　しかし、レオナに触れられると、果敢に抵抗の意を見せた。それは、屈服への拒絶。そんな抵抗すらも、レオナは全く気にしていないようだった。

　アンナの拒絶的な眼差しを、レオナはじっと見つめていた。

「良い目をしているわ。拾った時と変わらない目。高潔さが籠っている美味しそうな目。あなたの身体に流れている血は、きっと、美しく輝くのでしょうね」

　レオナはそう言って、アンナの顎を掴んだ。

「いつまで屈服せずにそんな目をしていられるのか、楽しみにしているわ」

レオナの強い言葉の直後に、痛々しい音が響いた。アンナの頬を打ったレオナの形相は見えないけれど、きっととても恐ろしいものだろう。打たれ、睨みつけられているアンナは、それでも恐怖の表情を見せなかった。

「どんな時も人形みたいなあなたが好きよ。その身体を引き裂いた時に味わえる血と肉の味が、本当に楽しみだわ」

レオナはけらけらと笑いながら、アンナの胸倉を掴んだ。同じくけらけらと笑うのは、レオン。美しいこの双子は、わたしの目にはまさに悪魔にしか見えなかった。

「あなたの目に恐怖の色が映る瞬間が待ち遠しい」

レオナがそう言った時、アンナが突然、笑みを浮かべた。痛々しい笑み。追い詰められた者が見せる笑み。アンナにだって、もう未来なんてないことは分かっているだろう。全てを諦めた者が見せる笑み。それは、アンナにとっては、最後の抵抗だったに違いない。

「御主人様、大変恐縮ですが、あなたの御望みを叶えることはできません」

アンナは丁寧に、だが、嫌味を込めてそう言った。

「この椿館に仕えて何年経つのでしょうか。わたくしは、とうに、恐怖というものを忘れております。御主人様……」

「それはどうかしら。誰だって、最初は抵抗するわ。けれど、最期は誰しも私にひれ伏すの。そうして、全てを私に捧げる代わりに、安らかな眠りを得られるのよ」

——安らか。あれが？

リサの最期を見た。もうあれが忘れられる時はないだろうというくらい、気を抜くとすぐに想い出す。夢にまで出てくるリサの最期を、わたしは見た。あれが、安らかな眠りだと言うのだろうか。最期の悲鳴も聞いた。あれが安らかな眠りを約束された者の悲鳴とでも言うのだろうか。

アンナの笑みが増した。

「安らかな死。それは、どれくらいの痛みを伴うのでしょうね。御主人様がご満悦になるのが先か、わたくしが安らかな死を得るのが先か……」

「自害は認めないわ。それともあなたは、身を滅ぼしてまで私から逃そうとしたあの子たちを犠牲にしたいの？」

レオナがちらりとわたしと狐を見やった。

その時、アンナと少し目があった。彼女が何を考えていたのか、そのすべてが分かるわけもない。だけど、彼女の中には闘志のようなものが燃えているようにすら見えた。アンナは抗う気なのだ。最期の最期まで、抗う気なのだ。

ああ、アンナ。わたしがいなければ。わたしがいなければ、こんな事にはならなかったのだ。アンナの提案を断って、何もなかった事にしてしまえばよかった。アンナ。あなたは抗うつもりなのだろうけれど、正直、わたしはいつまで耐えられるか分かりもしない。あなたがリサのような目に遭う所を、これから散々見せつけられる

のだから。
「いい目だわ。くり抜いてやりたいくらいにね」
レオナはそう言うと、突然、アンナを台に抑えつけた。アンナは無駄な抵抗をせずに、じっとレオナを見つめ続けていた。
目眩がする。今から見たくもない最低最悪のショーを見せられるのだから仕方ない。アンナ、わたしはどうしたらいいのだろうか。どうやって償えばいいのだろう。償うもなにも、アンナが辿る道は、そのまままわたしが辿る道なのだろうか。ああ、見たくない。見たくない。だけど、恐ろしい事に、わたしは瞼を閉じることが出来なくなっていた。
動けないアンナに、レオナは接吻をする。それはとても濃厚なもので、わたしは唾を飲んだ。ああ、あの濃厚な口づけは、毎晩わたしが受けていたものとは少し違う。まるで、巣にかかった獲物に吸いつく蜘蛛のようだった。その、ねっとりとした口づけすらも、アンナは逃れようとする。
だが、その抵抗が逆にレオナを喜ばせるものだと悟ったのか、やがては静かに口づけを受け容れていた。
と、アンナの短い悲鳴が聞こえた。離れたレオナの口からは、血が漏れている。ああ、間違いない。これがレオナの血であるはずがない。それは、アンナの口からも漏れている。レオナはアンナの頬を撫でながら、再び接吻をする。とても深い接吻だった。
違う。これはキスなんかじゃない。吸血鬼そのものの官能的な儀式。両手でアンナの身体を愛撫しながら、レオナはアンナの口に溜まる血を飲んでいる。
動けないアンナは必死に耐えていた。それを制そうと、レオナは

少しずつアンナの着ている服を脱がしていった。レオナの手は蛇のようにアンナの身体をはいずり回り、片方は乳房へ、片方は足の付け根へと伸びていく。その動きは魔性のもの。わたしはいつもあの手の動きには負けてしまう。けれど、アンナは耐えていた。苦痛も恍惚もいずれも声に出さぬように、沈黙を守り続けていた。

口から滴る血の量は、決して微量ではない。噛み千切られてしまったのだろうか。その傷の深さは、わたしの目からは分からないものだった。レオナは露わとなっていくアンナの腹部から胸部にかけて、舐めるように撫でていった。

「この人皮の奥にも、あの綺麗な色彩をした内臓は詰まっているのよ」

まるで、その手自体がナイフのようだった。見ているこちらも腹部がむず痒くなってくる。レオナの脅し以外の何物でもない言葉を受けつつも、アンナは表情を無にして、耐え続けていた。ああ、これからが地獄。わたしは、わたしの中に大きな希望をもたらしてくれたアンナを、目の前で失うのだ。

レオナの舌が、アンナの乳房に吸いついた。その姿はまるで、花の蜜を求める蝶のようでもあった。そうだとしたら、なんて残酷な蝶なのだろう。花を散らすまで蜜を吸い尽くしてしまう蝶なんて、傲慢な悪魔でしかない。狂っている。完全に、狂っている。生きているうちからアンナを貪ろうとしているレオナも、まじまじと見ているだけのレオンも、狂っている。この館の主達は狂っている。

アンナを助けたい。リサを助けられなかったから？

いいや、助けなくては。助けなくてはいけない。助けたい。あの

沈黙を守る高潔な女性を、助けたい。地獄に住んでいることをきちんと知らなかったわたしを、逃してくれようとしてくれた彼女。助けたい。助けなくては。でも、どうして。どうして、わたしは繋がれているのだろう。この鎖を引き千切れる力があれば。なんてわたしは無力なのだろう。わたしが、わたしがあの女についていかなければ、こんなことには……。

沈黙を守っていたアンナが短く呻いた。レオナの口はアンナの乳房にある。

アンナはとても痛がっていた。沈黙を守る事なんてとても出来ないようだった。はじまってしまった。なんの凶器も持たずに、レオナは始めた。いや、あの血の滴る口づけが、合図だったのかもしれない。

少しだけ見える腹部にかけて、赤い線が床へと落ちていく。アンナの血であることは、一目瞭然だった。齧りついたレオナは、苦痛で怯むアンナをさらに抑え込み、台に寝かせると、しばしその姿を目に映した。

「綺麗よ、アンナ。使用人としてこの館に仕えていたどの時よりも、今が一番綺麗」

レオナはそう言って、頬にかかる髪をすっと撫でた。

「でも、まだ、これからよ。あなたの身体も、心も、全てが私のものになる時、あなたは今までで最も美しくなるのよ」

何故だろう。その時、わたしはレオナの事が人間には見えなかった。美しい姿は擬態。人間という獲物をおびき出すためだけに纏っている衣。そう見えた。レオナの目があまりに美しかったからだろうか。

どうして、決して許されない事をする者なのに、こんなに美しいのだろう。
残酷な美しさが、自然の美しさを食べようとしている。わたしはおかしくなってしまったのだろうか。それとも、生まれつきおかしかったのだろうか。じっとレオナを見つめて、わたしは溜まってきた唾を飲んだ。

「外道め……」

そう呟く声でわたしは迷い込んでいた思考の迷路から抜け出した。呟いたのは、牢屋の奥に居る狐。いつその生皮を剥がされるか分からない狐だった。

「上流階級の者が下等と見下す俺たちだって、お前達みたいな奴の事を外道っていうんだ。何人そうやって殺してきたんだ？　地獄へ落ちるぜ……」

本当に憎むような声で、狐は言った。

「その外道如きに君は捕まったんだよ」

レオンがにやりと笑いながら言った。

「さて、君はどうするつもりだい？　アンナのように血を纏いながら死んでいくのか、この館の畜生になるのか」

笑みを殺しながらそう言うレオンが、とても怖かった。

この人達は。この人達は、なんなのだろう。どうしてこんなことをするのだろう。こんな奴ら、人間じゃない。愛してくれていると

思った事もある。そうでなくても、悲しそうなレオナに同情して、慰められるならそれでいいって思っていた事もある。けれど、もう違う。違う。彼らに対する心は、もう憎しみしかない。

それは、アンナが聞くに堪えない悲鳴をあげた時に、それを見ていたレオンが面白そうにけらけらと笑った時に、確実なものとなった。

「君もつくづく不運で馬鹿な女だね、アンナ」

彼らの美しい外見ですら、もはや気持ちの悪いものに見えてしまう。

「大人しく使用人として地味に過ごせればよかったんだよ。まあ、どのみち、いつかはこうなるって分かっていただろうけれど」

レオンの笑い声が反響する。ああ、この場所では、どんな大声も、どんな悲鳴も、どんな嘆きも、外には漏れないのだ。レオナに齧られたアンナの唇。それを見て、わたしは寒気を感じた。時が止まってしまったかのような気持ち。涙を流しながら、言葉にならない声をあげるアンナ。それを見ながら笑うレオンとレオナ。

ここは、現実なの？
ここは、現実なの？
ここは、現実なの？

アンナの肉を食いちぎって食べるレオナ。血だらけのアンナと、レオナが、わたしの目に焼きついた。アンナが何をしたと言うの？

アンナがわたしを逃がそうとしたからこうなったの？　じゃあ、これは、わたしのせいなの？　わたしのせいで、アンナはこんな目

に遭っているの？
——どのみち、いつかはこうなると分かっていただろうけれど。
リサもそうなの？　リサだけじゃない。他の人達も。もっともっといるはずだ。いないわけがない。たくさんの人が、この人達の気紛れで殺されていったのだろうか。そうなのだろうか。
「全て壊してあげるわ。全て」
レオナはそう言って、アンナを台に叩きつけた。衝撃でアンナの表情が歪んだ。段々と沈黙を守れなくなってきているアンナに、レオナとレオンの興奮が高まってきている。
止めさせなきゃ。止めさせなきゃ。なんで、わたしは動けないの。止めさせなきゃ。誰か、止めさせて。アンナを助けてあげて。
「さて、そろそろ俺も楽しませて貰おうかな」
部屋の片隅でけらけらと笑っていただけのレオンが、氷のような笑みを浮かべて、アンナへと近づいて行った。ほぼ、全裸のアンナにかぶさっていくレオン。カナリアを貪る猫のように、レオンはアンナの血塗れの口にキスをした。
見ていたくない。けれど、わたしの瞼が閉じることはない。
アンナはもはや悲鳴しか上げていなかった。痛い、痛い、という言葉が何度もわたしの耳を貫いてくる。けれど、アンナは、それとは比べ物にならない程の痛さに襲われているのだ。レオンによって何度も、何度も、貫かれていくアンナ。その欲深い振動が、わたしにも伝わってくる。何度も、何度も、無理矢理貫かれた痛さを想像

するだけで、震えあがってしまう。痛い、痛いという言葉を聞くことが、苦しかった。
わたしが逃げようなんてことを思わなければよかったのだろうか。
アンナが、何をしたと、言うの？
止めたい。アンナを助けたい。それなのに、鋼鉄の鎖がわたしを阻んでいる。犬のようにわたしを繋いだレオナと、ふと目があった。この場の異様さには似つかわしくない美しい笑みが、わたしの目に映る。人形のようなアンナを、古代の女神を模った彫刻のようなレオナとレオンが、弄っている姿は、この場に居るわたしにとって、決して美しいものではなかった。
「このぐらいで痛がっていちゃ、ダメよ」
レオナが面白そうに言った。
「あなたの身体は私達のもの。壊して、壊して、最期には全部食らい尽くしてあげる」
くちゃ、くちゃ、という鈍い音が響いた。アンナはすでに呻き声しかあげていない。
「この場所では、いくら血が流れても困らない」
そう言って、レオナは、そっと台から離れていった。わたしの目にはレオナの姿が映らなくなってしまった。焼きつけられるのは、強引に一体と化したアンナとレオン。アンナは憔悴していた。ろくに抵抗もせず、ただレオンが満足するのを待つばかり。それでも、時折、痛みが走るのか、表情を歪ませては呻き声をあげていた。

レオンは己の欲望を満たしながら、噛み千切られたアンナの唇に吸いついてその血を飲んでいた。それは、まさに捕食の場面。美しい花を喰い散らす残忍な虫の妖精のよう。苦しそう。助けたい。でも、助けられない。そんな想いが巡り巡って、段々気分が悪くなってくる。そんなわたしの耳元で、いつの間にか背後にいたレオナが囁いた。

「どう？　美しいでしょう？　私がいつもあなたにしたかったこと。あなたにしたくて堪らなかったこと。あなたを守るためには、この欲望を何処かで発散させなければどうにもならなかったのよ……」

囁く声はとても甘く、わたしの耳と首筋と胸元を段々と痺れさせていく。

「分かってちょうだい。残忍な私でも、あなたを壊す事なんて出来ない。アンナを食べても、あなたは食べない。あなたは生きたまま、永遠に私のものになるのよ」

首筋に舌が這う。それだけでわたしの身体は凍りついた。アンナの生き血がついた唇が、わたしの首筋を舐めている。それは、わたしを繋いでいる鋼鉄の鎖よりも、ずっと、ずっと頑丈な、拘束具だった。

「ねえ、ミユ。あなたは、レオンに穢されてしまったのでしょう？」

レオナの手が段々と下腹部へと伸びていく。

「今から、綺麗にしてあげるわ」

１３．猫に宿るマゾヒズム

アンナが寝かせられている台とその床は、もはや血塗れだった。
これが少し前までは綺麗だったなんてとても思えない。アンナは呼吸をする事も苦しそうだった。床に座り込むわたしからは、アンナの姿は少ししか見えていない。
けれど、その少しすらも、傷だらけで、血塗れで、痛々しかった。

レオンと一体と化したアンナは、そのレオンに飽きられるとそのまま台の上に捨て置かれ、血を纏ったまま深い吐息を洩らしている。しかしわたしは、そんなアンナを憐れむ暇もなく、レオナに首筋を噛みつかれたまま、じっとその愛撫を受けていた。
指で弄られ、その中に溜まる蜜を掻き出される感触は、とても痛くて、とても苦しくて、けれど、わたしの中にて疼く黒い欲望を確実に刺激して、わたしの口からは、嬌声にも似た類の呻きが漏れていく。そんなわたしとレオナを前に、狐が喚く声も、わたしの耳では遠くのものにしか感じられない。
牢獄はすぐそこなのに。

「あ……あうう……ん……」

虚ろなわたしの目に、台に寝かされたアンナの姿は映る。レオナに食いちぎられ、レオンにまで身も心も喰い荒されたアンナ。血と唾液と汗と愛液と精液に塗れた彼女は、グロテスクなアートとして、その場に横たわっている。
アンナはまるで死んでしまったかのようだった。

「うぅ……うう」

声を押し殺して、レオナの攻めを耐え続けることに何の意味があるのか。答えは簡単だ。レオナの興味をアンナへと向けてはいけない。そんなわたしの意図もあった。

だから、わたしは微かに喘ぎ、微かに呻き、安直に絶頂へと向かわないように抵抗する。わたしの思惑通り、レオナは支配欲に取り憑かれ、わたしの身体を弄りまわして、何度も何度もわたしの脳髄を溶かそうと試みた。

わたしにだって、限界はある。息も苦しかったし、頭も痛かった。陰部から先を貫かれているようで、まるで、男性のそれを通り越して、剣かなにかで突き刺されているかのように痛くなっていた。

わたしの足の付け根から、汗か愛液か唾液かも分からない生温いなにかが、ゆっくりとゆったりと流れていく。これは、何だろう。レオナに口づけをされる。外陰部を噛みちぎられてしまいそうだった。

けれど、彼女はそっと口づけをすると、わたしの足の間を流れていく体液を、舐めとった。

「ミユの血はやっぱり美味しい」

そう言って口を離すレオナは、もうすでに血塗れの身体をしている。その血の殆どすべてはアンナのもの。傷だらけのアンナのものだ。

「本当はね、もっともっとあなたが欲しいの。骨の髄まで残さずにあなたを食べつくしてしまいたい。あなたの吐息を感じながら、あなたの鼓動を感じながら、あなたの全てを食べつくしてしまいたいの」

レオナの手が背筋をなぞる。筋と筋が引き攣ってしまいそうだった。レオナの手はそのまま、背中からわき腹、そして、胸元へと伸びてくると、そのまぐっと乱暴に乳房を掴んできた。痛みよりも恐ろしさの方が勝り、震えが止まらなかった。

「見ているといいわ。あなたの代わりに、アンナが壊されていくのを」

そう言って、レオナはわたしから離れていった。向かっていくのは、アンナの元。恐ろしい予感しかしなくて、吐き気すらしてきた。こんな場所で、こんな風に壊されていくのが、アンナの運命だとでも言うのだろうか。アンナが何をしたのだろう。彼女がこんな最期を遂げる理由は、一体、何なのだろう。

「痛い……痛い……」

アンナの呻く声が聞こえた。レオナからもレオンからも解放されていても、アンナを襲う痛みが軽くなるわけではない。もうすでに、アンナは限界を超えていた。

そこへ、レオナが近づいていって、アンナに声をかける。

「まだまだこれからよ。これからあなたはもっと美しくなるの。血と肉と骨と臓物と管と体液と汚物に塗れて、あなたはぐちゃぐちゃになっていくの」

この光景をこのまま見ている必要があるのだろうか。

わたしがこのまま見つめ続けている理由は何だろうか。

アンナが甲高い悲鳴を上げた。こんなアンナの声、聞いた事もない。こんなアンナの最期なんて、信じたくない。レオナはアンナの喉元を噛み、爪の長い手で腹部をなぞった。

そのまま喉笛を噛みきるようなことはせずに、ただぐっと強く噛んで放すと、今度はアンナの腕に噛みついた。

「痛い……痛いぁぁっ！」

アンナが悲痛な声を上げたと同時に、聞き心地の悪い鈍い音が響いた。血が飛び散っている。あとは、悲鳴しか聞こえない。わたしの目の前で、アンナの腕は噛みちぎられた。肉と皮が引き千切られて、レオナの身体は新鮮な返り血でいっぱいだった。

吐き気がする。吐き気がする。けれど、吐けない。

息苦しさばかりがわたしの中に渦巻いている。痛さにのた打ち回るアンナを抑えつけて、レオナは再び口をつけた。蟷螂が飛蝗を食べているのと同じ。猫が鼠を食べているのと同じ。ただそれが、人と人であるだけのこと。止めも刺さずに、獲物を抑えつけて食べているだけのこと。

それだけのことが、こんなにも気持ちの悪いことだなんて。

「ごめんなさい……許して下さい……」

泣きながら、アンナがついにこう言った。けれど、もはやレオナを止められる者なんて、いないに等しかった。

レオナの口は乳首に。それを引き千切るのだろうという思いと、まさかそんなことをしないだろうという願いとがわたしのなかに入り乱れていた。ぞっとする。痛みがわたしの中にも生まれているようだった。レオナはアンナの乳首を噛み、そのまま力強く引っ張った。噛み千切るのではなく……。

ああ、もう、見ていられない。わたしの中のものが逆流していく。気持ち悪くて、痛くて、気分が悪くて、わたしは吐いた。まともに呼吸が出来ないくらい、吐いた。レオナは一体、何を口にしているの。分からない。気持ち悪い。

「いやぁっ――！」

――おいしい。

そんな言葉がわたしの耳に突き刺さる。嗚咽と悪寒が身体全体を襲ってきた。アンナの悲鳴と自分の嗚咽と嘔吐で耳はとうに塞がっていたはずなのに、その言葉は隙間からぬっと入りこんできた。悲鳴が止んで聞こえてくるのは、ぐちゃぐちゃな音。液体と肉塊が混ざり合う音。びりびりと破かれる音。ぶちぶちとちぎられる音。そして、壊れたラジオのように、音飛びする、アンナの呻き声。

それも段々と病んでいく。

取り憑かれていたわたしは、息を整えながら、その惨状を見つめていた。痙攣する身体。流れ滴る血潮と、リンパ液と、汚物と、汗と、愛液と、そして、噛み千切られた傷は広がっていき、引きずり出されるのが、臓物。血に塗れていて、何なのかも分からない。動いているのはきっと気のせい。だって、こんな姿になってしまったアンナが、生きているわけがない。

女の裸という芸術に、グロテスクな装飾が加わって、アンナはまるで地獄に飾られるマネキンのようだった。

アンダーグラウンドの人形。レオナがデザインする、アンナというグロテスクな芸術。引きずり出されたのは、腸のようだった。ぶつっぶつっと鈍い音が響き、段々と引きずり出されていく長くて重

量のありそうな物体。匂いなんてもう何も感じなかった。目に映っているものに気を取られていて、わたしの口は閉じたまま。

ただ、無視できない臭気だけが、小さなわたしを覆い尽くしてくる。

アンナは死んだ。きっと死んだ。

生きているとしたら、なんて、考えたくもないくらいの姿になってしまった。顔は美しい人形のまま、綺麗な目を見開いて、天井を見上げたまま、真っ青に。血を纏った身体もまた真っ青で、腹部からは今も、内臓が引きずり出されていく。そして、肉という肉を噛みちぎったレオナは、動かないアンナの顔を撫で廻し、紫色の唇に、捕食するかのように吸いついた。

マネキン人形を抱いているのと同じ。腸のはみ出た美しい人形は、レオナに抱かれたまま、静かに、静かに。レオナはアンナの裸体をまさぐって、そして、その全てを食べつくすように、肩を、背中を、乳房を、噛みちぎっていった。もう悲鳴はあがらない。呻き声もあがらない。血の流れ方もゆったりと。動きもしない。生気も感じられない。

アンナは死んだ。

わたしを逃そうとして、レオナの愛憎に触れて、わたしの代わりに死んだ。

「さすがに俺もそこまでは喰えないよ」

くっくっと笑うのは、傍から様子を窺うレオンだった。

「俺は満たせればそれでいいのさ。後はごゆっくり」

その言葉を聞いているのかいないのか。レオナはアンナの身体に夢中だった。一心不乱に貪る音が、部屋中に響き渡る。あらゆる耳障りな音が、わたしの耳に襲いかかってくる。

「魔物だ……」

狐の呟きが聞こえてきた。

「これが、魔物なんだ……」

今まで姿も見えなかった恐怖の対象。誰もが恐れるも、誰もがそれを見たことがない存在。魔物とは、まさにレオナやレオンにぴったりな称号だ。残忍で狡猾で淫乱な魔物。

そして、その魔物にいいようにされて快楽さえも感じているわたしは、人間の中で最も下衆な存在なのだろうと悔やんでいる。こんな魔物に、人間をただの玩具のように、人形のはらわたを割くように、アンナをぐちゃぐちゃにした魔物達。

アンナは死んでいる？

死んでいる方が幸せだ。今や、アンナの腹部はぱっかりと開かれていて、あらゆる臓器がレオナの手で引きずり出されている。美しい裸体を彩るグロテスクなものたち。

こうして、アンナは使い捨ての玩具のように扱われ、レオナに少しずつ喰われていった。

「魔物め……魔物め……」

狐の嗚咽がわたしの耳の中で反響する。

「一体何人の人間をこうして喰ってきたんだ……。鬼め……悪魔め……」

「悪魔で結構」

アンナを貪るレオナに代わって、レオンが狐に答えた。

「鬼で結構、魔物で結構ッ！」

けらけらと笑う彼はまさに魔物。血潮に塗れながらアンナを貪り続けるレオナはもっと魔物らしかった。初めて、魔物の恐ろしさを知った。言葉も出ないほどの非道の限り。目の前でアンナの無残な最期を見せられ、それを面白い見世物のように笑ったレオンに対して、わたしは恐怖ではなく怒りを感じていた。

だが、アンナのレオナに対しては違う。彼女こそ本物の魔物。人外としか思えない。アンナの生肉と臓物を貪るその姿は、恐ろしい怪物以外の何者でもない。

わたしは呆然とレオナを見つめていた。

「どうしたお嬢さん。君もあんな風に食べられてみたいかい？」

狂ったように笑いながらレオンが話しかけてきても、わたしはレオナから目を逸らせなくなった。まるで魔術にでもかかったかのように、わたしはレオナの食事風景を見つめていた。

レオナは間違いなく魔物だ。悪魔だ。怪物だ。アンナを苦しめて殺し、その上にその血肉を貪るなんて、人間のやる事じゃない。……それなのに、アンナを綺麗に解体しながら貪り続けるレオナの姿から、美しさが陰ることはなかった。

本物の美しさは心が輝くものだとわたしは聞いたことがある。では、わたしが今見ている美しさはまやかしなのだろうか。まやかしに違いない。きっと、これは、獲物を捕えるための罠なのだろう。美しさで人間を引き寄せて、魅了して、食らいつく。思えばわたしもそうやって釣られてしまった。ならば、これは擬態。本物の美しさではない。

……なのに、やっぱり、冷たい人形と化したアンナを貪っているレオナの姿は、美しいと思ってしまった。わたしは、異常なのだろうか。こんな悪魔の儀式を見せつけられてなお、美しいと思ってしまうわたしは、異常なのだろうか。

「アンナ……これでもう、私のもの……」

うっとりとしながらレオナはそう言った。

「誰にも渡せはしない。何処にも逃げられはしない。身体の隅々まで食べた後は、魂まで食らってあげる。もう誰にも渡しやしないわ」

くっくっと笑うレオナが、目と心に焼きついて離れなかった。ここは現実だっただろうか。夢だっただろうか。夢だったとしたら、恐ろしいほどの悪夢だと思った。現実だとしたら、現実も所詮地獄なのだと思う。アンナは何のために生まれて、何のために死んでしまったのだろう。アンナに落ち度があったとしたら、それは何か。暫く考えて、わたしは結論を出した。

そもそも、わたしを助けようなんてしなければよかったのだ。

「レオナ、もう満足したかい？」

レオンの冷淡な声が響くと、アンナの亡骸に顔を埋めていたレオ

ナが、顔を上げた。人形のように整った血塗れの顔が、目に焼きつく。
うっとりとした目は快楽と恍惚を十分に湛えていて、その惨状には似つかわしくない幸福そうな表情は、この世のものとは思えないほど残酷で、けれど人の心の奥底をがっちりと捕える奇妙な魅力があって、その妖艶な魅力はわたしの脳髄を深く犯していく。
身体の奥底の処女膜を破られてしまったかのような痛みと、支配されるという被虐的な恍惚や快感が、わたしの頭の奥深くに刻まれていく。

ああ、わたしは狂ってしまった。狂ってしまった。狂ってしまった。
レオナに全てを奪われてしまいたい。その唇でわたしの全てを貪られてしまいたい。レオナに全てを捧げて、レオナと一つになってしまいたい。

「ミユ……」

レオナの呟く声に、わたしははっとした。
おぞましい妄想がわたしの身体を包み込んでいた。レオナはわたしの全てを奪い去ってしまう魔性の女だ。わたしの理性すらも奪ってしまう……。
そして、わたしは、そんな彼女にすぐに翻弄されてしまう婢。

「私を見て、ミユ……」

血塗れのレオナがわたしに向かって両手を広げた。その姿に気持ち悪さなんて感じない。もはや、血も、臓物も、彼女の美しさを彩るドレスのようで、彼女の傍らに転がっているのがアンナの遺体だ

ということも、レオナが浴びている赤い液体がアンナのものだということも忘れて、わたしは彼女に魅入ってしまっていた。わたしの視界には、もはや、レオンも、狐もいない。

わたしに見えるのは、レオナだけ。グロテスクを美しさに変えてしまう、魔性の女ただ一人だった。

「私を受けとめて……お願い……見捨てないで」

懇願するようなレオナに、わたしは戸惑った。さっきまで狂った化け物のようにアンナを惨殺した彼女が、今度は子犬のような眼差しでわたしをじっと見つめてくる。彼女は一体、何者なのだろう。彼女が秘めているものは、どういったものなのだろう。

鎖に引っ張られたことによって、わたしは、自分が無意識にレオナの元へと寄ろうとしていたことに気付いた。

「惑わされちゃダメだよ！」

その時、靄のかかったわたしの頭をすっきりとさせたのが、よく響く狐の声だった。

「あんな化け物の言葉に耳を貸さないで。見たでしょう？ 聞いたでしょう？ あいつらは化け物以外の何者でもない。俺達とは違う世界の生き物なんだ……」

狐は腹の底から声を出してそう言った。

その声はよく響き、わたしの身体の奥まで沁み込んできた。もちろん、レオンとレオナにもよく聞こえている。彼らを刺激している、とわたしが気付いたのは、レオンがかつかつと靴音を立てながら狐の囚われている独房へと向かった時だった。嫌な予感しかしなかった。

わたしは鎖を引っ張って、檻へと近づくレオンの足に縋りついた。
「やめて。お願い、この子には手を出さないで……！」
自分ならどうなったっていい。なにも、アンナが死ぬ事なんてなかった。わたしを殺したいのなら、最初からそうして満足していればよかったのに。そんな考えが瞬時にわたしの脳裏を過ぎっていった。
だけど、それは言葉にならず、わたしの身体の中で虚しく横たわったまま。レオンは無表情にわたしを払いのけると、檻の中の狐に向かって言った。
「さて、君の出番はもうすぐだ。アンナという肉人形が壊れてバラバラになってしまったからね。君はまた、楽しませてくれそうでわくわくするよ」
冷酷に笑うレオンが恐ろしかった。
お願いだから、狐には手を出さないで。その悲鳴は虚しくもみ消されてしまう。
レオナはまだアンナの死体に縋っていた。死に顔は美しく、けれど、胴からは臓物がはみ出て、夥しい量の血をばら撒いて死んでいるアンナ。絶対に動くことのない彼女は、永遠にレオナの手中へと落ちてしまったのだろうか。アンナの全てを手に入れたと思っているのか、レオナはとても幸せそうだった。もう二度と逃げる事のないアンナに齧りつきながら、レオナは嬉しそうに、泣いていた。
「人食い（カニバリスト）……」
狐が上ずった声で呟いた。その言葉には絶望が込められている。

やっとレオナの恐ろしさを心の底で理解し、受け止めたようだった。
わたしはどうだろう？
わたしはとっくに理解し、恐怖しているつもりでいた。わたしの脳髄にしっかりと焼き付いてしまったリサの最期。あれを見たからこそ、分かっているつもりでいた。

——人食い（カニバリスト）。

だが、狐の呟くその言葉を聞いた時、目眩を感じた。魔物という曖昧な言葉ではなく、この言葉。今、やっと、理解出来た。だけど、受けとめたくない。受けとめたくない。受けとめたくない。わたしと狐。二人に未来なんてないことを受けとめたくない。

「……助け……て」

その言葉は自然と出た。だけど、その言葉を生みだす唇は震えきっていて、言葉になったのは奇跡だった。

「死にたく……ない……」

アンナ。
リサ。
彼女達だけじゃないはずだ。一体、何人の人が、こんな死を遂げたのだろうか。安らかな死とは程遠い、血生臭い死に方。

「死にたくないよ……」

人はいつか死ぬ。だけど、こんな死に方をしなければいけないのは、何故。

「安心しなよ。君の代わりはいくらでもいる」
わたしの声はどこまで漏れていたのだろうか。レオナはアンナだった肉片を貪るのに夢中で、こちらには目もくれない。だけど、レオンは、気味の悪い笑みを浮かべて、わたしに言い放った。彼にも人食いの血が流れているのだ。
「君はレオナに守られているんだよ。レオナは君を守りたい一心でいるんだよ。もしも、レオナが冷静でいられなかったとしたら、君は今日まで生きてはいなかっただろうね」
つまり、わたしのせいで、リサが死んで、アンナが死んだと言うのだろうか。
「アンナは美しくて有能な使用人だったけれど、唯一にして最大の欠点が君を外に逃がそうとしたことだ。裏切ろうとしている者をここに置くことは出来ない。けれど、外に放り出すには惜しい美しさを持っていた」
「……だから、食べたの？」
自分で訊ねた内容に吐き気を覚えたのは初めてだ。狂っている。全てが狂っている。美しさの影に隠れているこの醜さに今まで気付かなかったなんて。
「食欲と性欲というものは直結しているものなのだろうかね」
くすりと笑って、レオンは言う。
「情事を終えた後の愛しい女の身体に齧りつく時の快感は例えよう

がない。君だって、もしもレオナに守られていなければ、喰い殺していただろうよ。レオナもいつも我慢しているのだろうね。君を喰い殺したい気持ちを」

狂っている。

すべてが。

「人食い（カニバリスト）め……今に天罰が下るぞ……」

狐の震えた声が耳に届く。

このままだと、もうすぐ狐も、殺されてしまう。わたしの目の前で、彼らは狐をなぶり殺しにするつもりなのだろうか。

「天罰？」

レオンが鼻で笑った。

「もしも天罰というものがあるのなら、俺達が生まれる遥か前にこの館はなくなっていただろうさ」

大きな声が部屋中に響き渡る。

怖かった。苦しかった。もうここから逃げる事は出来ないのだろうか。アンナが死に、そして魔の手は狐へと伸ばされようとしている。

「そうだ、狐くん。君には名前がなかったね」

檻の前でレオンが言った。

「いいや、違うな。君には名前がありすぎるんだ。巷では、随分、狩

人達を騙してやっていたというじゃないか。短い間とはいえ、そんな名のある狐を飼えるなんて名誉なことだよ」

皮肉たっぷりな言葉だったけれど、それに応戦するほどの余裕は狐にもないだろう。

「今から君の名は、ユマだ。椿木ユマ。残り短い生を有意義に使うんだな」

狐の悔しそうな呻き声が、わたしの耳に届いた。

神様なんているのだろうか。かつて野良猫の様に暮らしていたわたしは、魔物なんて怖くないと思っていた。殺された時は殺された時だとすら思っていた。だけど、それは、知らなかったから思えただけの事。思い知る頃には、もうどうにもならない。なんて馬鹿だったのだろう。もしもわたしがもっと警戒していれば、もしもわたしが少しでも魔物を怖がる本能を失っていなければ、野良猫として地味だけど刺激的で平和な暮らしを続けられたはずなのに。

――もしも神様がいるのだとしたら。

手遅れなのは分かっている。いや、分かりたくない。受けとめたくない。お願いだから、わたしに狐の無残な姿をみせないで欲しい。椿木ユマという名を与えられた人の最期を見せつけないで欲しい。

――どうか。

そうして、時間だけが残酷に過ぎさっていって、砂時計の砂が落ちていく度に、わたしの心は血の気を失っていって、そして、空っぽになってしまったかのようだった。

アンナの死から少し時間が経つ頃には、わたしは鎖を外されて、元の部屋に戻されていた。豪勢な服を着せられて、見かけは優雅な生活を送っている。それは、椿木ユマ——狐を人質に取られた形での服従だった。狐は檻の中で飼われている。

アンナの肉を喰ってから、レオナはますます攻撃的になった。だが、もう逃げ出せない。わたしが逃げだせば、狐は死ぬ。それもおぞましい方法で、苦しみながらの死だ。そんな姿、絶対に見たくない。

あの日から、わたしの毎日には暗い影が常に付きまとっていた。その影は、日に日に大きくなっていって、わたしの夢までを犯してくる。逃げたい、だけど、もう逃げられない。人食い(カニバリスト)に捕まってしまった。

「あなたを手放したりはしないわ」

レオナは毎晩のように、わたしに言う。

「やっと手に入れた、宝物だもの」

レオナは……一体、どんな人なのだろう。わたしを威圧的に支配しようとしたかと思えば、必死に縋りついてくる。わたしに捨てられることを恐れて、命乞いをするかのように求めてくる。彼女は、何者なのだろう。

——人食い(カニバリスト)……。

その言葉は、本当に彼女の本質を表せているのだろうか。

レオンとレオナは同じ血を引いた双子でありながら、生き物とし

ての本質が違うように感じられた。彼らは二人とも人食い。それは、変わらないこと。だけど、それだけじゃない。同じ人食いだとしても、レオンとレオナには何か大きすぎる違いがあるように思えた。
そしてそれは、レオナがたびたびわたしに甘えるように縋りついてくる事に表されていると思った。
わたしに甘えるように抱きついてくる彼女の姿には、時々、わたしの掛け替えのない友を監禁している人とは思えないほど、哀れな気持ちにさせられるものがある。

椿木レオナはいったい何者なのだろう。

彼女はアンナを殺し、狐を監禁している憎むべき魔物。
だけど、それだけだろうか。わたしは、縋りついてくる彼女の手を払いのけるような感情を抱けているだろうか。
どうしてわたしは、毎晩彼女と共に寝る事が出来ているのだろうか。
レオンとレオナの大きな違い。それは、わたしの持っている印象にあるのかもしれない。
レオンとレオナ……この椿木館の人々は、裁き切れないほどの罪を犯している。そして、その手はわたしと、大切な友である狐すらも脅かしている。それなのに、それなのにわたしは、レオナの柔らかな手に抱かれる事が嫌いではなかった。

「たいした使い魔だよ、君は」
くっくっと笑いながらレオンは言った。
「相手を人食いと分かっていながら、拒みもしない」
違う。それは、狐が人質に取られているから……。

——ミユ……。

ふと、わたしはレオナの声を思い出す。

はたして、わたしは本当に友を人質に取られて身動きが出来ない人間なのだろうか。本当に、レオナから逃れたいと思っているのだろうか。彼女がどんなに恐ろしい事をしていたか、さんざん見せつけられていたというのに。

「図太い君が時々羨ましいよ……レオナに気に入られ、守られている君が……」

何故だろう。いつもは余裕しかない態度を取るレオンが、その日はどこか余裕がないように見えた。何かまずいことでもあったような様子。不安を隠し切れていない様子。ぼそりと零したその言葉は、嘘の一つもない本心のように思えてならない。

「同じ血を……魂を……分け合って生まれたと思っていたのにな……」

その日、そう言って、彼はわたしの前から姿を消した。

わたしが見つめた背。美しい男神のような彼の背中には、彼をのみこまんとする暗い影が忍び寄っているようにすら見えた。わたしの事を嘲笑ったはずの彼が、哀れな姿に見えるのは何故だろう。それはまるで、死ぬ前の蝉がのた打ち回っているのを見つめているかのような気持ちだった。

アンナが死んだ日から、わたしを取り巻く世界は何かに閉ざされ

てしまったかのような閉塞感があって、全てが重たかった。夢に見るのは、アンナの最期。人形のように朽ち果てていったアンナ。そして、そんな彼女をぎゅっと抱きしめる妖艶なレオナの姿。血みどろなその光景が目に焼き付いて、ふとした瞬間に瞼の裏に甦って来る。気持ち悪い。どうしても気持ち悪い。気持ち悪くて苦しい。

いっそ、死んでしまった方がいい。

わたしには狐が――椿木ユマという名を与えられた人がいる。だけど、此処に留まる理由は、本当に、それだけ？

――レオナの元に居座り続けているのは怯えているからというだけなのか……。

考えてはいけないと何度も自分に言い聞かせては、何度もその思考の檻に囚われてしまう。この檻はとても頑丈で、隙間もなくて、ネズミ一匹通れたりしない。わたしはそんな檻の中でただ、時間が流れるのをじっと待つばかりだった。

時間が流れて、その先に待ちうけるものは何だろう。

答えは簡単だ。

わたしはかつて、魔物なんて怖くなかった。魔物なんていないと思っていたし、いたとして、魔物に殺された時は殺された時だと思っていた。だけど、今、こうして、“魔物„に閉じ込められている今、そんなことは露ほども思わなくなっていた。

わたしは、レオナが怖い。

だけど、それだけ？　それだけなのだろうか？

いいや、違う。断言できる。否定しようがない事実がそこにはあった。

――わたしは、レオナに恋焦がれている。

身体だけではなく、心も、もう取り返しがつかないほど、彼女のものになってしまっていた。

14．赤く刻まれた傷は人食いの命を蝕んで

赤い月が窓から見えた時、わたしは背筋に寒気が通るのを感じた。昔のわたしならば、あれを綺麗なものだと感じる事が出来る余裕があっただろうけれど、今のわたしにはもうそんな余裕すらもないようだ。

不吉なもの。不吉な事。それらの類のものに遭遇するのはとても嫌だった。今もあの拷問部屋に閉じ込められている狐の事を案じる今のわたしにとって、赤い月は神秘的なものではなくなってしまっていて、身体が震えてくる。

こうして元の生活に戻してもらった後、わたしは絶対にレオナにもレオンにも歯向かったりしなかった。粗相のないように過ごしてきたし、気を悪くしないように常に気を配ってきた。だけど、それで狐が安全な場所に居るかどうかは、まったく分からなかった。聞くのも恐ろしい。もしも狐がアンナやリサのような目に遭っていたとしたら。

考えても、何も出来ない。

わたしの心は引き千切れてしまいそうだった。肉体的な拷問ではなく、これは、精神的な拷問だ。

親しき友である狐は囚われ、わたしは……人食いの女に恋をしている。どうすればいいか……わたしは、分かり始めてきた。そう。お気に入りの人形のようにしか思われていないかもしれないけれど、警戒されていない部分で攻めれば、勝てるかもしれない。

うまく狐を逃がすことが出来れば、わたしの勝ちだ。そして、わたしは、「椿木」の名を捨てずに、ここに留まろう。わたしはレオナを愛している。だが、椿木ユマと名付けられている者は、自由を求めている。そもそも、わたしが逃げようとしたのがいけなかったのだ。

逃げようと思わなければ、アンナが死ぬことも、狐が捕まることもなかった。

「ミユ……」

いきなり話しかけられて、わたしは震えあがった。レオナだ。いつの間にかわたしの部屋の扉は開けられ、そこにレオナは立っていた。いつから立っていたかなんて知らない。

——お嬢様……。

アンナの声が甦る。ちょっと前まで、部屋に籠るわたしに話しかけるのは、アンナであることが大半だった。彼女がいない今、わたしに話しかけてくるのはレオナ。だが、わたしに話しかけてくるレオナと、狐を捕え、アンナを殺したレオナとの間には、壁があるような気もした。

そう、今日のレオナは怖さがなかった。

「あなたは……私を恨むでしょうね。いいえ、もう恨んでいるのでしょうね。愛を知らなかった私が、不器用な愛を持ち始めたのは、あなたのせいよ。だけど、あなたが悔いる事は何もない。全ては私がやっていること。あなたは運が悪かっただけの事。それだけよ」

「レオナ……？」

問いかけようとして、言葉に詰まる。何を問うと言うのだろう。ただ、わたしは自分でもよくわからないまま、彼女の名前を口にした。時より目に浮かぶグロテスクな光景。少し前にレオナは、その美しい肢体を赤に染めて、アンナの身体を貪っていた。

「ミユ……愛しているわ。あなたが私を拒絶するなら、この世界なんていらないくらいに」

そんな言葉を発する彼女は、数日前のレオンにも似ていた。やっぱり彼らはきょうだいなのだと思う程に。その夜、彼女がわたしに何を伝えたかったのかは分からない。彼女がわたしに求めていることは、一体何なのだろう。殺戮の欲求から逃れる事も出来ずに、意識が混濁するまで人間を貪っていた彼女が、その報われぬ状態の何処かに救いを求めているのだとしたら……。でも、囚われ、人質も取られ、精神的に縛られているわたしに、何が出来るのだと言うのだろう。

一晩考えても、わたしには分からなかった。

次の日、わたしは狐の囚われている場所へと向かった。会う事を許されていないわけではない。

ただ、レオンとレオナの目が怖くて、自分から近づかなかっただけだ。そして、何よりも、狐の姿を見るのが怖かった。暴力の欲求に駆られた彼らの牙が狐に向かった時、狐はどうなってしまうだろうか。そう想像するだけで、狐に対面する勇気がどんどん削がれていく。それは勿論、狐の事が嫌いだからではない。大切であれば大切であるほど、現実から目を背けたくなってしまう事もあるのだと初めて知った。

けれど、その日は、会わなければならない気がした。会うなとは言われていない。そう、言われていないのだ。言われていないから、会ったっていいはずだ。

わたしはそっと、あの部屋へと向かった。

使用人が他にもいるはずなのに、そこに続く道は誰もいなかった。誰も近づきたくないのかもしれない。彼らだって、いつ、自分がそこへ連れていかれるかなんて分からないのだ。

アンナが死んだと言うのに、他の使用人達は何も言わない。表情にすら出さない。ああ、でも、思い返せば、リサの時だってそうだった。

階段が見えてきて、わたしは息苦しさを感じた。あの向こうで、一体どのくらいの人間が理不尽な最期を迎えたのだろうか。あの向こうで、どんな宴が開かれていたのだろうか。それは、ああ、きっと、人間でない者達の宴なのだろう。

重たい扉は、鍵もかけられていなかった。そもそもこの扉には鍵なんてあるのだろうか。奥には牢屋があって、その中に狐は入れられている。こんなに広い館なのに、あんなに狭い所に入れられてしまっている狐。それはまさに、逞しく誇らしい野生の狐が、哀れな形で囚われてしまった図そのものだ。

よかった、まだ狐は見られる姿のままで、牢に入っている。狐だって、伊達に外界でペテン師をやってきたわけではない。生き延びる術ならば、そこらの野良人よりもずっと優れているはずだ。

入ってきた者の足音が違う事に気付いたのか、狐は振り返り、わたしをじっと見つめた。そこでわたしは、狐の着ている物が今までとは違うものだという事に気付いた。

「やあ、猫……じゃなくて、ミユ」

妙に名前を強調する形で、狐は言った。

「俺とお前は、双子ということになるようだよ」

「狐……」

わたしは気付いた。気付いてしまった。気付かない方が狐にとってはよかったのだろうか。けれど、それに気付いたことで生まれたのは、狐への申し訳なさばかりだった。服を脱がされ、暴行を受けただろう。狐の身体の特徴に、レオンとレオナが気付かなかったわけがない。

時には男、時には女であるというのは、狐の武器であり、弱点でもあったのに。

「ユマ」

狐は静かに言った。

「今の俺はユマだよ」

静かに笑みながら、狐——椿木ユマは言った。

「奴らがユマという名前を俺に持たせたのは何故だろう。どうせ殺すのだろう？　アンナとかいうあの姉さんの様に、血も涙もない殺し方をするのだろう？」

「わたしが頼む。ユマには手を出さないでって頼む」

「頼む……か」

ユマは俯き、獄中の毛布にくるまった。

「なあ、ミユ。俺は、外の世界で、法治ってものを侮っていた。そんなもの、邪魔なだけだと思っていたし、弱肉強食でいいじゃないかとすら思っていた。騙される方が悪い。力がない者が生きていけなくなるのは当たり前だってね」

家や族というものを持たない者の暮らす環境は残酷なものだ。そして、その最期もまた寂しいものだった。三週間以上見かけなければ、その者はきっと死んでいる。だが、死んでいたとしても、数か月も経てば忘れ去られる。遺体を見る者もあまりない。

いつの間にか町が処理している場合もある。そういうものだと分かっていたし、それでいいと受け止めている気になっていた。騙し、騙され生き延びていく。信じられるのは自分だけ。他人を騙して生き延びたって仕方ない。そして、他人に騙されて死んだとしても、それは自己責任だ。

……だが、今はどうだろう。

「俺は、今、こんなにも助けて欲しいって思っているのだよ。情けないことに、ミユ、お前が俺を見捨てないか、って、すごく怖いのだよ。お前を助けに行った時は、そうは思わなかった。もしも、こんな気持ちになると分かっていて、それでもお前を助けに入ったかと考えると、分からなくなるのだよ」

項垂れたユマはまるで廃人のようだった。狐も繋がれれば犬となる。だが、その繋がれた場所が悪ければ、負け犬よりも悲しい者となるのだ。

「ユマ……」

「すまないね。助けるつもりが、足枷になってしまうなんて思いもしなかった自分が恥ずかしいよ」

項垂れるユマになんて言えばいいのだろう。なんて言葉をかければいいのだろう。今は何を言っても逆効果な気がした。わたしの気持ちをどんなに必死に伝えても、ユマの心の傷は深まるばかりな気がした。結局、何も声をかけられないまま、わたしはユマの元を立ち去った。

わたしは、どうすればいいのか。

実際は、そんなことを考える余裕もなかった。ただ、ショックだった。狐が狐でなくなったこと。名付けられた名前をそのまま受け入れ、不安に押しつぶされそうになっていること。そして、そうなったのが、自分のせいだということを考えて、わたしはわたしで押しつぶされそうになる。

そんな暗い気持ちで、わたしは部屋へと戻っているところだった。

すべてが急変するとしたら、どうしてこんな日を選んだのだろう。思い出すのは、前日の事。レオナは切実に救いを求めるような声で、わたしに向かって愛していると言った。レオナは一体、何者なのだろう。どうして、彼女の中には怪物がいるのだろう。どうして、彼女はこうなってしまったのだろう。

廊下を歩くわたしがぼんやりと見つめているのは、二つの人影だった。大して暗くもないのに、その二つの人影はだいぶ暈されていた。きっと、目が疲れているのだと思い、目を擦ってから見直した時、わたしは疑問を覚えた。

――なんで、赤いのだろう。

長きにわたる椿館での生活の影響で、頭がおかしくなってしまったのだろうか。おかしくなるにしても、遅すぎる。もう少し早く、苦しい思いをたくさんする前に、狂ってしまいたかった。いや、もしかしたら、わたしはとうに狂っていて、今やっと、それを自覚したのかもしれない。

「ミ……ユ……」

人影のうちのひとつが、わたしを見つけた。真っ赤なそれ。男だ。見慣れた男。整った顔をしている男。だが、どういうことだろう。どうして、彼は、真っ赤なのだろう。まるで、赤いペンキを頭から被ったかのようだ。だけど別に、頭から真っ赤っていうわけではない。真っ赤だと思った顔は、逆に青ざめていた。服のあちこちが赤く染まっていて、壊れかけのからくり人形のように動いている。

そして、こちらを向いている胴体は、何かで引き裂いたように赤い。赤が彼を埋め尽くしている。

――引き裂いたように？

何故赤いのか。その答えは、すぐにわたしにもたらされる。廊下をゆっくりと倒れていくのはレオン。そして、その後ろで立ち竦んでいるのは、レオナ。彼女もまた赤かった。けれど、その赤は、彼女の身体から滲んではいない。そう、彼女を赤く染めているのは、返り血だった。誰の返り血なのか。それは、もう、考えるまでもなかった。

レオンの倒れる音が、わたしの頭の中で響く。

呻き声が床を張って、わたしの耳へと届く。

夥しい血が、もともと赤い絨毯をさらに赤く染め上げる。その赤は、レオンの血だ。どうして、レオンが血を出して倒れたのか。どうして、レオナが真っ赤に染まるナイフを持ったまま動かないのか。思考するのが疲れるくらい、事はゆっくりと起こっていく。

「レオナ……」

レオナは喋らなかった。ただ、血に染まるナイフをもったまま。目は死んだようにどんよりとしていて、その瞳はまるで何も映していないかのようだった。けれど、もしもその中に映ってしまったら。何が起こるかはよく分かる。想像も容易い程の雰囲気が、そこには漂っていた。わたしはすぐに声をかけた事を後悔し始めていた。

震えている。レオナが。仄暗い双眸からは涙に似た何かが零れ落ちて、彼女の蒼白の頬を伝っていく。リサを、アンナを、欲望の赴くままにあのような恐ろしくて残虐な方法で死に至らしめた彼女が、今度は血を分かち合って生まれた双子のきょうだいの命を奪おうとしている。いや、もう、奪ったのだろうか。彼女は段々と動かなくなっていくきょうだいをじっと見つめていた。やがて、レオンが血泡を吹いて動かなくなるまで、わたしはこの二人の姿をじっと見つめていた。逃げるべきだ。だが、動くことが出来ない。下手に動いてはいけない気がして、少しも動けなかった。

「あ……」

やっと、レオナは口を開いた。

「ああ……あ……」

その直後、耳と頭を引き裂かれそうなくらい、高くて、大きな悲鳴が、廊下中に響き渡った。きょうだいを殺したレオナの叫びは、それだけが魂を持っているかのようで、わたしの鼓膜を、そして、目を、強く、強く、刺激した。この叫びは館中に響いただろう。いや、館の外にも漏れただろう。町全体を揺るがすかのような大きな叫びだった。この音が聞こえない人がいるなんて信じられないくらい、大きな声だった。

ことん、と音がした。血塗れのナイフが廊下の床に落ちた音だ。その透き通った音に、わたしはやっと理解した。

——逃げなくては。でも、どこへ。

考えるまでもない。ともかく、わたしはその場を立ち去った。もっと早く立ち去るべきだった。だけど、身体が動かなかった。もしもナイフが落とされなければ、あの透き通った音が聞こえなければ、わたしはずっとあの場で茫然と立ちすくんだままだっただろう。だとすれば、どうなっていたのだろう。わたしはどうなっていたのだろう。

——そんなこと考える必要なんてない。

今はともかく逃げなくては。そう思いながら、その場を去ることだけを必死に考えて、廊下を走り続けた。いったい、なにが、あの場所で、起こったのだろうか。そんな想像をする暇もない。どうして、なぜ、あんな状況が、生まれてしまったのだろう。確かに、レオナは人食いだった。レオンは殺戮を遊ぶ悪魔のような者だった。だけど、この二人は双子であって、きょうだいであって、お互いを憎しみ合っているようには思えなかった。じゃあ、レオナがレオンを殺さないと言い切れるかというと、それは分からないとしか言

えなかった。何故なら、レオナの心は複雑に絡み合っていて、どう動くのか、どう作用するのか、どう働きかければいいか、全く分からないからだ。双子の兄弟と言っても、レオンは所詮、遺伝子が一致しているわけでもない他人なのだ。

レオナではない限り、レオナの事を深く知る事なんて出来ないのだ。それを分かった上で、それでも、わたしを殺さないように気をつけてくれるレオナのことは、やっぱり愛していたのだろう。残酷に殺されていったアンナやリサのことで恐怖と嫌悪を覚えながらも、わたしは、やっぱり、レオナの魅惑からは逃れられないのだ。

じゃあ、今は、どうして逃げているのだろう。

走るわたしの脳裏に、返り血を浴びているレオナが浮かんだ。

「猫……？」

声をかけられて、わたしは気付いた。逃げる事に必死だったわたしは、その逃げ道を理性的に探すのではなく、本能のままに探していたらしい。そして、わたしの本能はかけがえのない仲間の存在を欲した。それが、狐であり、現在の椿木ユマである。

声をかけられるまで、わたしは何を見ていたのだろう。気付けばわたしは、ユマの檻のすぐ前に立っていた。

「猫——いや、ミユ、どうしたんだ？　顔が真っ青だぞ？」

きっと、今のわたしの顔は、極限の状態でいるユマでさえも心配してしまう程酷いものだったのだろう。覗き込むようなユマの視線に、わたしが思考する力を取り戻すには、しばらく時間を要した。

わたしは声を押し殺しながらユマに言った。

「き……ユマ、ここから逃げよう。檻を壊す。どうにかして壊す。だから、早く逃げなきゃ」

「落ち着けよ、何があったんだ？」

「お、おお落ちつけないような事だよ。待ってて、どうにか壊して見せるから」

「そうね、早くした方がよかったわね」

その声が響き渡った瞬間、まるで、背中から刺されたかのような痛さと痺れと驚きを感じた。その声が誰のものであるかは、考えるまでもなく分かったけれど、その声の持つ異様な冷静さは、不気味以外のなにものでもない。さっきまで彼女は、冷静とは程遠い場所に佇んでいた。そこからわたしを見つめる姿はまるで救いを求めている幽霊のイメージそのものだった。それなのに、ここに来るまでに何があったというのだろう。

今、わたしの背後に立っているであろう、椿木レオナは、非常に落ち着いた声で、わたしに向かって、話している。

「でも、もう遅いわ」

振り返る事が出来なかった。けれど、その姿をじっと見つめているユマの目の色で、その姿がいかなるものか想像できた。わたしが説明するまでもなく、ユマには伝わったようだ。レオナの姿は、それだけ異様だったのだろう。

「今度は……何を喰ったって……言うんだよ……」

レオナがどんな顔をして黙っているのか、わたしには分からない。

「あいつは……一緒じゃ……ないのか……？」

ユマは予想がついているのだろう。頭の回転の良さも、狐と呼ばれていた所以なのだから。けれど、すぐに分かった一番の理由は、きっと、わたしの死角にいるレオナの表情、レオナの醸し出す雰囲気なのだろうと、振り向くことのできないわたしでも分かった。

それほどまでに、この、拷問部屋に漂う空気は重たいもので、恐ろしいもので、まるで時が止まってしまったかのようで、誰かが動けば糸が動いて全てがバラバラになってしまうかのような緊張が、わたしの全身に汗を掻かせた。その汗がぽたりと床に落ちた頃、不気味な女の笑い声が、少しずつ漏れだした。

「もう遅い。遅いの。遅いのよ。あなた達のお家はここなの。私を退屈させないで頂戴。血と肉と魂を分け合って生まれたきょうだいが死んだのよ。死んでしまったの。私が、この私が、人食い（カニバリスト）の私が、殺してしまったのよ。ええ、殺してしまったの。苦しくないように、一思いに切り裂いて、そして、死んだ肉を食べたの。分かる？　ねえ、分かる？　あなた達に私の気持ちが分かる？　分からないでしょう？　分かるわけないわ。だって、私もあなた達がどうして私を怖がるのか、分からないもの。ねえ、ミユ？あなたを愛しているわ。今でも、これからも、ずっと。愛しているわ。あなたも、私を愛してくれていた。けれど、ミユ？　あなたは知らないでしょう？　あなたが今まで食べていたもの。あなたがこの館で口にしていたもの。その一部が、何だったか。知らないでしょう？　ねえ、ミユ？　どうしたの？　顔を真っ青にして。美味しそうに食べていたじゃない。私と共に食事をとった日、あんなに美味しそうに食べていたじゃない。ねえ、どうしたの？　顔が真っ青よ？」

変な咳が出始めた。
胃の中には何も入っていない。けれど、何かを吐きださずにはいられないのだ。

レオナが言っていることの真偽なんてどうでもいい。それよりも、わたしは、この場に漂う空気に中てられていた。意識を失わない事が奇跡だった。だけど、ショックだった。レオナに言われた事が直接的に堪えたわけじゃない。吐き気がしたのも、意識を失いかけたのも、レオナの圧力によるものであって、レオナの発言の内容の過激さではないのだ。つまり、わたしにとって、それは、それほどまでに、拒絶的な事ではないのだ。そう。だから、人間を喰ったレオナと接吻が出来た。愛を交わすことが出来た。
つまり、どういうことか。

――わたしも、人食い(カニバリスト)のような、もの。

「……ミユ、しっかりしろ。野良生活を忘れたのか？　このくらいで動揺するお前じゃなかったろ？」

その時、ユマの言葉がわたしの頭に突き刺さった。

「今は何もかも忘れて、逃げるんだ。この檻なんて壊さなくたっていい。お前はここにいてはいけない。ここで無残に死を迎えるよりも、外の日陰でひっそりと迎える死の方がどれだけ恵まれていることか。それとも、ミユ、お前は……ここで犠牲になったアンナの努力を無駄にするつもりか？」

「お気をつけなさい」

レオナがぴしゃりとユマに言った。

「お喋り狐は猟犬にすぐ見つかって喉を噛み切られてしまうわ」

それでも、ユマの毛は逆立ったまま。猟犬に追い詰められてなお、鉄の臭いに歯向かう猛狐のように暗がりから目を爛々と輝かせてレオナを見つめていた。そんなユマへ視線を返し、あしらうように小さく笑んだレオナは、そのぎらつく目でわたしを見つめた。背中から刺さるその鋭い視線は、振り向かせるまでもなく、わたしの心を威圧する。

「ミユ。あなたはどうなの」

落ち着いているようで、安定しない声。彼女が彼女としての意識を保つのに必死という様子の声。わたしを見つめるレオナの姿は、毎晩見てきたレオナそのものだった。不安定な感情の入り乱れる彼女。その不安に追われながら、安らぎを求める彼女。その悲しく苦しそうな目を見て、放っておける者がいるのだろうか。

いや、そんなこと、わたし自身への欺瞞に過ぎない。わたしの中の数少ない良心と、わたしの中に大きく横たわるレオナへの愛情が、戦っていた。嗜み、殺し、そして食らう。そんな化け物に、わたしは恋をした。

けれど……。

「あなたはどちらを選ぶの？」

後ろ髪を引くような声。浮かばれぬ哀れな霊魂のようだ。

どちらを選んだとしても、ユマは助からないだろう。所詮、わたしはレオナの愛玩でしかないのだから、わたしの意見がレオナに通

るわけがなかった。どんなに懇願した所で、レオナはそれを一切受け付けないだろう。
それならば、いっそ……。

「おい……人食い(カニバリスト)……」

その時、ユマが口を挟んだ。

「お前は何をしたいんだ。どうすれば、満たされる？　どうすれば、安らげるんだ？」

細々と漏れ出す問いかけに、レオナの視線がそちらへ向いた。

「人の肉を食らい、引き千切り、その血潮に塗れる事が、お前の安らぎなのか？　暴力に身を浸すことで、お前の心は満たされるのか？」

その問いは、わたしの心の奥底でくすぶっていた言葉にもならない疑問の数々の塊だった。ユマによって初めて言葉となり、今、レオナにぶつかって言った。同時にわたしは、レオナ自身、それは分からないのだろうと察知した。彼女は自分でも分からないくらい、崩壊してしまっている。何がそうさせたのか、生まれつきそうだったのか、わたしには分からない。分からない以上、何も言えない。だけど、この問いによって、わたしはやっと、振り向くことが出来た。返り血に塗れたレオナの姿がそこにあった。血を分けた双子の片割れを自らの手で殺した姿。その姿は、おぞましいというよりも、痛ましかった。

たった今流れている沈黙が、レオナの心を表している気もした。

「食べているわけじゃないの」
それは数分のことだったかもしれないけれど、とても長い沈黙に思えた。やがてレオナはそう言葉を発し、何も宿っていない洞のような目で、じっとわたし達を見据えていた。何故、どうして、そんな問いは、全て、彼女の目の奥へと消えていく。

「愛でているの」

一歩、彼女が近づいてくる。

「全てが欲しいの。好きなだけじゃ物足りない。全てが欲しいから、こうなった」

分からない。
彼女の事が。
やっぱり、彼女は、魔物なのだろうか。

「あなた達も美しいわ。けれど、ミユ、あなたは特別なの。死なせたら勿体無いじゃない。傍に置いておきたいのよ。誰にも渡さない。誰にも触らせない。だけど、苦しいの。あなたを守るのは、苦しいのよ。もっと、愛でたいの……」

狂気を帯びたレオナの笑い声が響く。

「安らぎって言ったわね。そうよ。わたしの安らぎは、満たす事。身体を突き破りそうなくらい、心の底からこみ上げてくるものを発散させたい……」

「ミユ……逃げて」

ユマがすかさず囁いた。わたしも理解している。このままだと、わたしが、殺されてしまうかもしれない。でも、ここでわたしが逃げたとして、レオナは追いかけてくるだろうか。人食いは、牢獄で逃げられないユマに目をつけるのではないだろうか。

レオナの双眸が、わたしの動きを止める。

「ミユ！」

ユマの一喝が、わたしの足を動かした。考えている暇も与えてくれない。最初の一歩目はおぼつか無くてこけそうにもなったけれど、どうにか立て直して、レオナにぶつからずに部屋の入口まで近づくことが出来た。レオナはそんなわたしを目で追っていた。さあ、どうする。ユマに近づくか、わたしに近づくか。

そして、答えは、すぐに出た。

今まで見た事もない顔。その目。彼女が愛と信じている感情の全てが、彼女の頭を狂わした。血に塗れたその姿はわたしの脳を直接刺激し、伝令を送らせる。リサ、そして、アンナの死にざまを、忘れたのか、と。それでも、わたしは一歩、二歩とレオナの様子を見た。彼女はどう動くだろうか。気を変えてユマを襲ったりしないだろうか。そんな心配をのんきに抱え、じっとレオナを観察する。

「逃げて！」

ユマの悲鳴に似た声と共に、レオナの歩くスピードが上がった。その時やっと、わたしの頭は文字で埋め尽くされた。

――殺される。

ユマが襲われるかもしれないという心配は、もはや無用だった。
使用人一人に出会わない館内は、まるで、わたしとレオナしか存在していないかのようだった。それは廃屋に独りきりで残されるよりも恐ろしいことで、また、危険な事だった。けれど、レオナが迫ってきていることを感じる度に、わたしの不安は少しずつ減っていった。もしも彼女が気を変えてユマを殺しに行ったとしたら……考えたくもなかった。でも、いまはそんな不安なんて消えていく一方。あとは、わたしが捕まらないように逃げるだけだ。それだけなのだけれど……。

館内についてわたしの知識なんて孵ったばかりのヒヨコの様なものだ。レオナに叶うわけがない。それでも、わたしは諦めるわけにはいかなかった。わたしが諦めたら、ユマはどうなってしまうのだ。わたしの為に命を落としてしまったアンナは、どうなってしまうのだ。そう、わたしは死ぬわけにはいかないのだ。

レオナとわたしの間には距離がある。その間に出来る事。いつの間にかわたしは廊下の突き当たりに追い込まれようとしていた。すぐ傍には扉がひとつ。そこしか逃げ道はない。
この先はどこに繋がっていた？
それを考えている暇もない。足早に近寄ってくるレオナから逃れるには、そこへ入るしかなかった。

そして、わたしは、一瞬、時を忘れそうになった。
そこにあったのは、階段。だが、見た事もない階段だった。前々から禁じられていた場所だろうか。今はそれを冷静に思い出している暇もない。今にもレオナが扉を開けてやってくる。わたしはとっさに階段を登った。その先がなんであれ、逃げる場所はそこしかない。階段はらせん状で、その上がなんなのかはよく見えない。だい

たい、この部屋が何なのかも分からないし、椿木館のどの位置にあるのかも分からない。

「ミユ……」

そっと呟く様な呼び声が、下から響いてきた。
レオナは怒っているわけではない。ただ、悲しそうにわたしを追っている。でも、その表情に騙されてはいけない。彼女に捕まれば、命はないようなものだ。焦りがわたしを動かし、また、焦りがわたしの足を掬う。多少の怪我なんて全然気にならない。レオナに捕まったら、多少の怪我なんかではすまないのだから。

「ミユ……あなたを……愛している……今も……」

ダメだ。動かされてはいけない。だって、わたしはまだ死にたくないもの。ユマを助けなきゃならないもの。

「どうして……」

レオナの見開かれた両目から、涙がどっと零れ落ちる。

「どうして、なの……」

逃げなくては。早く登り切らなくては。あの声の届かない場所に。
逃げなくては。

「ねえ、ミユ……」

弱々しい声が段々と力を取り戻す。レオナの強い口調は、わたしにとって最もの脅威だ。

「知っている？　あなたを見つけた時のこと。知っている？　私が抱えた感情を。知っている？　私がいつから人を壊すようになったか。ねえ、ミユ。あなたのことを、愛している。だから、守ってあげる。世の中には私のような魔物が一杯いるのよ。そんな魔物から、守ってあげる。だから、ねえ、ミユ。逃げないで。ミユ」

ダメだ。聞いてはダメだ。

「あなたは野良猫の様に生きていたわね。それなのに、ちっとも魔物を恐れていなかった。すぐ傍にはあなたを消耗品として扱おうとする輩もいるというのに、それをちっとも恐れなかった。あなたを見ていると、私が殺してきた女の子達を思い出すの」

足音と共にくっくっと笑い声が聞こえてくる。まだ、階段は続いている。どこまで続くのだろう。そして、逃げ道は開かれているのだろうか。

「ねえ……ミユ……腸を引きずり出す時の……女の叫び声に……興奮を覚えた事はある？　その姿に恍惚を覚えた事は？　ねえ、ミユ。逃げないでよ……。今まであなたの世話は十分してきたでしょう？」

息が苦しくなってきた。段々と近づいて来ている。怖い。苦しい。でも、引きつけなければ、ユマが襲われるかもしれない。

「アンナを殺したことに怯えているの？」

レオナの声が響いてくる。

「それとも、レオンを殺したこと？」

小さく笑いながらレオナは言った。
「そうね、彼を殺すなんて思いもしなかったわ。だけど、殺してしまった。殺してしまったからには、殺してしまった理由が私のなかにあった。ただ、それだけのことよ」
ただ、それだけのことで人を殺すのか。そんな殺人鬼が後ろにいるというの。
「でも、ミユ。あなたの事は守るわ。ねえ、信じられないでしょうけれど、あなたを殺したい気持ちを抑え続けてどのくらい経ったと思う？　ねえ、どうして逃げるの、ミユ！」
声が震えている。苛立っているのだろうか。
階段はあともう少しで途切れる。その先に待っているのは、上階。そこが何処なのかなんて分からないけれど、今さら引き返す事も出来ない。

「……っ！」

登り終えたわたしの周りは、壁に囲まれている。
目の前が真っ暗になりそうだった。周りの何処を見ても、扉なんてない。ここは何処だろう。倉庫だとしても、閑散とし過ぎている。何であるとしても、確かな事はあった。ここは、行き止まりだ。逃げ道は、もうない。
石壁の向こうに逃げ道があるかもしれない。けれど、その逃げ道は、わたしの手には届かないもの。冷たい石の感触だけがわたしの手を冷やしてくる。背後から刺さるような視線を感じながら、わたしは自分の終わりを感じていた。

──せめて、ユマは……。

声にならなかった。

「ミユ……」

彼女の手が、わたしの頬にかかる。爪が、皮膚を抉って、わたしの目を彼女の舌が舐めていく。震えているのは、わたし？　それとも世界全体が震えているのだろうか。どちらにしても、わたしにはもう関係のないことになりそうだ。もうじき、わたしは、バラバラにされて、死んでしまう。

「ミ……ユ……」

そんな未来しか見えなかったわたしの目の前で、レオナは倒れた。わたしは今、目の前で起こったことが理解出来ずに、ただ茫然と倒れたレオナの姿を見つめていた。どうして、なんで、レオナは倒れた？　しばらく見つめ続けなければ理解出来なかった。レオナの背中には、大きな刺し傷があること。そして、彼女自身が、弱っていたこと。

「レオナ……！」

いつからだろう。わたしは彼女への怖さから全然気付けなかった。彼女はずっとこの傷を負ったままわたしを追ってきていた。いつからだろう。いつから、彼女の歩いた後に血が滴り落ちていたのだろう。この状態で階段を登ってきたのは確かだった。いつの間に、こんなことに。いつの間に──。

「ミユ……」

「レオナ、どうして、この傷は、ねえ」

わたしはうまく喋れなかった。なんて声をかけるべきかも分からなかった。

「刺されたのは……ずっと前よ……レオンを殺す前……あいつに……」

「ねえ、レオナ。教えてよ。どうして、こうなったの。ねえ」

「ミユ……」

レオナの美しい手が、散々血に染まってきた綺麗な手が、わたしの頬に触れる。そんな馬鹿な。こんな未来なんて予想してなかった。望んでもいなかった。確かにレオナは殺人鬼だ。アンナやリサだけじゃない。もっと大勢の人間達を殺してきただろう。けれど、わたしはこんな未来を望んでいなかった。曖昧だったわたしの感情が、はっきりと一つにまとまった。

……死なないで欲しい。

「ミユ……これを」

レオナの左手には、鍵が握られていた。

「牢屋の鍵……逃げなさい」

「レオナ……」

鍵を渡される。それがどういうことか。はっきりと分かった。

「……もういい。私はやっぱり、あなたを守れない……みたい……。どんなに頑張っても、どんなに我慢しても、死からは逃れられない。これはきっと罰なのね。ねえ、ミユ？　私、もう、動けないの。これが私への罰なのよ。信じていた人に、裏切られた。そいつのせいできょうだいにも、裏切られたのよ。ねえ、ミユ。逃げて。わたしが、死んだら——」

死んだら——。

レオナは静かに目を閉じ、そして、小さく息を吐いた。

「最期の……命令。『あいつには殺されないで』」

あいつって誰。
殺人鬼のレオナに深手を負わせた奴は誰。

「愛しているわ……ミユ……」

レオナの肌が白くなっていく。白く。白くなっていく。流れていた血が滞っていく。レオナに宿っていた命が、動きを止めた。きょうだいに裏切られた？　あいつって誰。分からないことばかりじゃないか。いや、わたしが苦しんでいるのは、分からないことに囲まれていることが理由じゃない。きっと、わたしが泣いているのは、もっと違う理由だ。相手は人殺し。そう、人殺しなのだ。だけど、わたしを守ろうとしてくれたって言っていた。その言葉に嘘はないだろう。だって、こうなるまでも、ずっと言っていた。

――あいつに殺されないで。

どういうことだろう。あいつって誰だろう。双子を引き裂き、レオナを殺した奴。誰だ。それは一体、誰。

１５．罪人は幻覚に惑わされる

「レオナが、死んだ」
わたしがどんな表情でそう告げたか、自分では分からない。
けれど、わたしの頭は今にも破裂しそうだった。
わたしを見つめるユマの目は、もはや狐の面影なんてなかった。家族を憐れむ子犬のような視線が、ちくちくと痛い。それだけわたしの姿が、寂れていたのだろうか。
血の跡は最初からついているわけではなかった。わたしを追う途中から床に垂れるまでに出血したということだ。止まらない出血。そんな状況でわたしを追っていたということになる。いつ、どうやって負わされた怪我かは分からない。彼女も相当苦しかったはずだ。

「『あいつ』って誰だろう……」
ユマに言ったわけじゃない。ただ、疑問が言葉になって漏れていった。
牢屋の鍵を開ける手も、奇妙なほどに的確で、一切無駄が生まれなかった。それだけ平然といられているのか、否か。
「どういうこと……」
「ここから逃げよう」
訊ねてくるユマに、わたしはただそう言った。

「逃げよう」

「でも……」

「『あいつ』が来る。逃げなきゃ」

「あいつって、誰だよ……」

誰だろう。誰か分からない。でも、誰だとしても、捕まってはいけない。わたしはレオナと約束したのだ。それが誰であろうと、死ぬわけにはいかない。生きて、ここを出なくてはいけない。

「ユマ……」

「分かったよ。とにかく、急げばいいのだろう？」

「急ぐ必要は、ないさ」

いきなり、声が聞こえて、わたしはぞっとした。心臓が止まりそうなくらいだった。何故ならその声は、聞こえるはずのない声だからだ。澄んだ声。爽やかな声。だけどその声の含む感情は、恐ろしい程に黒々としている。

「もう、この館に住む魔物もいないのだからね」

「レオン……？」

まさか。彼は死んだはずだ。だって、この目で見た。彼が死ぬ所を。レオナだって、彼は死んだものと思っていたはずだ。いや、そうなのだろうか。よく考えろ。彼は倒れていた。レオナが傷を負わ

せた。いや、分からない。どうして、レオンはそこにいるのだ。
「レオナは死んだ。この館を継ぐ本物の魔物が死んでくれた。有難う、ミユ。君のおかげであの隙のない化け物に杭を打つことが出来たんだよ」
「わたしの……」
「ミユ！」
不意にユマがわたしの手を掴んで走り出した。向かうのはレオンのいる方向。突進して、そのまま体をくねらせるように避けて、向こう側の廊下へと逃れる。
わたしがレオナを避けた時よりもずっとスマートだった。ユマに引っ張られながら走っているうちに、わたしはやっと理解した。
レオンは死んでなかったのだと言う事。そして、レオナの言う『あいつ』と、レオンはグルだということ。彼らに捕まってはいけない。捕まったら、どうなるか分からない。
ユマに引っ張られながら走っているうちに、わたしはやっと冷静を取り戻し始めた。この館について知っているのはわたしの方だ。段々と走り方にも調子が戻ってくる。あとは、この館に関係する全ての者を疑うだけだった。
そして、わたしは一人の男を思い出していた。
「リカオン……！」
わたし達の走る進行方向にその男は立っていた。手にはライフル銃のようなものが握られている。ユマの手に力が入った。とっさの

判断で、わたし達は廊下から逸れて、隣接する大部屋へと逃げ込んだ。

ここもまた入ったことのない部屋だった。だが、隠れる場所はいっぱいある。

テーブルとイスが並んでいる……使用人達の食堂だろうか。

ユマに手をひかれるままに、わたしはテーブルの下へと潜った。少しだけ、外の様子が見える。テーブルクロスの隙間から、足だけがみえる位置。わたし達が乱暴に閉めた扉がゆっくりと開いて、入ってくる者。男物の靴だけがわたしの目には見えている。

リカオンだろう。銃を持っていた。あれで撃たれれば、もう逃げられない。

わたしとユマは息を潜めて彼の動きを目で追った。

この場所にいたとしても、いずれは見つかってしまう。そっと移動しながら、距離をはかった。もう一つ扉があったはずだ。だけど、もしもその扉が施錠されていたら。そう考えると、扉はもうひとつしかない。

「出てこい。浮浪者ども」

リカオンの鋭い声が響いた。

「大人しくすれば殺しはしない。俺は殺すように命じられていないからね」

嘘だ。わたしの直感がそう言っている。

もしも、レオナの言った『あいつ』がリカオンだったとしたら、彼の忠誠なんてたかが知れている。わたしもユマも黙ったままリカオンの様子を見た。彼の足音が響いて、やがて、椅子を動かす音が聞こえ始めた。テーブルクロスの下をめくって、ひとつひとつ見る。

視界が悪いおかげで、いきなり見つかる事はない。でも、それも、時間の問題だ。

わたしの手を握るユマの手に力がこもった。何かの合図だと言う事はすぐに分かった。静かにその時を待って、わたしは集中した。そして、リカオンが次の椅子を動かした時、ユマが動いた。

何をしたいかはわたしにも分かった。ユマの動きには無駄がなく、まっすぐ扉だけを見て走っていた。わたしはせめてユマの荷物にならないように必死で走っていた。銃声が響く。怒声も響いていたけれど、混濁したわたしの頭には入って来なかった。

ただ、わたし達が走るすぐ傍の蝋燭立は撃ち飛ばされ、テーブルクロスも破かれてしまっていたのは分かった。

その間、数秒程だっただろうか。

ユマが扉を蹴っ飛ばし、開けた。入ってきた時とは違う扉だ。もし開かなかったとしても、わたし達とリカオンとは距離があった。

リカオンが何かを叫んでいる。

でも、わたしの耳には届かない。

施錠されていなかった部屋の先は通路。小さな通路。入った事もなければ存在すらも知らない通路だ。通路？　いや、厨房なのだろうか。変わった作りの部屋だが、じっくりと見ている暇もなかった。

「今の音で奴が来る」

ユマの焦りはそこにあった。

「あいつらがレオナを殺したんだ。あの人食い（カニバリスト）を殺したんだ。人殺しには変わりない。今に天罰が下る」

握る手の力は強く、その口調もまた強いものがあった。
「だが、その天罰の前に死んでしまったら元も子もない。どうにかこの館を出よう」
そして、通路が終わり、扉が開かれる。その先にあったのは、大食堂。ああ、わたしはかつて、ここで食事をした。そう、どうやって作られているかもよく分かっていない豪勢な食事を、口にしていた。レオナのペットであったあの頃。何も知らずに過ごしていたあの頃。この場所で食事をしたあの頃。
もはや、全てが、懐かしい。
ユマの身体に力がこもった。わたしの方は逆に力が抜けた。リカオンはきっと追ってきているだろう。そして、通路は一本道。そう。大広間の扉を塞がれれば、どうしようもない場所にいる。
「やあ、奇遇だね、御二人さん。運命を感じるよ。君達がここに来た事にね。そして——」
もう、逃げ道はない。
後ろから番犬が追いついて来ている。
「自信を持てたよ。君達のおかげだ。魔物を殺せたんだからね」
「自分のきょうだいを魔物だなんて——」
「魔物だよ」
ユマの言葉を遮って、レオンは言った。

「あいつは魔物だった。生まれた時からね。生粋の椿の血を引く魔物だったんだ。俺とは違うんだよ。扱いも、存在も、能力も、精神も、魂も、何もかもね！」

レオンの目が大きく見開かれる。

その姿は、愛に狂ったレオナの姿にそっくりだった。

「ほんの少しの運だ。もしも運が悪ければ、俺は本当に死んでいたさ。レオナが冷静だったとしたら、俺もリカオンも綺麗に粛清されていただろうよ。だが、ミユ。君のおかげだ。君がいてくれたおかげで、レオナは冷静でいられなかった」

「聞くなよ、ミユ」

ユマがすかさず声をかけてきた。けれど、もう遅い。レオンが言っているそれは、わたしが一番頭を抱えていたものだった。レオナが死んだ原因。そのことについて考えてしまったら、わたしは、わたしでいられなくなってしまう。

「ミユ……」

「どうしたんだい？　俺は感謝しているのに。それとも、寂しいのかい？　ミユ。君はレオナに愛されていたからね。横取りしたくなるほどに大切にされていたからね」

くっくっと笑う顔に、わたしは気持ち悪さを感じた。もう逃げ道なんてない。後ろにはすでにリカオンが来ている。もうわたし達に逃げ道なんてない。そう思った。

わたしが見ているのはレオン。傷なんて一つもない。あの血は何だったのだろう。わたしが見たあの血は。レオナのものだったとい

うのだろうか。いや、違う。絵具でもなんでもない。あれは一体何だったというの。

「本当に感謝しているよ。これで俺が椿木家の長。ミユ、お前がいなければ、ユマ、お前が忍びこんでミユを迎えに来なければ、レオナを殺す事なんて出来なかった。出来なかったんだよ。だが、残念だ。君達と俺達とは共生出来なさそうなのだよ」

かちゃり、と音が聞こえた。ユマと繋ぐ手に力が籠る。引き離されたくない。だが、リカオンの手が、わたし達の繋がりを引き裂こうとし始めた。その時。

——地鳴り。

地震だったのかもしれない。少し強めのもの。だが、地震というにはとても奇妙な揺れだった。そう、まるでそれはポルターガイストのようだった。床が揺れているとは思えない。揺れているのは家具。そして、壁。地面が揺れているのではない。物体が揺れている。その奇妙さ。その不意打ちに、わたし達はしばし狼狽した。

そして、その瞬間は訪れた。

——……！

わたしが耳にしたのは、家具が揺れてぶつかり合う音。それだけだった。けれど、それだけではなく、その間に呻き声が入っていたのは否定しようのない事実だ。

わたしとユマの目の前で、それは起こった。それまでわたしは幽霊の存在を頑なに否定することはなかったけれど、根っから信じているわけでもなかった。だから、その時に見えたものが、何なのかなんて分からない。ただ、わたしは、レオンの背中に覆いかぶさる

ような女の姿を見た。蒼白な顔。乱れてもなお綺麗な髪。そして、感情など忘れてしまったかのように闇に光る瞳。
その姿は、彼女にしか見えなかった。

「レオナ……様……」

リカオンの捻り出すような声が、すぐ後ろから聞こえてきた。

全ての物が揺れる部屋で、ひとつの物が音を立てて飛んだ。
それは、銀色の光を放ち、蒼白なレオナの顔に向かって飛んでいく。もちろん、レオナにぶつかることはなく、それは、すぐ隣に存在するレオンの首をかすって、壁へとぶつかっていった。気付けばそう、今度見るその姿は確かなものだ。そこにはレオンしかいなくなっていた。レオナの幻影は消えていて、そこにはレオンしかいなくなっていた。レオンの首からは血が勢いよく飛び出して、暗闇を赤色に染めていく。

その光景は、あの時、わたしが見た偽りの死よりも明確な死で、疑いようのないものだった。

「あ……ぐぁ……」

レオンの身体が崩れ落ちる。血は止まることなく、どんどん溢れて様々なものを赤く染めていく。気付けば、全ての揺れは治まっていて、何事もなかったかのように静まり返っていた。わたしもユマも言葉を忘れ、その光景を見つめていた。

時間が凍結する。
あるのはレオンの死体のみ。まだ生きているのだろうか。いや、もう手遅れだ。わたしが見たレオナの幻影。それは、ユマには見えたのだろうか。だが、もうレオナはいない。影も形もなかった。あ

れは一体……。

「ああ……」

そうだ。リカオンも見たはずだ。

「ああ」

狂犬の叫びが木霊した。わたしが振り返った時、リカオンはすでに走り去った後だった。追いかけなければ。何故かそう思った。

リカオンはわたしとユマが隠れたあの食堂まで走り続けると、迷わずに廊下へと出ていった。わたしはそれを夢中で追った。ユマもついて来ている。でも、リカオンが逃げているのはわたし達からではない。やがて、リカオンが発砲した。天井へ向けて、いや、何処へ向けて発砲しているかも分からない。

ただ、リカオンは確実に「何か」と戦っていた。

「どうしたのだろう、狂っている」

ユマが呟く通り、リカオンのその騒ぎは館中に響いた。

凶暴な野良犬のようにリカオンは騒ぎ、そして、館の出入り口付近——玄関広間の大階段へと向かっていった。階段を足早に登る彼を見た時、わたしはまた、幻影を見たような気がした。リカオンも同じ物を見ていたのだろうか。それはもう分からない。

気付いた時にはリカオンは足を踏み外し、大階段の上から下まで転げ落ちていた。

その姿を見つめる冷笑。
一瞬だけの幻だった。
その幻に囚われて、わたしは暫く動けなかった。
拘束の魔法を解いたのは、騒ぎに駆けつけた若い使用人の悲鳴だった。

「……ミユ」

ふと、ユマが声をかけてきた。
使用人の悲鳴の後、次々にこの館に住む者達が集まってくる。この館のなかで繰り広げられてきた惨劇に慣れている者達も、そんなものの存在すら知らない者達も、皆、リカオンの哀れな姿にハッと息を飲んだ。

「ミユ」

もう一度声をかけられて、わたしはユマを見た。

「逃げよう。今しかない」

逃げる。
逃げられる。
そう、逃げられる。

その言葉が頭に入ってくるのには時間がかかった。

そこからは、もう何を考えている暇もなかった。出口を見張る者はもういない。そこから逃げたとしても、追う者もいない。わたしを椿館に引き留める鎖は、もう、粉々になってしまった。

椿館を抜けだすわたし達を、月が見降ろしていた。椿木の血を引く双子が死に絶えたこの館がこれからどういう未来を紡ぐのか。一歩、外へ出たわたしには、もう、関係のないことだ。ただ、ミユという名前。そして、心に深く刻まれたこの記憶だけが、わたしと椿館との切っても切れぬ関係となるだろう。

逃れられないと思っていた狂気。椿館が段々と小さくなっていく。暗闇に紛れるわたし達の背中の向こうで。

——愛しているわ、ミユ。

レオナの声が一瞬だけ間近で聞こえた気がした。

16. 人食いは恋をして

あの子が汚らしい路地裏に消えていくのを初めて見た時、私は思わず追いかけたくなった。
でも、それが出来ない状況にあったことが、とても腹立たしく、忌々しいものだった。
ここで見失えば、一生見失うかもしれない。

そう思うと手を出さずにはいられない。そして、どうするのだろうか。今度はあの子を食べようか。結局、その日はあの子を見失った。私は後悔した。あの子が欲しい。あの子を探したい。どうしても見つけたい。

けれど、すぐにその悩みは解消された。あの子はこの館の傍に巣食う野良人。名前を捨て、生まれ育った家を捨て、生い立ちすらも捨ててしまった彼女。ただ、猫とだけ呼ばれ、この界隈で魔物を恐れずに動くことのできる数少ない野良人。

その綺麗な色の髪、輝いた目、可愛い耳、鼻、口、しなやかな肢体、小さめの手、細めの身体、形のよさそうな胸。彼女の全てが好き。

気付けば、私は、あの子ばかりを探していた。
あの子が欲しい。あの子の全てが欲しい。
そうして、わたしはやっとあの子と会えた。

「答えて」

わたしの言葉に、あの子は呆然としていた。面と向かっていて、

想ったことは沢山。私はこの子を殺すかもしれない。でも、欲しい。この子が欲しい。どうしては分からない。ただ、それは、綺麗な娘をバラバラにしたいという欲求とは全く違うものだった。この気持ちは一体何なのだろう。

「分かった」

あの子が言った。

「行きたい。だから、あなたの名前を教えて」

手に入れた。憧れの子。影の中に住んでいながら、闇を知らないその双眸が、私の心を操ってくる。彼女の事も食べるのか。いいや、私は彼女を守りたい。

この子は特別な子。
この子は特別な子。
この子は特別な子。

握る手はとても温かく、血の通っていることがよく分かる感触がして、私の喉の奥を唾（つばき）が通って行った。

殺すな。

そう、この子は私の子。誰にも触らせない。誰にも渡さない。それは、私を支配する欲望も同じ事。もしも、私がこの子の内臓を見たいと言っても、私はそれを許したりはしない。この子が欲しい。でも、この子を殺したくない。人形のような子。私の大切な子。この子だけは、この子だけは、町の魔物、そして、私の中に巣食う魔物から守りたい。

「私の名前はレオナ」

——人食いよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
https://novel18.syosetu.com/n3862bc/

椿色飾る人食い

2021年6月8日12時30分発行